

関東水郷友会

昭和59年4月

第15号

山
女
草





渡辺紙工業株式会社

取締役社長 渡辺 金三

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店工場	東京都足立区中央本町 5 丁目 22 番 12 号 Tel 849—6611(代)
” 関宿工場	千葉県東葛飾郡関宿町大字台町 2192 番 Tel 0471—96—1721(代)
東京支店営業所	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 8 F> Tel 861—2331(代)
名古屋支店工場	名古屋市西区又穂町 3 丁目 13 番地 Tel 521—8111(代)
大阪支店 工場	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
九州支店 工場	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳 884 番 1 号 Tel 09297—6—2211(代)



渡辺製袋株式会社

取締役社長 渡辺 金三

本 社	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
東京支店	東京都台東区柳橋 1 丁目 20 番 4 号<久月ビル 8 F> Tel 861—2331(代)
大阪支店	大阪市城東区今福西 3 丁目 2 番 24 号 Tel 939—1281(代)
藤岡工場	栃木県下都賀郡藤岡町内町 4938 番地 Tel 028262—3321(代)
兵庫工場	兵庫県加古郡稲美町蛸草 1438—1 番地 Tel 0794—95—0257(代)



ご挨拶をかねて

関東氷上郷友会会長 伴仲信次

新春を迎え、皆様ますますお元気で活躍のことと存じます。

多事多難な昨年ではありましたが、師走の総選挙において「丹波から代議士を」の悲願が、西山敬次郎さんの当選でめでたく達成できたことはご同慶の至りでした。西山さんにお祝いを申しあげるとともに、ご自愛の上ご活躍のほどを期待申し上げます。

関東氷上郷友会も、明治二十九年に誕生して既に八十八年、人生でいえば今年は米寿を迎えたこととなります。当時帝大の学生であった安藤広太郎さん（第四代郷友会会長・農学博士）、田昌さん（後の大蔵次官・衆議員議員）たちの肝煎りでこの郷友会がつくられたことを思うとき、その若さと愛郷の心情にただただ頭の下がる思いです。

幾多諸先輩の築いてこられた歴史ある郷友会ですから、若い会員の方々も積極的にご参加いただき、ますます盛んな会にしたいと念願する次第です。何とぞご支援ご協力のほどを切にお願い申し上げます。

近年、旅に出て驚くことは、服装がよくなったこと、東京と変らぬ立派な建物がふえたことです。人の動きの激しさも国情の活発さ豊かさとして喜ぶべきことでしょう。

またテレビの普及や宇宙衛星の発達に伴い、今日発表のバリ・ファッションが今日のうちに山間部にまで見られる、といった具合で、服

装の地方差もなくなり、ローカル・カラーが薄れていくことに一抹のさびしさを覚えるのは、私だけの感傷でしょうか。

私たちの育ったころの農家には牛小屋があり、稲こき、稲すり、米つきなどの作業場、薪木、割木、藁、養蚕具、食料などの貯蔵場、穀物を乾す広庭、稲架の丸太や農具の置場など、屋根裏、天井裏から軒下まで有効に利用する、主屋と寄屋からなる屋敷構えが、大小こそあれ一般農家のパターンでした。

私は大正二年に出郷し、建築の道を歩みましたが、たしか昭和五年の七月、まず農家の炊事場・台所を改良して生活改善を計らねばならぬ、なんて大へん生意気なことを考え、『農村台所の改善について』という一文を丹波新聞に投稿、連載されたことを思い出します。

戦後の農村の変化にはまことに目ざましいものがあります。また近年の科学技術にも目を見張ります。コンピューター、パソコン、ファクシミリ等々、何と目ざましい進歩でしょう。

この新時代の流れに取り残されぬようにと、気はあせりますが、頭と体がついていけないような不安と焦燥を感じる今日このごろです。あれこれと、越しかた行く末を思うと、転た感懐に堪えず、駄文を草して責を果たす次第です。

（昭和五十九年一月十日記）

転 あり七十の生 除夜の鐘

冥府にはまだ用ありじ 老いの春

とその酔い 冥府へ続く道すがら

水

第15号 目次

山ざる 第15号 目次	
表紙画 常岡文亀画『鉄線・江戸紫』(部分)	52
五十二年六月・自作花 (伴信次氏蔵)	53
俳句除夜 松山幸逸作(自筆)	54
ご挨拶をかねて 伴信次	55
五十八年度祝寿会	56
おすこやかに 長寿を 音無太美子	57
五十八年度総会・懇親会	58
西山新衆議院議員誕生——丹波人の意	59
地を貫いた選挙戦——足立克巳	60
村上末吉氏・黄綬褒章受賞	61
【特集】 さようなら松山さん	62
山ざる誌育ての親・松山幸逸氏逝く	63
弔詞 伴信次	64
松山幸逸と私 足立順治	65
竹水さんを偲びて 須原 清	66
松山さん 常岡幹彦	67
しのびぐさ 西崎 祥	68
松山幸逸さんと丹波 畑 光	69
松山さんと水上囲碁会 足立 正	70
別れ 木村つた江	71
風雪に想う 足立かをる	72
山ざる誌・丹波・香港	73
そして清瀬のこと 木呂子恵美子	74
病中雜記 植村章子	75
座禪 吉住重造	76
信を人の腹中に置く 小杉武生	77
首振り二〇年 若森敏郎	78
めぐり逢い 上山 顕	79
高齢化社会と21世紀の年金 坂本重雄	80
卵黄油で人生が変わった	81
という人もいる 村上末吉	82
柏原が舞台の短篇小説・井上靖の	83
「佐治与九郎覚書」 小林武生	84
ザとダの発音・区別の苦勞 田中 寛	85
【対談】 曹禪寺を訪ねて	86
現代人における密教の世界——映画・	87
『空海』鑑賞のすすめ 堀井隆川	88
松喰虫に荒らされた郷土の山	89
旅情 田辺輝一郎	90
水上農高女子バレエボール 秋元多美子	91
——あかぎ国体で全国制覇——	92
【揭示板】	93
【話題】 常岡幹彦氏の日本画展	94
日本さくらの女王出る	95
【出版】 谷垣正雄著・水と兵隊	96
坂本重雄著・公務員の社会保障	97
【会合】 「山ざる」会	98
柏高三十年・第七回卒第二回同期会	99
柏陵同窓会東京支部総会	100
ゴルフ同好会報告	101
関東水上郷友会	102
昭和五十九年度・新春役員会	103
【寄付金】	104
【会費領収報告】	105
囲碁会成績	106
【関東水上郷友会の沿革】	107
【関東水上郷友会会則】	108
【昭和五十八年度決算報告書】	109
【お便り・短信】	110
【訃報】	111
【一年おくれの丹波のニュース】	112
【広告】	113
関東水上郷友会・会員名簿	114
あとがき	115
巻末	116

五十八年度祝寿会

五十八年度に八〇歳を迎えた郷友を祝う恒例の「祝寿会」は、さる十一月五日午後一時より千代田区大手町の竹橋会館・丹頂の間で開かれた。今回お招きした祝寿者は左記（順不同）の五名であった。

市原このゑさん（市島町出身・杉並区）

岡田一雄さん（山南町出身・取手市）

東郷 茂さん（加西市出身・板橋区）

村上大憲さん（氷上町出身・大田区）

村上 豊さん（青垣町出身・大田区）

岡田さん一人が欠席のほか四名が出席され、常岡幹彦氏司会のもと、伴仲会長から祝詞につづいて記念品目録と花束を贈呈、並いる会員の拍手につつまれて長寿が祝福された。それに応えて長寿者を代表して村上大憲さんから次のような謝辞があった。

「今日は八〇のお祝いをしていただき誠に有難うございました。若いときから人生五〇年と聞いていましたが、こんなに長生きをしました。私は寺の住職をして今も活躍していますが、まだまだ元気です、ときには七〇歳ぐらいに見られています。寺の過去帳を見ると昔は大い五〇代で亡くなっています。わが国も今や世界一の長寿国になりましたので、今日では八〇歳以上生きなければ長寿者に入ってもらえません。私たちもまだまだ頑張りますので、私たちより若い皆さんも



どうか健康を通していただきたい。(十月三十一日付)

また東郷茂さんと市原このゑさんから次のような謝辞が寄せられた。

東郷茂さん

うれしくも傘寿祝いけり菊かほる

本日敬老祝寿の立派な記念品を御恵送下さいまして感激しております。御芳情有難く厚く御礼申し上げます。尚十一月五日はお招きいただき有難うございます。是非出席して親しく御礼を申し上げたいと思っています。先は右御礼まで。

市原このゑさん

今年も残り少なくなりました。去る日には私如き者までお招き頂き、傘寿のお祝に預り記念すべきお品を頂戴して有難うございました。尚本日はその節の記念写真をお送り頂き、重ねて厚く御礼申し上げます。郷友会の方々と思うとなんとなくなつかしく嬉しく、失礼を重ねた事と存じますが悪しからずお赦し下さいませ。寒さの御御一同様御自愛下さいませ。かしこ。(十二月十三日付)

写真は向って右から村上豊さん、謝辞を述べる村上大憲さん、市原このゑさん、東郷茂さん。

昭和五十九年度祝寿該当者芳名

今年満八〇歳(明治三十七年生れ)をお迎えになる郷友にお心あたりの方(ご本人ももちろん)は、会までぜひおしらせください。

今年の祝寿会は十一月上旬中旬を予定していますが、現在わかつている該当者は左記の三氏です。

上山顕氏 荻野完二氏 藤尾ちゑ子さん

おすこやかにご長寿を

音無太美子

(春日町・黒井)

祝寿をお受けになりました方々、誠にお芽出とうございます。益々お健やかに御長寿をと祈り申し上げます。わがこと申しますようで恐れ入りますが、丹波にいます私の母は本年百歳を迎えました。二〇歳もお若い皆様、まだこれからでございます。どうぞ続いて下さいませ。やりませし満百歳と新聞に大きく出でし晴れやかな母

* NHKにお達さんとして推薦させていただきました私たち柏原高等女学校での恩師・高野康慶先生の放映を皆さまご覧になり、お元氣の様子にお喜びなさいましたことと存じます。

あこがれし端正の恩師半世紀 経ちて品よき翁となり給う
自作曲うたう恩師のすみし声 テレビに聞きて偲ぶ青春

八十七歳の恩師は、ピアノの発表会の 迫りて多忙と健やかに云う
私も数え年七〇歳、左の近況でございます。

道の端に歩みをとめて腰のぼす 老いのわれとなりたり
敬老の日に招ばれてわれも七〇歳 腰のぼし舞の踊に扇持ち立つ
梳きながら抜毛の多し朝毎に 秋の深きは木の葉髪とぞ
母の日に写真よこす娘電話の娘 胸あつく息子のビールを受く
われのこと嫁に頼みて帰りゆく 娘も今は三人子の母
故郷より帰り気付かず話すわれに 丹波訛をみな笑ひぬ
幸せを見出だし見出だしよろこびとし、感謝の日を送っております。

五十八年度総会・懇親会

祝寿の会にひきつづき五十八年度の関東水上郷友会総会および懇親会が開かれた。常岡氏の司会で伴仲会長の挨拶のあと足立正理事から役員改選の議案が提出された。全役員の留任をお願いしたほか、昨年と今年祝寿を受けられた上田鉄太郎氏と村上大憲氏を顧問に推す件、前会計理事下中昭男氏が大阪へ転勤転居のため理事引退の件、顧問松山幸逸氏と理事永井常資氏逝去のため除外の件、新たに波多洋三、田中寛、宮野近、山内隆行の四氏を理事に選出の議案が承認された。

つづいて吉住重造監事から五十八年度の会計報告があり承認された。なお会費が年々減収の一途にあることが報告され、会員への協力を呼びかけてほしいとの要望があった。

関東水上郷友会新役員 昭和五十八年十一月五日・五〇音順・敬称略

名誉会長 有田喜一

顧問 足立三治 上田鉄太郎 植村章子 上山 顕

小谷正雄 小林武治 西川政一 村上大憲

渡辺金三

会長 伴仲信次

副会長 村上末吉 渡辺隆男

監事 須原 清 吉住重造

理事

秋元多美子 芦田重秋 芦田律子 足立和巳
足立かをる 足立謙悟 足立誠一 足立正
足立 徹 小川晴通 荻野 武 小田富士夫
木村つた江 小杉武生 小谷正巳 坂上勝朗
高見嘉都司 田中篤郎 田中 寛 谷垣正雄
常岡幹彦 田 英夫 西崎 祥 波多洋三
藤田正雄 前田和市 宮野 近 山中一朗
山内隆行 山本清士 若森敏郎(以上四六名)

*

懇親会は田参議院議員の挨拶、西川政一氏の乾杯の音頭で始まり、円卓それぞれ郡内六町に分かれて談笑し杯を重ねた。また今年は郷里から谷口柏原町長、杉本春日町長、田中氷上町長、木下市島町収入役、小前農高校長等も出席され、それぞれに郷土の現状が報告された。柏原に赤十字病院や体育館が新築されたこと、石生地区に大工場団地計画のこと、台風一〇号の被害が二〇億に達したがその復旧に全力をあげていること、新道路の建設計画、また郷土への注文をどしどししてもらいたいなど、次々の熱弁にみな感懐ひとしおの態であった。

なおまた会員の岡田一男氏のご好意で、氏が経営する銀座のザ・トップクラブからバンドとコーラス女性七名の出演あり、デカンショ節ナツメロなどに幼き日の郷愁つのもり、去りたい思いに時を忘れた。

*

祝寿会・総会出席者(順不同・敬称略)

祝寿者 市原このゑ 東郷 茂 村上大憲 村上 豊

来賓 谷口 務(柏原町長) 杉本喜八郎(春日町長)



来賓

田中玲三（氷上町長） 木下軌一（市島町収入役）

小前 毅（氷上農高校長） 浅野重幸（神戸新聞社）

福島弘三（兵庫県東京事務所）

会員

有田喜一

伴仲信次

西川政一 渡辺金三

足立三治

植木伍鹿

上山 顕

足立順治

後藤豊次

小林武治

谷垣正雄

須原 清

芦田 坦

波多洋三

荻野一雄

有田 毅

田 英夫

足立昌彦

荻野泰次

吉住重造

岡田一男

藤田正雄

芦田律子

足立かをる

渡辺隆男

常岡幹彦

田中篤郎

神田敏博

足立 正

西崎 祥

足立謙悟

田中 寛

（以上四三名）

*

写真上||祝寿会・総会の記念撮影。

写真下||氷上郡六町が分かれて六つの円卓を囲む懇親会のスナップ。

*

神戸新聞が五十八年十一月六日の朝刊は『デカンショ節で親交』の見出し、写真入りで、この氷上郷友会の祝寿会・総会の模様を紹介した。出席した浅野記者の報道記事である。

西山・新衆議院議員誕生

— 丹波人の意地を貫いた選挙戦 —

足立和巳

(青垣町)



パンザイの歓声に包まれた西山敬次郎氏

“年末選挙、二週間選挙”と呼ばれた衆議院の選挙戦が火蓋を切ったのは、去る十二月初旬のことだった。有田先生が衆院戦に涙をのまれ、不出馬となつて早くも七年の歳月が過ぎ去つていたのだが、その間、議員は三名とも但馬から出る始末を繰り返していた。

丹波へ帰ってよく耳にするのは、「遠阪トンネルを過ぎて但馬へ出ると、道路だけではなくすべてのものがよくなっている」ということで、その声は最近次第に大きくなっていったのである。

衆院選のたびに袂を分けて、双方が不利となつていた藤原三郎氏と西山敬次郎氏との戦いも、有田先生の尽力によって、藤原氏は県議会議員となられたので、今回の選挙こそ、西山氏にとっては絶対に負けない生念場となつていた。また一方、西山氏だけではなく、氷上郡、あるいは多紀郡をも含めた郷土丹波の全域にとっても、負けてはならない選挙戦となつていたのである。

東京に住む私に選挙権はないものの、郷里には多くの知人、友人、同窓生がいるし母校もある。生涯郷土への愛情を捨てきれぬ私には、今回の西山敬次郎氏の選挙が、対岸の火事として放っておくわけにはいかないものがあつた。私にも何かできることはないだろうか。

選挙戦前半の一週間は、両親や友人達に電話でしきりに選挙戦の様をたずねていたのだが、なかなか情報はつかみきれない。幸い十二月十日は土曜休日、ついに居たたまれずに郷里へ向つた。神戸で弟に車を借りて一路丹波へ走り、先ず柏原の西山選挙事務所に立ち寄つた。由良選挙事務局長や市島町長から状況を聞いたが、地区によっては必ずしも有利とはいえない。とくに多紀郡方面が弱いので、明日は西山氏が篠山商店街の歩行者天国を徒歩で遊説される予定だという。私は早速それに合せて行動することを約した。

柏原の選挙事務所を出た私は、石生駅前の親戚、里久彦商店に寄つて投票依頼をしたが、叔父の家は心配無用。その足で氷上の母の実家に寄つて投票依頼。ところが氷上郡の社会党県会議員・村上旭氏の嫁

さんの姉が叔母である。その叔父と叔母を並べて一席、「丹波をよくするには、丹波から国会議員を送り出さなければ」と、一時間近く説得し、実家へ帰りついた頃は冬のとばりがとつぷりと降りていた。両親と話す間もなく、遠阪小学校前の西山選挙事務所の足立緑さんをたずねて小学校時代の同級生を集め、票固めと働きかけの依頼や情報集めなどを話しているうちに、すっかり夜が更けてしまった。

翌朝十一日は、篠山へ行く前に知人や友人に依頼をしているうちに、但馬の伊賀定盛氏の青垣町への積極的な打ち入り情報や自民党・谷洋一氏の越境攻勢、西山氏への批判情報なども耳に入った。大きな危機感を覚えたので篠山行きギリギリの時間まで電話作戦を展開した。

篠山では西山氏の徒歩・握手作戦に従って商店街の端から端まで行動したが、これはかなりの票に結びついたのではないかと思う。

その日二軒、師範時代の学友を廻って東京へ引きあげたのであった。東京で見るテレビの地方開票情報がいかに少ないかを、今回身にしみて知った。胆を冷やしたり胸をしめつけられたりしながら速報を見守ったものだった。それだけに当確がわかった時の喜びと安堵は、たとえようがなかった。わずか二日間を走った私でさえそうである。ましてや西山氏とともに終始戦い抜かれた近親者や地元の方々の喜びと感激は、計りしれないものがあつたろう。

まさに三度目の正直であつた。

佐々木良作氏に次ぐ二位当選という立派な成果は、これぞ西山氏と選挙民である丹波人との意地の表れであつたといえよう。

しかしこのたびの選挙だけで終つてよいものではない。われわれ丹波人にとって西山氏は、今後も絶対に落としてはならない国会議員で

あると私は思う。なおまた西山氏も、将来国会議員を引退されるまでに、今回の当選までに舐められた苦汁の轍を二度と後継者に踏ませないための「けじめ」をつけていただくと同時に、次期後継者の養成を、今から計画されておかれるよう期待したい。

また丹波の先輩国会議員である田英夫氏、梶原清氏とともに、三議員それぞれに立場はちがっても丹波人としての共通した郷土愛のもと、スクラムを組んでのご活躍をも期待するものである。

村上末吉氏 黄綬褒章受賞

本会副会長の村上末吉氏が昨秋荣誉ある黄綬褒章を受章された。建設省の推挙によって昭和五十八年十一月三日付で公示され、菊薫る十一月十八日に皇居で授与式が行われた。

同氏は、昭和二十六年、楠桂工務店を設立、以来代表取締役として社業の発展に努められた。昭和三十六年には旧日本店舗設計家協会を設立、初代理事長に就任、さらに商業施設技術団体連合会の設立に尽力、昭和五十一年に社団法人設立にあたって副会長に選任された。以来建設業界、とくに商業施設にかかわる技術者の資質向上をはかり、業界の発展に尽力されている。

ちなみに、褒章とは、勲章と同様に国の栄典であり、内閣の助言と承認に基づいて天皇陛下から授与されるもので、黄綬褒章とは、業務に精励し民衆の模範である者に授与されるもの。

特集

さようなら松山さん

山ざる誌・育ての親

松山幸逸氏逝く



昭和の初期、報知新聞の記者を振り出しに、同論説委員、政治部長、編集局次長、戦後は報知新聞、東京放送その他もろもろの要職につき、わがマスコミ界を闊歩した松山さんが、五十八年七月二十二日夜半、忽然と去った。心不全、時に歳八二。一献召して寝つかれたままの、いかにも松山さんらしい大往生だったという。改名はつけず、墓石には本名を刻むとか、これまた松山さんの面目躍如たるものがある。明治の気骨を貫いた無冠の帝王、昭和のドン・キホーテとでも呼ぼうか、松山さんの記者魂はまさに脱帽ものだった。総理大臣だろうと日雇人夫だろうと、人の区別をすることがなかった。誰かれなく親しみ、遠慮会釈もなく短刀直入、いかなる話題にも見参し、我を通してはばからない。それでいてめっぽう女性に弱く、無類のハニカミ屋でもあった。かつまたその生涯、好んでボランティア活動に身を挺した。地蔵さまのような慈愛がいつもその心根にあったのだ。

松山さんは「竹水」と号して俳句や歌をつくった。いつも話題の小説を小脇にすゑるこの文学老青年は、こよなく酒を愛し、議論に興じた。ロレッツのあやしくなるころは談論風発、天下国家を論じると思えば人生の機微を解き、破顔大笑するやその豪放かつ赤裸々な心情が、いつも人の心をとらえては解き放していった。

郷里丹波を無性に愛した松山さんの熱情が、この山ざる誌を育てあげた。晩年の松山さんはいつも一人でこの雑誌の編集に没頭して骨身を惜しむことがなかった。松山さんなしにこの「山ざる」誌は存在しなかったのである。

(玄二)

松山幸逸氏・略歴

弔 詞

●明治三十三年十二月・兵庫県水上郡春日町東中に生まる。

●大正十五年三月・日本大学法学部卒業。

●大正十五年四月・報知新聞入社。その後論説委員、政治部長、編集局次長を歴任。

●昭和十七年九月・読売新聞社との合併を機に退社。

●昭和十七年十二月・大産鉱業株式会社へ入社。

●昭和十八年八月・三恵鉱業株式会社へ転属し、同十八年十二月退社。

●戦後、報知新聞社を再興して取締役となったが、間もなくGHQの公職追放令により退社。

●昭和二十六年・東京放送創立に参加し、その後同社考査部長、事業部長を歴任。

●昭和三十六年・東京放送を退社し、広告業の株式会社タイヘイに入社。

●昭和四十年・株式会社タイヘイを退社し、ビルメンテナンス業の株式会社キョーエーに入社、労働者の人事管理を担当して機関誌「キョーエー」を編集。

●昭和五十年・株式会社キョーエー退社。当時TBS会館事業所長を兼務、間もなく悠々自適の生活に入る。

●昭和五十八年七月二十三日・心不全にて歿す。八二歳。

謹んで故松山幸逸様の御霊に追悼の辞を捧げます。

松山さん、あなたが入院なさったことを知り、お見舞に伺ったのはこの十六日のことでした。あなたはげげんな顔で、君たち何をしに来たのだ、と叱りましたが、私たちも、ふだんと変らぬあなたの声咳に接してひと安心を致しました。

その数日後には退院されたと承りましたのに、まさかこんなに早く他界されるとは、あなたも私たちも夢想もしないことでした。

あなたは我々と同じ丹波の山奥でお生まれになりました。鳳鳴義塾を卒業後、日本大学に学ばれ、三木武吉先生の知遇を得られ、報知新聞で活躍されました。終戦後はラジオ東京の設立発起人として放送界に身を投じ、更にはTBSの局長待遇としてテレビ界の発展に寄与するなど、その御経歴はまことに多彩でありました。

またその反面、私たち郷里出身の後輩たちの面倒をよく見て下さり、殊に関東水上郷友会については、熱烈なる郷土愛と持ち前の企画力をもって、その運営と発展に尽くされ、機関誌「山ざる」を発行して逐年その内容を充実し、郷友の絆に育てられた功績は詢に偉大でありました。

私たちは常にあなたの奉仕的なご活躍に甘えながら今日に及んでしまいました。しかし松山さん、あなたの築いて下さったレールを受け継ぎ、我々は関東水上会をより一層盛大にするよう、力を合せて頑張つてまいります。

松山さん、ほんとうに長い間のご尽力、有難うございました。
御冥福を祈つてお別れの御挨拶とさせていただきます。

昭和五十八年七月二十五日 関東水上郷友会会長 伴 仲 信 次

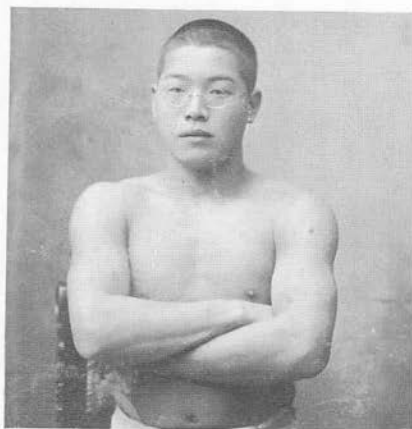
松山幸逸と私

足立順治

(氷上町井中)

藤沢を出て小田急、国電、地下鉄を乗りつぎ、竹橋会館に入ったのは十一時過ぎでありました。その日わが氷上郷友会の総会兼会員高齢者の祝寿会が催されるのでありましたが、まだ開会時には早く、ぼつぼつ古い顔の方々の集まりも始まっていました。豪華な会館のホールの安楽椅子のあちこちで、話し声など始まっていました。

去年、浅草の『麦とろ』での祝寿会ときは、ちょうど私が八〇歳の当り年で、会員の皆さんから祝福をお受けしたのでありましたが、この日、竹橋会館での祝寿会には、もう親友松山君はいなかったのです。あの元気な声で「オイ順、順よ」といつてくれる顔がないのです。開会になって、氷上町グループの隣席には村上大憲さん(当日祝寿の御本人)がいてくれたし、向い側に有田さんや西川姫等の顔も並んでいましたが、山東の方のテーブルにはもう松山君の顔は見えない淋しさでありました。思えば七月に、彼は突然向う岸に行ってしまったんですもの——。松山君のいない「山ざる郷友」の会合は、私にとりましては、それはもうとても淋しいものでありました。彼とは「ヤーヤーアー、オイコラ」の仲だった私には、この日の淋しさひとしおでたまらないものがありました。



大正7年、鳳鳴義塾4年の頃

彼と私の六〇余年をかえり見ますと、若い頃から中年、壮年、老年期と、あるときこのとき、あれやこれやと、走馬灯のように、思い出が次々と浮かび、親友松山幸逸が、眼底と心にしみ入る思いがいっぱいするのであります。先に多紀郷友誌にも「彼への思い出」を少し綴りましたが、そりやもうたくさんさんの数えきれないことが思い出されるのでございます。そのうちでも学生時代の、やんちゃで壮んな頃のこと、ほんとうになつかしいものばかりでございます。牛込鶴巻町あたりでの下宿の生活、本郷三丁目でのこと、駒込林町への用事のこと、若い連中であれこれと談論風発、文学論に花を咲かせた頃のこと、十銭の「かけそば」を食ったり、新宿や神楽坂での酔うほどに蛮勇を振るったこと、浅草で活動写真を見ての帰り道、批評論議に口角あわを飛ばしての有頂天行など、若い頃の思い出はなつかしいかぎりでございます。

あるとき、松山君の兄さんの岩雄さんという当時大森におられた方の主催で、千葉稲毛の海岸に潮干狩りに行ったことがありました。兄

さんには女の子がありまして、その頃六つか七つではなかったかと思
います。その子の手を引いたりだっこしたりして「アサリ」のいる広
い海の泥田でブチャブチャと飛びはねなどして潮干の海を走り廻りま
した。松山も私も一斗マスがゴロツと入るような大きな網袋にいつば
いアサリ貝を入れてエンヤコラサツとかついで岡に上った姿が、今も
目の底に浮かぶのでございます。向うの方に船橋の無線電信の柱が林
立して、ブンブンと風に唸っていたように覚えています。こ
の間松山君のお宅に伺って古いアルバムを拝見していたら、そのとき
の写真がありました。

松山も私も、その頃から女の子が好きでした。

私も松山も早稲田鶴巻町へんで下宿をしていた頃、たしかその頃彼
は学生アルバイト（アルバイトとはいいません、苦学生でした）とし
て司法省で茶くみや受付をやっていたんです。拓殖大学の夜学通い
をして、まだ日本大学には移っていませんでした。彼は初め拓
殖大学の支那語科に席をおき、彼なりに大志青雲の氣を抱いていまし
た。食田百三や吉田紘二郎などの文学論議に花を咲かせたり、花札を
競ったり囲碁の稽古などしていたのであります。彼はその頃から文
学本を読むのがかなり好きのようでした。

日本大学法文学部の夜学を卒業して一発で報知新聞に入社したのは
驚きでした。彼はもう私なんか及ぶところでない境地に入っていたの
ではないでしょうか。時は流れて私もやっと三共株式会社に入社しま
した。二・二六事件や武藤教育総監中将刺殺の頃じゃなかったか、彼
はもうベテランの記者になっていました。横浜の報知新聞支局に勤め
て横浜の下町方面を走り廻っていました。横浜にはご存知のチャブ屋

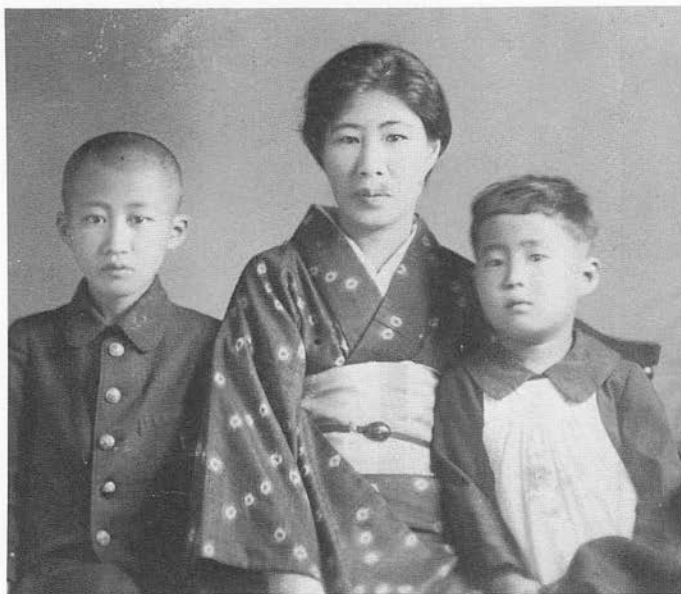
というのがありまして、それから極秘の私設二号紹介屋さんなどとい
うのもありまして、それらの話を彼はことこまかに説明してくれ、大
いに参考になったことも思い出します。

東京の大塚に徳永さんというおうちがありまして、そこには綺麗な
娘さんが二人ありました。姉さんの方は既に黒井国領出の近藤さん
という拓殖大学出の人に約束済みでしたが、同じ拓大通いの松山君
も国領村の同郷のせいでしょう、彼はその徳永家によく遊びに行っ
ていました、私もチョクチョク彼についていったものでした。

松山君はあれでなかなかの多情なもので、徳永家のその妹さんの静子
さんとは格別に仲が良かったようでした。文学少女の静子さんは歌を
善くし、松山君とは時に歌詩の交換をしていたんです。彼が横浜支局
に移った頃はそれがもう全くクライマックスに達して、私な
どはもう驚くばかりでした。多情心の彼は、加えて新聞記者なりの蛮
勇厚顔、もう完全な男盛りで頼もしい男性になりあがっていたのでし
た。

松山君の結婚生活は、その横浜時代からなんですぞ！。丹波氷上で
生まれ、篠山の鳳鳴義塾で鍛え育ち、花のお江戸へ苦学生としてやっ
てきて、当時ではかなり無理な苦学の学生生活をやらかした山猿が、
文明開花の東京で、丹波の山奥では見たこともない美人の麗人・徳永
静子さんにめぐり会い、ついに結婚にまでこぎつけたいきさつは、ま
たなんともいえないホノボノとしてうらやましい限りでありました。
以来幾十年、社会記者から政治記者、報知新聞から読売新聞へ、そ
して戦争、終戦、追放、失業、それから東京放送、TBSと、波瀾万
々文、まるで日本近世史を担いで廻ったような彼でありました。

私が昭和十九年に応召した時は、新聞の方も手すきでありましたので、銀座から目白に疎開していた私の事務所の留守を、適当な人がないまま松山君に頼み、事務所の大将で終戦まで監督してもらったものでした。食う物もろくろく入手できない時に、よく事務所勤めの連中



昭和11年頃の静子さんと長男の隼君、次男の祐君

の面倒を見護ってやってくれたし、疎開先の私の家族まで何の不自由もないほどに毎月ちゃんと送金手当てを続けてやってくれたし、私にはもう無くてはならぬ親友の彼、松山でありました。

彼が池袋の家に住むようになるまでは、横浜から東京勤務になって矢来町赤城下町の時代もありました。彼の家庭生活は、記者務めで多忙なうちに次々と転居したものでございます。横浜での新米記者時代は大へん真面目な熱心記者で、私も彼の家庭をたずねてよく飲み遊んだものでした。牛込赤城下の頃はもうすっかり一家をなす良夫妻の家庭でありまして、隣り近所に篠山鳳鳴出の浦山一哉君や私、それにたしか前田さんに田野井さん、妻君の話し相手には吉村もと子（ともよ）さん等々がいましたし、家庭人での夫婦でもうぼつぼつ夫婦随であったでありましたが、何しろ記者生活というものは家庭を省り見る暇などあったものではなく、家を出たら最後いつ帰ってくるかわからない毎日でした。文学少女だった彼の妻君も、だいぶ違う環境に置かれっぱなしで面くらっておられたことと思います。それに当時はあまりにもめまぐるしい時代でありました。

池袋の昌雲寺の近所に移ってからは、彼はかなり長い間住んでいましたし、私も松山の世話でその近くに住みました。私の家族はそんな借家住いを何年か辛抱したあぐく、少し離れたお寺の裏の方に居を求め、私の二男はそこで生まれたのでした。その後また私の家族は目白寄りの雑司ヶ谷七丁目に移り、そこでもう家移りはいしなないと決めて、とうとう三〇余年を経たのであります。

ところが松山君の家族は、以来ずっと池袋にばかり住んでいて、戦災で丸焼けになった頃は、かの有名な三木武吉さんの彼の女、神楽坂



東京放送時代 上：昭和33年，下：34年

の松が枝のおかみさんの居宅だった家に住んでいたのですが、そこもずっと動こうとはしなかったのです。彼は全く仕事熱心で、家や生活のことなどには関心のない人間でした。庭のある大きな家に住もうなどということはきらいなのか、それに妻君までが右にならえで、いつ池袋の彼の家を訪ねても変りばえのしない家にこじんまりと住んでいる質素な野郎夫婦さんでありました。

彼の博愛家の実績には、また私頭が下がる思いでした。事情のある長男隼君を真から愛しくしみます上に、それにもましての妻君静子さんへの愛情は、私の想像にも及ばないものがあり、大きな腹がまえの彼でありました。戦災で家は焼け果て、戸障子で囲った小屋住いの長い苦住の末に、雑司ヶ谷に焼け残った私の家の留守住いをしてくれていた頃、不自由な生活の中に病気が進む長男隼君がついに力尽きて亡くなり、その悲しい葬送を終えるまでなどは、ほんとうに涙の出るほどの美しい、こまやかな愛情に徹した彼の生活でありました。人

知れぬ、誠一途の生涯の彼でありましたことを、今はつくづくと思うのでございます。

彼の生涯は、家庭は妻まかせ、彼は仕事の鬼、仕事の虫とかけずり廻っていて、外部の連中には誠に良い男とうらやまれていましたが、



ロマンスカーの松山老夫妻



於：棋楽会；昭和57年

家庭に帰れば全くのずぼけた、だらしない亭主のようでした。壮年の頃までは、世情は走馬灯、変りになる頃でもありまして、時に恐妻病の選手でもあった頃も、私から見ればまあ、あったようにも思うのであります。晩年の彼は、家ではもうホトケ様、外では重宝がられての世話男、サーピス男で、ついに一生を通し続けた男でありました。そんな男でしたが、しかし実に繊細な気性の持主で、あらゆることに、深いところまでずっしりと気

を注ぎ、知りつくし、それはそれで頭にしまい腹にたくわえて表に出さず、相手の判断を待って事の処理に当るといふ慎重さを常に持っていたことを私は感ずるのであります。

学生の頃、彼が兄さんから教わったという「紙コヨリ」でいろんなものをあみ、私にも二つ三つくれたことがありました。煙草入れの函や小さいヒョウタン、ネズミなどを紙コヨリで作り、それにニスをかけて叩いても投げつけてもつぶれない丈夫な小細工物をいろいろ作っていたことを覚えていますが、その小器用さ、繊細な心くばりが、彼の人のなりをばぐくんだのではないのでしょうか。丹波の父母より受けついで朱玉の賜物ではなかったのではないのでしょうか。

彼の一生を思うとき、丹波にあられたいくしき深い彼の母御を思わずにはいられません。丹波水上で彼を育てた土の香りと、彼のお母アさん。水上はよいところ、よい人間を産み育てたこよなくよい山河のあるところなんですものねエ——丹波の水上、東の山も西の山も、そして佐治川の清き流れも——黒豆や大納言小豆、山の芋を産む水上の黒いあの土は、彼のような頼もしい好い男をも産み育てたのであります。

山のすそに 黒豆 あずき 生いそぢち

花の都に愛でられてあり

まだ死んでしもたと思えぬ彼を思いしたいつつこの稿を終ります。

(五十八年十月末)

竹水さんを偲びて

須原 清

(市島町・下竹田)

松山さん、昨日(五十八・七・二十四)午後足立正君から貴方の訃報に接しましたが、いまだに信じられません。去る十三日同君から貴方が足の怪我で入院(要町病院)中なので近いうち伴仲さんとお見舞いにご一緒しませんかとの連絡がありました。が、ごく軽い骨折ぐらいとタカをくくって、お宅の方へ見舞いのハガキを差し上げたのでした。お宅へ電話して(モウ退院されているだろうし、イヨウとの元気な声がハネ返ってくることに信じて)ご経過を伺うつもりでいた矢先き、突如、まことに寝耳に水の通知が入ってきた次第です。

松山さん、こんなに早く貴方がわれわれを放っておいで先立たれようとは！ まるで夢のようです。

去る六月六日、銀座のアサヒホールでの『山ざる』会(山ざる一四号刊行記念)ではその編集の御苦心を労いかたがた久しぶりに一同、歓を尽したことです……。

ところで、新派『残菊物語』(三越劇場)の券が入ったのでお誘いしたところ快諾いただき、六階入口で待合い観劇したのは、それから間もない六月十一日午後のことでした。

閉幕後六時半すぎ、近くで一杯！とて貴方のTBS時代からのおな

じみの『以^イわ美^メ』（日本橋本町一丁目）へ。生憎、土曜日のこととて、閉店しているのを、タタキおこし（？）飲みましたね。しかしこの日貴方はなぜか、ビールばかりで……シンミリ……さき程の舞台の余韻に魅せられていたのではないでしようが？……。

松山さん、『以^イわ美^メ』を出てタクシーを拾い、なぜか東京駅で降りましたネ！（珍しいこと）丸ノ内線ホームで（池袋行・荻窪行と）南北に袂を分ったわけですが……。これが貴方との本当の最後のお別れになるうとは！

松山さん、一会一期の重さをこの度ほどしみじみ感じたことはありません。

翌十二日付小生のハガキ（昨夜の礼——エビタイを謝す）に対し、十五日拝受した貴方のは

『過日は大変楽しかった。何分新派の舞台は久しぶりだし、見ごたえもあって堪能しました。また一席もよかったのでこのたびは上乘でした。ありがとうございました。返事がおくれましたが……。』とありました。

松山さん、長い間のおつき合いありがとうございました。至らぬ輩をお見捨てなく温かく包んで下さったご懇情、いくらお礼を云っても云い足りません。

松山さん、関東水上郷友会の機関誌『山ざる』をここまで立派に育成、充実発展させられたご辛勞がこんなにも早いお別れに繋がったのではあるまいかと怖れておりますとともに、編集員とは全くの名ばかりで、何のお役にもたたずじまいに内心慙愧たるばかりで、今更、お詫びのしようとてもございません。どうぞいままでの我儘をお許し下さい。

松山さん、愛誌『山ざる』を除外しての思い出は……何と云っても酒席！

遠く飯能白子の里の常岡邸や、千葉は茂原の『ふるさと村』でのそれは別としても、赤坂、新宿、池袋、銀座、日本橋その他数え切れません。意気軒昂、行くとして可なうざるはなかった——輝かしい時代に培われたなじみのお店で二、三人あるいは数人で静かにあるいは賑やかに飲んだ酒の味は今も忘れられません。

松山さん、貴方の悠々たる呑みっぷり、おおらかな笑顔、ときに茶目ッ気たっぷりな瞳、豊富な話題、折り折りの皮肉っぽいジョークも年来愛読の松本清張や瀬戸内晴美の書評等々。

貴方の在るところ、座はいつも暖かく、話は弾み、それにつれ酒はますます旨くなつて時のたつのを忘れる……。

松山さん、ただいまも目を瞑れば、二十有余年に亘る長い間、貴方と杯を交わしてきた幾多の酒席の情景が、走馬灯のように、忽ちわが脳裏に去来し、その中心には若干超越的ながら、男性的且つこよなく頼もしい温容が彷彿してやみません。と同時に、アノ晩唐の飄逸多感な詩人『千武陵』の次の絶句をいつか口ずさみます。

勸 酒

勸^ム君^ニ金^ニ屈^ス 満^ミ酌^シ不^レ須^イ頹^ス辭^ス
花^ハ発^ハ多^シ風^ニ雨^ニ 人^ニ生^ス足^ニ別^ニ離^ス

松山さん、どうぞ お安らかに……。 （五八・七・二四・松柏誌）

松山さん

常岡幹彦

(柏原町)

松山さんの思い出は沢山あるけれども、私の心にのこっているものは「ワッハッハ」と芯から笑っておられた晩年のあの笑顔である。いつもホレボレと見ていたものだ。絵になる顔であった。

松山さんのお宅が池袋に近いこともあって、郷友会の帰りは地下鉄で御一緒だったり、また、池袋で飲んで御馳走になったりした。西武線で池袋に出ると、松山さんから度々いただいたハガキの一文「池袋に出てきたら電話しなさいよ。一杯やりましょう」を思い出す。

昭和五十二年、二玄社渡辺社長の社用に便乗して真夏の台北に旅し、国賓大飯店で約十日間、松山さんと同室で御一緒したこと、渡辺さんが商用で香港行のあとは、二人で数日を過ごしたが、或る日「たまには洋食にしようじゃないか」と西餐厅に入ったのはよいが、つい中華料理の注文グセが出て、スープ、オードブル、肉料理まで一皿を二人でたべるといふ珍妙な食事となったこと。また、花蓮太魯閣に脚をのばし、アミ族の踊りを見物したこと。一昨年のセントラル個展会場に二度もお越しいただいたことなど……思い出はつきない。

そんな思い出をよぎる、松山さんのあの明るい真底からの笑顔が私は何よりも大好きであった。

(昭和五十九年一月記)



アミ族の簞籠に乗ってごきげんの松山さん（昭和52年7月15日）

しのびぐれ

西崎 祥

(柏原町)

暑中見舞をお出ししようと思っていた矢先のことだった。足立正さんからの電話で松山様の訃報を知ったのは、まさか……。

一昨年、傘寿のお祝いを申しあげたときのことを思い出す。「あんまり長生きすることも目出たいとばかりはいえないよ」と、笑っておっしゃった、あの松山様が……。突如、スーッと消えておしまいになった。長患いもなさらず、お苦しみもなく安らかに旅立たれたという。さすがに松山さんらしいご終焉。

昭和四十八年のこと、突然私のもとに「山ざる四号」とともに達筆なお手紙が送られてきた。「丹波新聞で御活躍の記事を拝見しました。東京には郷土ゆかりのこのような会があり、雑誌を発行していますから、是非入会し、海外公演の模様や感想を書いてほしい」という内容だった。松山さんのお手紙で郷友会の存在を初めて知った私は、早速、その年イスラエルで開催された「国際民族芸能フェスティバル」に参加した感想を、拙い文で綴った。それが松山様を知ったきっかけで、その後は誘われるまま会合にも出席し、多くの立派な大先輩にご紹介していただいたり、私のリサیتالには大勢の郷友の方々を誘ってくださり、会が終れば慰労会だといって批評までしてくださったものだ

だった。またときには山ざる誌への寄稿のおすすめや、お好きな居酒屋へのお招きなど、いつしか十年を数えるお近づきの越し方は、なぜか親しい飲み友達、そして一番年長のボーイフレンドといった感じの松山様だった。

数えきれないほどのご好意を受けながら、何のご恩返しもできないでいるうちに逝ってしまった松山様、お通夜の席でご遺影に手を合わせ、とどかぬ御礼を申しあげる羽目になろうとは……。

*

もうふたたびあの豪快な、惚れ惚れするような飲みっぷりを拝見することはできない。そして杯が重なるにつれて人を選ぶことなく愉快にさせてくださったあのお姿を、二度と見ることはできない。

そういえば最後にお別れたのも銀座の居酒屋。新年会の帰り道、「もうちょっとだけつき合え」とおっしゃって、五、六人で寄り路をし、まさしくちょっとだけおつき合ひして先に失礼したのが、ほんとうのお別れになってしまった。そのときの最後のお言葉はやっぱり「山ざるの原稿頼むよ!」だった。その原稿がこんな悲しいものになるなんて……。

いつお目にかかっても「ヤアー」と大きな声をあげて迎えてくださった。これからも郷友会の集まりに行くたびに、そんな松山様のお姿を、つい探してしまおうことでしょう。

心よりご冥福をお祈り致します。

合掌。

(昭和五十九年一月しるす)

松山幸逸さんと丹波

畑 光

(篠山町)

「山ざる」の編集と、氷上郷友会に情熱を傾けられていた晩年の松山さんは、好々爺そのものだった。いつの頃だったか、「東中風土記」という郷里の記録を単行本にした書物を送って下さったことがある。これは、なかなか貴重な資料であって、学術的な評価は専門家にまかせるとしても、現在に残る春日町の東中という村落の貴重な民俗学的な記録といっても過言ではない。都市化の波に洗われて、伝統的文化や、風俗習慣が忘れ去られ、血縁、地縁の情のある社会生活が破壊されていく中で、生き残っている「古老」といわれる人々が精力的に思い出を語り、今まで残されて来たものを記録しておこうと努力された賜であった。この貴重な資料を東京で出版のために骨身を惜まれなかったのである。また、たまたま氷上郡の出身ながら、多紀郡の鳳鳴中学に学ばれた経緯から、篠山での知己も多く、そういう意味では、氷上郡、多紀郡の両郡に渉る丹波の人的交流の要でもあった。ジャーナリズムで活躍された数々の功績は色々な人々が語られるが、第一線引退後の郷里への献身は、我々知るものがたえなければならぬ。

人間的な抱擁力のある大きなスケールの人だったと今もってなつかしく思い出されるのである。「山ざる」誌が、松山さんの意志を継い

で発行を絶やすことなく、永久に発展することを願って止まない。

松山さんと氷上囲碁会

足 立 正

(氷上町)

松山さんの呼びかけで始まった氷上囲碁会は、第一回が昭和四十六年六月十九日、赤坂囲碁倶楽部で開かれています。(山ざる第三号) 私は「牛に引かれて」の類であったのが、いつの間にか引っぱる側にまわらされてしまいました。松山さん亡きあととも楽しい同好会をもつことができたのはうれしい限りです。

昨年七月九日の会は、その一週間ほど前に松山さんから急にお声がかかって、新島さん宅で催すこととなり、電話連絡で集まっていたのですが、いい出しっぺの松山さんが当日急に不参加で心配していたのでした。七月中旬、伴仲会長と入院中の松山さんを見舞いましたが、その時はたいそうお元気で、この様子ならまだ対局の機会はあると思っていましたのに、それから十日もたたないうちに不帰の客となりました。

松山さんの碁は勘のいい碁と申しますか、とても早打ちで、若々しい碁だったと思います。リズムと勘で打つとでもいいますか、お相手していて楽しい碁でした。好敵手がいなくなつて淋しい限りです。この想いは同好会全員同じであります。楽しい同好会を残してくださった松山さんに心から感謝の念を捧げたいと思います。

別 れ

木村つた江

(市島町)

昭和五十八年十月十一日、この日は私にとって生涯忘れ得ぬ日となりましょう。と申しますのは、この日は夫が急逝した日だからでございます。

前日は体育の日で娘夫婦や孫等は、卓球の試合に都の体育館に出かけていました。前日からこの日は夕食を私宅と一緒にすることになっていました。予定の時刻が一時間も遅れて、夫は待ちくたびれていましたが、酒好きの娘婿の顔を見るなり、ふだんは病気のせいもあり、殆んど口にしないお酒を盃に二三杯美味しいおいしいながら飲みつつ、夫の好物の私の作ったチラシずしを一皿きれいに平げ、「先に失礼するよ」といって寝室に入り、椅子にかけて大岡越前のドラマを見たのです（ふだんは夜のテレビは全く見ない習慣なのですが）そして私は十時半頃夫のベットの横でウトウトしていましたら、「苦しくなりそうだから、さすって」という声で、「またか」と思いながらもいつものように三〇分程左手から肩、胸とさすっていました。その間夫はあまり苦しうにもせず気持よさそうに眼を闭じていたのですが、「まだ」と催促する私の声に「もういいだろう」と曖昧な返事をしてそのまま眠りについた様子に私も安心して床に入りました。

目がさめるともう五時です。例によってラジオをかけ二人で聞きながら、六時半になると私は朝食の支度をするために先に起きました。もう少しで夫のお粥も出来上る、ソロソロ起しに行こうと思ひながら流しを片付けていた時です。「顔を洗うよ」と背後に夫の声「あら早いのね」「気持悪い」「あら、どうしたのかしら、じゃあもう一度寝ますか」と答えて振り返ると、夫は何時の間にか洋間のソファに腰をおろし、目をバチバチさせているのです。様子があまりおかしいので「お父さんどうしたの、ネエ、見えないの」と半ば叫びつつ背中をさすりさすり、これはただごとではないと気がつき、電話を取るのもどこかしく近くに住んでいる娘を呼び、二人でオロオロしながら、救急車を呼び、数分後にはドシャブリの雨の中を、かかりつけの杏林大学病院に運びました。車の中では二人の隊員の方が一心に応急救置をして下さいましたが、二時間後には再びかえらぬ人となってしまったのです。

夫はこの十一月が満七五才の誕生日でしたので、つい先日「今年には京王プラザホテルで盛大にやりましょうよ」と二人で話し合っていた矢先のことで、私には夫が死んでしまった、とはどうしても思えませんでした。死因は急性心筋こうそく、と不整脈、との診断でした。夫は二年前軽い脳こうそくで左手がマヒしましたが、一ヶ月あまりの入院生活で大分回復し、その後もリハビリのために熱川の温泉病院にも入院しましたが、食事が気にいらなくて一ヶ月で自宅に帰り、近所のハリ灸治療院に通ったりして、マヒは殆んど回復していました、今夏の猛暑も無事切り抜けて、この調子ならばまた二人で旅行も出来るようになるだろうと思っていた位です。でも後になってよく考えて

みますと、心臓が少しずつ弱り、体力も衰えていたように思えるので
す。

私は子供の頃から、子守りと病人の看病が苦手でしたから、なるべ
くいやなことはさけて通りたいと、そんな勝手なことばかり考えてい
ましたが、自分が折にふれ『老い』を体で感じるようになってからは
考え方を替えることにしました。まして夫が病氣になつてからは、心
から夫の病氣の回復を念じてひたすら看病に専念しよう、そして『い
たわり』の心を持ちつつけて、何年でも一生懸命に看病してあげよう、
それが私の妻としての務めだと決心したものです。しかし今となつて
は次のような反省に『老い』の胸をいためています。

『ねたきり老人にならないでよ』とか、『もう少し家の中だけでも歩
いたら』とか、口うるさくいいすぎたかしら、また、心のどこかで四
六時中行動をともしなければ淋しがるのを、うるさがつてはいなか
ったかしら、とか、もしものことがあつても生活には何ら困らないし、
とか、次から次へと後悔の念にかられたものです。ところがよくよく
考えてみますと、夫自身が死の恐怖を全く感じないで死んでいったも
のだから、本人にとっては最上の幸せだったかも知れない。それなの
に私ばかりが悲しんだり、自分を責めたりするのは片手落ちではない
か、ふとそう思つた時いく分救われたような気がしました。またこの
ことが私への最後で最上のプレゼントだったのかもしれない、夫らし
いといえませんが。老人の生きがいがあるならば死にがいもある
ていいはずで。これがほんとうの死にがいとでもいうのでしょうか、
近所の人や知人等は皆口を揃えて「ほんとうに羨ましい大往生だ」と
いわれました。しかし私にはそんな言葉は何のなぐさめにもなりませ

んでした。

お通夜、葬式とあわただしく行事が終つた後、二日目、三日目と眠
れぬ夜が続きました。

人間なんてずい分我がままで、自分勝手に、いいかげんな動物だと思
うのです。まして私などその見本のような者です。数年前までは身
心共に、ほんとうの自由がほしい、その時はあれもしよう、これも習
いたい、あの人にも会いたい、などと毎日思いつづけて暮して来たも
のです。ところが夫が急逝して、はからずもそれが今かなえられたの
です。こおどりして喜ばねばならないはずなのに、まるで人間が變つ
たように悲嘆にくれているのです。そればかりか生前夫に対して抱い
ていた憎惡の念さえも、懐しさに變り、夫の度重なる事業の失敗の原
因さえも自分に責任があつたように感じられたりして、自分で自分の
心が理解出来ないままに悶々と日が過ぎ、やがて百ヶ日を迎えようと
しています。この頃は朝目がさめると仏壇に向つて、『南無阿彌陀佛』
を唱えながら天候の報告から、夕方は一日の出来事をこと細かに告げ
て一人で夕食を終え「じっちゃ、おやすみ」と生前と同じ挨拶をして
床に入ります。やがて花咲く春ともなれば、私の悲しみも一日一日と
薄らいでゆくでしょう。そしてその中で私の今後の生き方を生前アイ
デアマンであつた夫があつた世から教えてくれるだろうと信じて、先ず
体調を整えながら、佛前の写真に語りかけている今日この頃でござい
ます。

四十^と年の余^と苦 樂をともしせし夫は

吾が腕に抱かれ安らかに逝けり

風雪に想う

足立かをる

(水上町)

故郷は遠きにありて思うもの。すきとおる水の流れの中にめだかや小えび、弟達と一緒に小鮒を追いかけた幼ない頃の楽しい日々を、今もふと思い出します。

昭和二年一月二十八日兵庫県多可郡黒田庄村喜多で誕生、昭和十年十一月祖父の死去までは上月東新宅として喜多で住いましたが、やさしかった祖父の死によって大変化がおこりました。昭和十一年春、小学校五年にして突然西脇に転居、また二年して一家は尼崎市に移り、私は黒井の伯母の家より柏原女学校へ通いました。昭和十八年春卒業、父の所へ帰り神戸湊川専門学校へ通学しましたが、戦争もだんだん激しくなり中退、しかし若い人は無理にでも働かされる時代のこと、私は住友金属へ入社しました。その頃祖母は伯母の所へ、母は弟妹達を連れて祖父の家へ疎開、すぐ下の弟は中学校三年より予科練に、父と私は尼崎にと一家はばらばらになりました。

昭和二十年六月十五日のこと、出勤して間もなく空襲警報になり、武庫川方面へ退居せよとのことで夢中で走りました。ふと振り返ると道の家並は焼夷弾がどンドン落ちて焼えているのです。武庫川のある神社にやっとの思いでつき、爆弾が落ちる音を聞きながら空を見上げ

ると、B 29 が編隊を組んで飛んで行ったのを、今もはっきりと記憶に残っています。あくる日家に帰ると丸焼けになっていました。六月十五日夜より武庫川の親戚に御厄介になり、しばらくして成松に疎開中の親戚に一時身をよせていますうちに八月十五日の終戦を迎えました。間もなく石生駅近くの小学校の付近で、弟が別人のように太り大きなリュックを背負って歩いてくるのです。何の知らせもなく思いがけない復員にびっくりしましたが、本当に嬉しいことでした。八人の家族と一緒に暮すためにと家を探しましたが見付からず、やっと故郷黒田庄村喜多にある父の友人のお寺に二部屋を借りることができました。住居も職もすべてゼロになった父のしみじみな心痛は筆舌に尽したいものだったでしょう。そのためか父の体重は三五キロ位になってしまいました。世の中は一変しました。祖母は故郷の土に返るために喜多村に帰って来たように、終戦の年の十一月あっけなく旅立ちました。

喜多村の生活はあまりに悲しく、一度出た故郷は諺にもあるように「錦を飾って帰る所」としみじみと母がいったのを覚えています。戦争のため家も家財も焼かれて職もなくし、どんなにつらい思いだったでしょう。でも世の中には戦争でもっと大切な人命を失った方々も多く、皆いろんな形でつらい思いをしているのです。父がこの時「かをる貧乏になったが、せめて心だけは豊かに暮そう」といった言葉は、私の二〇才の時よりずっと心の奥深くはつきりと残っています。

祖母の死後、黒井の友人の家へ日参してや々と家を借りることが出来、昭和二十年暮、父と弟を残し(学校のため)母と私達五人は黒井へ引越しました。二十一年春や々とまた七人揃っての生活が始まりましたが、食糧難時代、お金で品物の買えぬ頃、知人でも本当に「物乞

い」をするような思いで買出しをして分けてもらいました。黒井に家を借りて二年後、やっと家を買求めることができました。私は昭和二十六年春結婚して上京しましたが、それから早くも三〇年の歳月が流れました。

私は人生とは天候のようなものだと思います。暑さ寒さ雨嵐と、きびしい日々のうちにも常に平凡に暮して行きたいと願って来ました。何時も「寛容、忍耐、努力、尊敬、信頼、感謝」があれば人生上手に生きて行けると思いますが、なかなか理想と現実は一一致しがたいものようです。

一昨年、私には新しい素晴らしい出逢いがあり、生き甲斐も見付かりました。父のことば「人間一生勉強」、母の「悔いのない人生」、友人の「この世で一番の幸せは健康で自由があり話せる友があること」等をかみしめながら、私は主人や子供達のよき理解と協力を得、よき友人に恵まれた幸せものであることを感謝し、これからも主人と共に健康に仲よく楽しく、一生一度の残った人生を送って行きたいと何時も話しています。

迷いや悔いなどは、生きている「あかし」と、自分に都合のよい方に解釈し、自分に負けぬように処したいものです。また幸せは自分でみつけるもの、同じ一生ならば「笑う門には福来る」と、朗らかに楽しく暮して行きたいと願っています。

郷友の皆様方、老いも若きも、どうかよい人との出会いを大切に、本当に健康でお幸せにお暮し下さることを祈りつつ、拙き筆をおきます。

山ざる誌、丹波、香港、 そして清瀬のこと

木呂子恵美子

(春日町多利)

私の本棚には「山ざる」が大切に並べてあります。一番古いのは昭和四十七年第三号で、郷友会に初めて参加させて頂いた年です。

殆どの方が先輩の方ばかりで、足立かをる様初め皆様にとっても親切にして頂きました。常岡様の私の好きな絵の展覧会を毎年見せて頂けるのも郷友会の御縁でした。

私には「ふるさと」の丹波、中学二年から高校卒業まで、もの想う頃をあの素晴らしい自然の中でびのびと過ごしたことは幸せでした。

春日部村多利の診療所に父が勤務しておりました。裏山には赤いつつじや藤の花が咲き乱れ、緑にかこまれた隣の忠霊塔の前の敷砂利のあちこちに小さな「すみれ」が紫、うす紫、白と三種類も顔を出していました。

春日部中学校の最後の年で同学年は二六、七人がニクラス、こじんまりとして、楽しい雰囲気でした。三年になり春日町合同の黒井の明德中学校になり、そこで一年と高校三年間、通して四年、黒井まで通いました。

山々の緑が朝に夕に移る変るさまを知りました。高校に通うには六時半すぎに家を出て、黒井発七時十分分の汽車に乗らなければなりません。冬の朝はまだ薄暗く、ブルーのペールを通したような雪景色を思い出します。遠い山の麓に灯がチカチカと光っていました。誰も通っていない雪野原のような所を通り、田んぼの中にズブツと入って腰まで雪にぬれてしまったり、雪の中の通学は大変だったはずなのに、何故か美しい風景ばかり思い浮びます。

向いの瓦屋の竹内さんは、一家揃ってとても心暖かな人達で、娘さんが同年で「えみちゃん」「みち子ちゃん」と呼び合っていました。今でも会えばきつとこの呼び名が出てくることでしょう。

香港のこと

四十九年から五十二年まで約四年間、主人の仕事の関係で香港に住みました。

香港には自然が思いのほか残っており、二ヶ所に住みましたが、後に住んだスタブスロードはピークに向う山路の中程のビルの六階で、緑の多い裏山にはリスやふくろうを見かけ、日本人学校の運動会のあったグラウンドでは赤とんぼが群れておりました。街路樹もカラフルで、すぐ前にあったゴールデンシャワートウリーは、名のごとく黄色の藤のような房が樹一ぱいにたれ下り、とても見事でした。日本の人達が香港桜と呼ぶという紫荊花は遠目には淡いピンクに見えますが、よく見ると一つ一つの花がまるで蘭の花に似たものがびっしりと咲いているのです。紅綿樹、火炎樹なども真紅の花が美しく、最初に住んだクインマリーホスピタルのあたりからリパルスベイに向かう道は、「木漏れび」ならぬ「木もれ海」を片側にし、美しい景色でした。

九〇パーセント以上の住人が中国系の人と聞きましたが、ずいぶん色々な国の人が住んでいる所で、何処かのビルの門番がバキスタンの人なのでしょうが、何処かの王様にそっくりだったり、総督官邸の前に立っている衛兵はグルーカ兵でした。私が習いに行っていた南面の先生の家はビルの九階で、そこに行くには、まず一階の入口の扉を開けてもらうため、門番の所に行つて頼むのですが、そのインド人のおじいさんは白いターバンと白い髭の何やら哲学者のような吸込まれるような深い瞳の人で、私は心の内で最敬礼をしようのでした。

香港の海はマカオの海と異り、青くて澄んでいて、住んでいる人達の貴重な娯楽のようでした。豪華なヨット遊びやランチピクニックといつて大きな船を借り中でパーティをしながら泳ぐというのもありましたが、一般の勤め人や子ども達が学校や勤めの後に、バスや歩いてすぐ泳げる海岸に出ることもできるので、手軽な娯楽でもあります。

向うに住んでいる間に少年野球の香港リトルリーグ代表に息子が選ばれ、最初の年はフィリピンのマニラで、次の年は台湾で、極東の人達と試合が出来たのも良い思い出になりました。日本や台湾など強いチームを相手に負けてばかりでしたが、香港チームはアメリカ、ヨーロッパ、フィリピン、香港、日本と色々な国の人の混合チームですから、一緒に行く親達もまた面白い一行になります。国旗はイギリスで親子共々貴重な経験をしました。

日本に帰り、もう六年も経ちました。ここ清瀬はまだまだ田舎で、我が家も二〇年前は畑だった所です。庭の昔からの住人？には、親子のガマや、ルリ色の線のあるとかげがいて、春にはつくし、たんぽぽ、すみれが庭のあちこちに顔を出します。小さな陶器に水を入れて置く

と、しじゅうがら、ひよどり、鳩等が来て水浴びをし、草をついばみます。鶯も梅の頃に來ます。都心に出るのに時間がかかり少々不便ですが、この自然は氣に入っております。二階の窓からは小さく夕焼け富士のシルエットも見えます。

高卒以來二十七年、自分が望んで歩んだ道とはいえ、色々な人間關係に悩む時、まるで神がお授け下さるような美しい自然や心豊かな人々との『出逢い』があり、有難いことと思います。八方破れの未熟者ですが、どうぞ、よろしくお導き下さいますように。

病中雜記

植村 章子

(春日町)

郷友会からのお知らせの中に松山幸逸様の御急逝を知り、あの頑健とでも申上げたい御体格の方がとビックリいたしました。「山ざる」の編集には殊のほか熱意を持たれ、今の立派な郷土機關誌に育て上げられました御功績は大したものです。須原清様の御便りに、「大往生」だったとありまして、「さすが」と感服し、遙かに病床から御冥福を祈りました。

もう一つの訃報は先輩の永井輝江様です。先日永井様の近くに御住の知人が見舞って下さった時の話に、永井様が一日中眠っていらして、

そのまま逝かれた由、伺いまして、五十七年秋の「スエヒロ」での会に出席されたことを思い出しました。五十八年の「山ざる」の私の記事の中に小さな写真が入れてあります。年寄りでは永井様と私だけでした。御出席の方は若い方ばかりでしたが、皆様とても御親切に下ささり、帰る時皆様で外まで見送って下さいまして、永井様にタクシーを拾って下さったりとても丁寧に下さいました。翌日永井様より電話で「あなたの言われた通り若い方々が皆さんでもてなして下さって年令が違うのに話題が豊富で楽しかった。」「拾って下さったタクシーの運転手が私の家の近くの人で、銀座から家まで話しづめで帰りました。」と大変喜んで下さいましたのです。お誘いしてよかったと申しましたら「若い方々によろしくお伝え下さい」と。これが最後の電話になりました。人生無常です。

私五月中旬に突然脳血栓で倒れ、右半身不随という惨さになりました。二週間余り意識が戻らず、医師も家族の者も諦めていたそうですが、徐々に意識を取り戻し、伴仲会長様、足立正様がお出で下さった時に「一思いにあの世へ往った方がよかった。」と申しましたら、会長様が「まだしなやかならない仕事があるんですよ」と励まして下さいました。還歴後病氣らしいこともなしに旅行を楽しんだりしております。に、人生の無常をしみじみ味っております。八月終り頃からリハビリの先生の厳しい御指導で、苦しみながらも努力の毎日でした。ともすれば挫けそうな心身に鞭打って堪えてきました。

十月半ばになってまだ後遺症はありますが、歩行階段の昇降など徐々に出来るようになりました。箸もペンも持ちますが、字はまだ元に戻りません。先生方から「老年で重態が長かったのに奇跡的に早く回

復した」といわれ、会長様からは十二月初めに御返事頂きましたら「手紙で見る限り回復された」と、嬉しい御言葉を頂きました。

皆様から御情こもる御見舞頂き、感謝で一杯です。皆様にお目にかかれるよう快復したいとひたすら念じております。(十二月二十五日)

病む窓を打つ秋雨に話かけ

病床に丹波の秋の味届く

試歩の杖コスモスに止むしばしかな

井之頭公園にて

病む手漬く湧水ぬくし冬木立

浮寝鳥うつつに日向えらびおり

章子

座 禅

吉住重造

(春日町中山)

広い道場の格天井に激しい怒号と警策のはじけるような音がこだまする。往復ビンタまで飛んだすさまじいまでの円覚寺の座禅でした。

座禅の姿勢は「結跏趺坐」といって両足のかかとが上を向くようにして組み、座布団を二つに折って尻に当て、背中をまっすぐに立てます。手は膝の上で軽く組み、親指で輪をつくり、頭、首、肩、腕から

力を抜きます。目は開いたままメートルほど前方に落とします。

呼吸は静かに深く数えながら行い、雑念が浮かんでもこれにとりかわないで精神を集中していきます。四〇分間微動だにしません。情け容赦なく警策が八発飛ぶからです。今回の参加者は二五名です。よほど辛かったのか前回の参加者は僅か三名です。

*

私は若い時から、こうした精神修養、心身鍛錬法に大へん興味をもっていました。今座禅で黙想しているとき、さまざま過去の思い出が去来します。

私のこの四つの体験は、いずれも座禅とは深いかかわりのあるものでした。五〇年も前のことですが、一〇代の後半には世界的な森田学説に心酔しました。「出家とその弟子」の倉田百三も森田博士の指導を受けたときいております。禅のことばに「熱時は熱殺・寒時は寒殺」というのがあります。熱いときは熱さになりきり、寒いときは寒さになりきるといことです。これは森田理論の原理と同じです。

二〇代の前半には国府津の関東断食道場に行きました。座禅と読經の毎日だったように思います。漸減食から完全断食に入り、漸増食へと戻していきます。座禅が呼吸法と静座法によって頭部と腹部のウツ血を除き全身の血行がよくなるように、断食によって宿便が一掃され浄血されるのです。

四〇代の時にはお茶の水女子大学の体育生理学教室に通い、渡辺俊男教授のリラククス健康法の指導を受けました。博士を会長に日本リラクセーション研究会を設立しました。入会の勧誘から講習会で教授が講義し、私が実演したこともしばしばでした。我々の日常生活は緊

張の連続であり、日々のストレスから逃れることは不可能です。この頭と身体の極度の緊張を、筋肉の力を抜くことによって取り除くのがリラクセス法なのです。

一〇年前にはノルウェー人ウインター氏のヨーガ道場に半年間通いました。ヨーガはインドの心身調整の古い行法であり、禅同様インドで生れたもので共通点も多いようです。「ヨーガは恍惚境を求めるが禅は覚醒を求める」とも言われています。

*

座禅は前に述べた姿勢で行うのですが、雑念が湧いてきてなかなかうまくできません。肩から首の緊張をなくして静かに、ゆっくり、深く呼吸します。息を吐くとき、ゆっくり吐きながらヒートツ、フーターツと数えます。一〇まで数えて一にもどします。

雑念が湧いてきてもこだわらずに数えます。雑念でとぎれても数え続けます。だんだん心が澄んできます。一回や二回ではそこまでいきませんが毎日起きた時か、夜寝る前にも一〇分でも二〇分でも続けたいものです。心がおちついてくれば頭の働きがよくなります。仕事の能率が上がり、いいアイデアも生れようというものです。事故も減ります。座禅は辛い苦しいものではなく、甘美な心地にならなければほんものではありません。

*

昭和五十八年十一月十七日快晴、七時半有楽町駅前を出発、美人のガイドさんの美声を聞きつつ観光バスで追浜の日産自動車工場と鎌倉円覚寺の法話と座禅の研修会に参加しました。近代科学の粋を結集した最も新しいものと、もっとも古いものとの組み合わせが、まことに

妙でありました。警策のお見舞を受けた車好きの青年がそとつづぎ「天国と地獄だった」と言ったのが、とても印象的でした。

*

禅への興味はしだいに高まっています。高度に発達した機械文明、消費文化、爛熟した社会の中で、ともすれば失われがちな生きるよりどころを禅に求める人が増えているようです。からだや心を整えるトレーニングとしての禅をおすすめします。

(ノーブルスター株式会社社長)

信を人の腹中に置く

小杉武生

(青垣町・小倉)

信を人の腹中に置く

○ この言葉が私は好きである。もっとも、正確な意味は調べてみたことがないのでよくはわからない。しかし、肚にずしりくる言葉である。不思議に心を強く魅かれる言葉である。

○ 私がこの言葉に強く魅かれるわけは、事を処するにあたって信を人の腹中に置ききって行動するという、行動する側の姿勢、人間の度量の大きさが要求されるということにある。また、行動する側の絶対的な信義が要求されるということにある。もっといえば、私自身にそ

のようなものが無いための、無い物ねだりである。

○ だから、信を人の腹中に置くなどということは、私にはとてもできないことである。では世間の人はどうであろうか。決めつけるわけにはいかないが、残念ながらあまり期待できないのではなからうか。そうでなければ信を人の腹中に置くなどということは極く当り前のこととして、言葉としても既に消えてしまっていていいはずである。

いまだに生き続けているところをみると、その存在価値があるのであろう。聖書や、仏教の經典が、二千年を経た今日なお存在し、多くの人々の共感を得ているのと同じことである。

○ ごく最近、私は、実質的に相手方の信義に期待するほか方法がないケース（法的手続があることにはあるが、時間と手間がかかる弱点がある）を扱った。

これに対して、幸いにも、相手方はまさに私の信頼に応えてくれたのである。

このケースでは、相手方が支払の合意書に署名してくれることが先ず要求された。これに対し、相手方は自発的に署名してくれたのである。

○ もっとも、まだ履行の問題は残されている。しかし私は、相手方がこの合意書に署名してくれたことで、涙が出るほどうれしい思いをしたのである。

合意書に署名してくれただけで、もう充分相手方の信義は認められ、このうえもう履行してくれなくともいいという気持ちにすんなったのである。人間の気持などというのはこんなものである。

○ ただ恥かしいことではあるが、私は今、相手方に対し、半分申し

訳ない気持ちを持っている。というのは、私ははじめから相手方を信頼し行動しながら、半分、相手方が誠意ある行動に出てくれないのではないかと、疑っていたからである。

人の信義に信頼して行動する以上、全く信頼しきらねばならない。これが、信を人の腹中に置くということであろう。

人の信義に依存しながら、半分疑っているというのでは、はなはだ身勝手である。その意味で私は、信を人の腹中に置いていなかったのである。

○ 信を人の腹中に置いて行動するからには、信じることが肝要であり、かりに裏切られてもうろたえてはいけない。これがこの言葉の意味するところであろう。

中国の言葉に「疑わば用うるなかれ。用いては疑うなかれ」というのがあるが、おおよそ同じ意味であろう。いずれにしても、含蓄のある言葉である。

（弁護士）

首振り二十年

若森 敏郎

（山南町・北太田）

日頃は洋楽に親しんでおられる方々も、お正月ともなれば伝統の日本音楽に耳を傾けていただける機会も多いことと思う。

この伝統音楽の中に箏・三味線・尺八の三曲合奏がある。また箏・尺八だけの演奏もある。この伝統音楽に魅せられて、私が尺八を手にしてから既に二〇年が過ぎた。

俗に尺八の修業を評して首振り三年と言うが、まことに長い首振りの期間である。

*

さて、私のはじめて都山流尺八に接したのは昭和三十七年のことであつた。当時の任地は豪雪で有名な上越、それも福島県境を流れる只見川上流の水力発電所建設現場であつた。ここは半年は雪に閉じ込められ、十一月のはじめから四月末まで太陽を拝めるのは月のうち三日か四日、他は一日中どんよりとした雪空か降雪の連続で最高積雪は六メートルにも達する。このような環境での合宿生活は余暇を趣味に打込むには絶好の機会であつた。

当時の建設所長上野勇氏は、既に都山流の師範で、当時の若い連中二〇名程が集まって手ほどきを受けた。

私の職場が四国や埼玉と変るにつれて、師匠も高知の加納睡山師、西条の徳永阜山師、大宮の長野済山師とかわつた。

四国の中でも西条や松山は、昔から芸事の盛んな土地で、毎年春秋の定期演奏会があり、また随時邦楽の研究会が開かれた。また埼玉県川越市での勤務は僅か一年間ではあつたが、県内での演奏会にはよく出席した。職場でも尺八研究会を作つて仲間を得た。

かくするうちに昭和四十八年七月からは海外勤務となり、師匠につく修業はあきらめたものの、任地にも尺八は携行し、ラオス一年、トルコ三年四ヶ月の任期をすごした。



1977. 5. 21 トルコ国営テレビ放送のスタッフとともに（中央が筆者）

外地勤務中最大の思い出は、トルコの首都アンカラ駐在時代、現地の日本国大使館の肝いりで婦人協会のために箏との合奏をしたこと。またこれが縁でトルコ国営テレビに出演したことであつた。曲は「さくらさくら」、「千鳥の曲」、「六段の調」などで、今から思えばまことに冷水三斗の思いであるが、トルコ全土の方々に対して日本の伝統芸能の一端を御紹介できたことを光榮に思っている。

昭和五十三年に帰国後は、再度上野勇氏に師事することとなった。現在、尺八楽の主流は琴古流と都山流である。それぞれに多くの独奏曲があり、自分一人で楽しむばかりには人様にも聴いてもらっているが、やはり演奏して楽しいのは箏・三味線などの合奏である。演

奏会では竹一管で三曲合奏に出演するときには相当の練習を積んでもその成果が氣になる。このために箏・三絃（三味線の正式名称）にうまく乗って演奏ができたときの愉快さはたとえ難い。

少しでも本格的な三曲演奏に近づけたいとの悲願から、上野勇山師と門人五、六人で勇山会を結成、毎月二回の割で芸大邦楽科出身、新進氣鋭の箏・三絃の演奏家藤崎哲矢氏に合奏稽古をお願いしてから既に五年になる。

合奏はお互いに、一対一の勝負。藤崎先生のバチ先や箏爪からほとばしる妙音と吐の底からほとばしる唱に乗せての尺八演奏は一分の隙も許されない。それだけに事前に十分な練習が必要で、次の課題曲に合せての一人吹き、一流演奏家吹き込のテープを相手に合奏練習を十分に積んでおく。

既にカラオケ演奏などでお氣付きと思うが、相手が機械のときは、こちらの氣分に斟酌なく、決められた演奏を繰返すから、最初はこちらが機械に引きづられ、リズムを合わせるのが大変である。しかしそのうち機械の奏でるリズムを待つ余裕が生まれてくる。

そうした予備練習をしてから、先生の生演奏に接すると微妙な節まわしが体得できて、尺八と箏・三味線の絡み合いが或る程度は自覚でき、機械相手の演奏では不可能な間合のやり取りが行なわれるようになる。とはいえ相手は箏曲演奏のプロ、なかなかこちらの尺八が相手を感じさせるまでには行かない。

このように恵まれた練習環境も、年数回の海外出張で中断を余儀なくされるのは大変残念であるが、ある程度は人前で演奏できる曲もたまに、年一、二回の演奏会が楽しい。

箏曲も他の伝統芸能と同じく大変に長い歴史を有する。それだけに同一曲を演奏しても流派によって微妙な相違があり、これが各派の味になっている。従って、合奏しやすい流派と、あまりなじめない流派とがある。大阪が発祥の地である都山流尺八は関西系の生田流箏曲が合せやすい。都山流よりも永い伝統をもつ琴古流は江戸で発展した山田流箏曲となじみやすい。しかしこれも程度の問題で、山田流箏曲と都山流尺八も相互に長所を尊敬して合奏に氣を配れば立派な合奏が可能である。

箏曲における主導権は永い伝統に培われた箏歌の歌唱にあるから、伴奏楽器たる尺八はあくまで歌の引き立て役に徹する。

しかし、この辺りの呼吸が実に難しい。箏・三絃は歌に合わせて余韻を響かせようとしても、弦楽器を弾くために限度がある。これを補うのが尺八である。従って、三曲合奏のよさは尺八が歌に付いて、弦では表現出来ない余韻を歌のために与えることにある。従って、尺八が如何に氣持よく吹奏が出来たつもりでも、これが歌によく付いていないと、聴く人には不快感を与えてしまう。このために、尺八吹きも箏歌が唱える程によく歌を理解することが必要であり、また歌い手の氣分・呼吸をよく反映しながら尺八を吹奏することが必要となる。

このようなコツを会得するには、繰り返し、繰り返しの練習によるほかにだてはない。しかし悲しいかな、我々アマチュアはそれだけの暇もなければ金もない。適当なところで自己満足しているのが現実である。

例えば、新年やおめでたい席でよく演奏される「千鳥の曲」というのがある。

前歌 へしほの山さしでの磯にすむ千鳥
君がみ代をば八千代とぞ鳴く

後歌 へ淡路島かよふ千鳥のなく声に
幾夜ねざめぬ須磨の関守

これなどは筆の奏者によって表現が微妙に違うので、これに尺八が完全に付こうとすることは至難の業である。あまり歌い手を邪魔せず、また聴く人の耳に歌と尺八が素直に受け入れられることをもってよしとするしかない。どの位をよしとするかは、プロ演奏家と我々アマチュア演奏家とで見解が異なる。

この「千鳥の曲」について、もう少し附言すると、曲の形式は前弾き、前歌、手事（間奏曲）、後歌の四部形式で構成されている。

前弾きと前歌とのリズムの反復、前歌の緩に対する手事の急、手事に盛り込まれた千鳥の啼き交しに対する描写の絶妙さは、筆と尺八が互に絡み合うことによって始めて達成されるものであり、筆の単独演奏よりも更に大きな感興を聴く人に与える。また曲の運びが現代感覚にマッチしているからこそ幾世代にわたって演奏され続けてきたのであろう。

筆曲・地歌も、時代や作曲者によって種々の変遷がある。花鳥風月がもてはやされた時代、男女の色恋が盛んに歌われた時代などそれぞれの時代相を反映している。

また謡曲や歌舞伎に關したのもあり、主題によって手事や弾き口が微妙に違い合奏の興味は尽きない。私の数少ない得意曲には花鳥風月もので「千鳥の曲」、「四季の眺め」、「松竹梅」、「若菜」などがあり、

情緒の世界を歌ったものでは「黒髪」、「ままの川」、「夜々の星」、「樺枕」などがある。

若く美しい身空で逝った愛弟子を偲んで作曲された「残月」は、十分に鳴る尺八を抑えて吹奏することが要求されるので大変に難しいが、私の好きな曲の一つである。

また、筆曲には広く知られている「六段の調」のような純然たる器楽曲も多い。

これら古典曲の多くは江戸時代に八橋検校という盲人音楽家によって作曲された。例えば「六段の調」もそうである。これらの曲が現代においても十分通用する新鮮さをもっていることは何と素晴らしいことであらう。

歌舞伎・謡曲などの世界と同様に、古典筆曲も我々現代人がぜひとも伝承して行くべき文化遺産であると思う。

明治以降も、宮城道雄、中能島松声など多くの作曲者が現われて、それぞれ新形式を採り入れた作品を発表した。殊に宮城さんは洋楽にも造詣が深く、作品は筆とバイオリン、フルートなどとの合奏も可能なのが多い。

宮城さんの不朽の名曲「春の海」は純然たる器楽曲として作曲されたが、フランスの女流バイオリン奏者ルネ・シュメーによってバイオリン編曲され、国際的となった。

それだけに、宮城さんの曲を筆と尺八で合奏する時は、古典を演奏する時のように演奏家によって合い口が違ふことは絶対になく、楽譜に指定された記号通りに演奏することが要求される。また宮城さんの曲はしばしば筆・尺八がそれぞれ全く別の手を演奏し、しかも全体と

して美しいハーモニを構成するように作曲されているので、尺八が半拍子でも遅れたり早まったりすると全体の気分がこわれてしまう。

現在は、邦楽界においても種々新しい試みがなされ、新曲が相ついで誕生している。

一時テレビでも紹介された米人尺八演奏家ネブチューン海山は、ジャズやロックなどの世界にも尺八が入り込めることを立証した。

これら尺八によるモダン音楽の演奏も、真によいものは後世まで生き残るであろうが、尺八の演奏には非常に高度なものがああり、低い音域を要求されるときは二尺管以上のものも用いられ、とうていアマチュア尺八演奏家の手の及ぶものではない。

最近では尺八の練習をするにしても、テープレコーダを活用し、また自分の奏する音程の良し悪しを即座に判定する電子機器も安価に手に入るようになり、非常に楽になった。

また尺八自体も製管法の進歩から苦勞なく音が出るようになった。しかし曲を合奏し発表するとなると決してやさしい楽器ではない。それ故にこそ挑戦して見る価値がある。

姿勢が悪ければよい音は出ないし、一瞬にして十分な息を吸う腹式呼吸法が悪いと息が続かぬ。また指の操作がよく出来ないとい律が狂うし、三二分音譜などの細かい音が刻めない。全く厄介なものである。しかしこのような不便さを克服することは体の鍛錬にもなることである。また尺八は何処へでも手軽に持参できる簡便さがある。このように数々の特徴をもつ日本の伝統楽器が今後共に広く受け継がれ、発展して行くことを念願する。

(五十九・一・四記)

めぐり逢い

上 山 頭

(柏原町)

丸の内のある代表的ビルの一角に画廊「ウィルデンシュタイン東京」が開設され、披露のための展覧会が「ルネッサンスからフォーブまで」と銘うって催されたのは、昭和四十八年一月であった。

披露展では、ダッディ、ベリーニ、エル・グレコ、ゴヤからセザンヌ、ルノワール、ゴーギャンを経て、マティス、デュフィに至るまでのもろもろの作品が並んでいたが、そのうちのアングルの「愛児と遊ぶアンリ四世」(一八二八年作)の前に来て、ああ、これはモーパッサンの「水の上」に物語られていた情景ではないか、と暫し歩をとどめたのである。

私は、ほこりにまみれた岩波文庫本の「水の上」を探し出すことができた。吉江喬松訳で、昭和二年十二月発行とある。読んだのは、おそらくその直後であろう。

モーパッサンは、そのころから彼の狂的徴候が見え出してきたくていわれているようだが、愛するヨット「ペラミー」を走らせ、漂泊の孤独を利用して、飛ぶ鳥のように心をかすめて過ぎるとりとめもない考えをとらえようと、空想の日記を書き綴る。

その一節で、「フランスの王位は、俗歌の銘句で支えられている。

警句、警句のほかも何もない。皮肉的なものであらうと、勇壮なものであらうと、おどけたものであらうと、放逸なものであらうと、

——酒落はわが国の歴史の表面に浮んでいる。そしてその歴史を頼智問答集に比すべきものとしている」とし、多くの王達が残した名句を語るのであるが、アンリ四世については、「諸君、脱帽し給え！これこそ達人だ！」と叫び、次のようなエピソードを語っている——。

彼は、彼が皇太子と馬の真似をして戯れているのを見たスペイン公使に向い、「卿も父親か、公使閣下」と問いかけて、あらゆる家庭の父親の味方となったではないか。スペイン公使は答える、「はい、さようです、陛下よ」。そこで王の言葉、「それでは、かまわず、我々はやっていよう」。

アングルの絵では、中央より左手に、馬になって床を這うアンリ四世とこれに跨る皇太子、その後に乗るもう一人の幼ない皇子が描かれている。中央右より皇后、皇女も見える家庭団欒の微笑ましい光景である。右端に立っているのが、スペイン公使であらう。

それにしても、「水の上」を読んではアングルの絵にめぐり逢うまでには、ぼつぼつ半世紀に近い歳月が流れていた。

さらに数年が経過して昭和五十六年四月、国立西洋美術館でアングルの展が催され、ルーヴルでおなじみの「泉」も出陳されることは、前もって大々的に宣伝されていたが、私は自然と、先年めぐり逢った「愛児と遊ぶアンリ四世」を思い浮べていた。

ナポレオンその他の肖像、「グランド・オダリスク」の頭部、「オシアン」の夢などの油彩、それにいくたの素晴らしい素描を見て、最後の室に入った私は、もう一度同じ題材の絵にめぐり逢ったのである。た

だし今度は、題名も「スペイン大使（大使となつてゐる）に接見するアンリ四世」とされていたが、構図が、馬になって皇太子を乗せるアンリ四世は右手に、そのスペイン大使は左端にと、左右がちやうど逆に描かれている。一八一七年の作である。

それにしてもこの東京という大都市は、ずいぶん様々なものにめぐり逢える面白いところだ。

翌五十七年の秋、私はスペイン、イタリアを主に三週間ばかりの独り旅をしたが、最後の三日をパリで過した。

プチ・パレ美術館は、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてのフランス絵画を多数収蔵しているとかねて聞き及んでいたが、今度はじめて訪れる機会を得た。

ところでこの美術館は、ギリシャ陶器にはじまり、各分野の工芸品など多彩な蒐集が見られ、オランダ絵画の小品に充てた一室もあったが、めざす一九世紀以降のフランス絵画は、ようやく最後の一室に、クールベ、ルドン、ミレー、ピサロあたりが見られただけで、いささか予期に反したが、そのなかに、前年西洋美術館で見た「スペイン大使に接見するアンリ四世」を見出し、異境で旧知にめぐり逢ったような懐しさを覚えた。

そして、十月上旬帰国して間もない十一月下旬には、そのプチ・パレ美術館の名品展が出光美術館で催され、パリで見たものを含む五〇点ばかりの油彩のほかに、多数の珠玉ともいいたい素描や版画を見ることができたのである。

二

キーツに「つれなきたおやめ」（I a Belle Dame sans Merci）と題

する詩がある。私がこの詩について知ったのは、高等学校以来の友人で長く京大教授であったが、先年惜しくも故人となった中西信太郎君から、昭和三十九年恵与されたその著書「シェイクスピア批評史研究」によってであった。その詩のなかに「四つのくちづけもて、われはそのいとも狂おしげなる眼を、閉ざしめぬ」という有名な一句がある。作者はここで何故「四つ」といったのだろうか。キーツはその質問に答える手紙のなかで、「両方の眼に甲乙のないようにするのは、偶数を選ばなければならない。そして正直なところ、双方に二つずつの接吻で十分であろう。かりに七つといったとしたら、おのおの三つと半分ずつという変なことになるのではないか」と戯れているそうだ。

私はこの詩の全文を読みたいと思ひ、丸善に行った。フランス語の題名をイタリックで印刷したこの詩は、彼の詩集ですぐ見付かった。かなり有名な詩であるのか、帰途神田へ廻ったが、諸家の詩三〇ばかりを選び集め初心者向きに注釈を加えた本をたまたま手にしたところ、ちゃんと採択されていた。

これは、髪長く足どり軽く眼は狂わしい美女——実は魔性の女人である「つれなきたおやめ」に、野辺で遭った騎士の物語詩であり、前記の選釈では、この「つれなきたおやめ」を、謡曲「紅葉狩」のシテである鬼女と比較していた、と記憶している。

一〇余年経った昭和五十一年二月、銀座三越で「ラファエル前派展」があった。むしろささやかな展覧会だったが、バーン・ジョーンズの版画やケルムスコット版の美本など、欲しくなるようなものが沢山並んでいた。そしてここで、フランク・カドガン・カウパー (Frank Cadogan Cowper) の *La Belle Dame sans Merci* (つれなきたおや

め)と題する縦長で大きな油彩の絵にめぐり逢ったのである。たしか一九二六年の作とあったから、時代は少し下るようだが、ラファエル前派の流れを汲んでいるのだろう。

草花が一面咲き乱れる原に、髪を長く垂れた美女が膝頭で立っているのが、中央に描かれている。その前、絵画では下方に、甲冑に身を固めた騎士が、眼を閉じたまま横たわっていた。美女と騎士とは、ちょうど逆T字形(Tという字をさかしにした形)に構図されていたのが、印象に残っている。

三

ダンテの「神曲」が、寿岳文章が畢生の努力を傾けた苦心の訳で、それにブレイクの挿絵をふんだんに入れ、昭和四十九年から、「地獄篇」、「煉獄篇」、「天国篇」と毎年一冊ずつ、三年がかりで刊行されることになり、この大変有名でありながら、おそらくあまり読まれることのない古典を、私も通読する機会を得た。

特に「地獄篇」で、ダンテの構想は奇想天外をきわめ、それに詳しい注釈をたよりに読むのであるから、感動がなまなましく伝わるというわけにはなかなかいかなかった。ただ第三三歌に描かれた牢獄に饑えるウゴリーノ伯のくだり——彼は悲歎のあまり自らの両手を噛む。ひもじくてそうしたと思ったか、子供らは、突然ひよろひよろと立ちあがり、「父よ、いっそ私たちを食べて下さるなら、私たちの悲しみはずっとずっと軽くなりましょう。このみじめな肉の衣を着せたのはあなた、だからどうぞ、私たちからそれを剥ぎとって下さい」という。あまりにも痛ましくて、深く心に刻まれた。

「地獄篇」を読んで二年余り経った昭和五十一年七月から、西武美

術館でロダン展が催された。ロダンはわれわれにもなじみ深く、今回の同じ作品もすでに幾度か眼にしている。ただ今度のは、一点を除きすべてが、ロダン美術館の所蔵品だという。彼の全貌がうかがえるよう企画されていた。「初期の制作」から、「地獄の門」「カレーの市民」「バルザック記念像」「田熟期」「肖像」などに分類されていたが、「地獄の門」の部では、これに組み込まれた作品とそのためと考えられたが結局組み込まれなかった作品と、併せて約三〇点もが出陳され、これに組み込まれた作品の一つに「ウゴリーノ」があった。図録では、「ロダンは、意識を失って動物に戻った人間としてウゴリーノを解釈し、動物のように四つん這いになって、まさに子供達の肉をむさぼろうという姿で彼を表現している」と解説されていた。

その後西洋美術館の前庭にある「地獄の門」の前に立って、どうにか「ウゴリーノ」を見付けることができた。

また「肖像」の部には、「花子のマスク」が二点、一つはブロンズがよく見かけるもの、もう一つはバト・ドゥ・ヴェール（練りガラス）という珍しい手法によるものであった。

展覧会を見て間もないころ、NHKテレビの「日曜美術館」で、高田博厚の「私とロダン」が放映された。「地獄の門」の発想が「神曲・地獄篇」に由来することは承知していたが、さらにボードレールの「悪の華」のイメージも加わって、計画はふくれあがった、と司会者は説明する。高田も、「ロダンはボードレールを非常に尊敬していた」と語っていた。実はこれまで私は、ロダンとボードレールを結びつけて考えたことはなかった。

ところで、鵜外に「花子」と題する短編小説があることを思い出し、

久し振りに読み返した。明治四十三年七月に発表されたものだ。

外国を巡業する寄席芸人である花子は、興業師に連れられ、はじめてロダンのアトリエを訪れる。パストールの研究所に学ぶ医学士久保田某が、望んで通訳のため同行した。花子は美人ではなかったが、健康で、あまり安逸をむさぼったことのない彼女の、いささかの脂肪をも貯えていない引きしまった肉体は、たいそうロダンの気に入った。すぐに裸婦のデッサンをしたという。一五分か二〇分ですむからといわれ、久保田は書籍室で待つことになる。

ロダンは生れつき本好きだったという。久保田は、テーブルの上の本が何だろうかと思つて、手にとるのである。一冊は外ならぬ「神曲」のポケット判であり、他方が、なんとボードレール全集の一巻であった。

高齢化社会と二一世紀の年金



筆者

坂本重雄

(柏原町)

一九八四年の正月を迎え、「一年の計は元旦にあり」という言葉を想い浮かべながらも一向に計画を立てる決心はつかない。子供の教育、

マイホーム建設、ましてや老後の生活設計など、どれをとっても一年単位の計画ではどうにもならない課題ばかりが多いし、今年健康で暮したいという程度の願望もなかなかその通りに行かないという経験から、計画に無縁なのかもしれない。

それにしても、新年早々から新聞の大見出しで、「老後の心配をする人が四〇才代で三人に二人」（一月三日朝日）とか、「六五才以上の独り暮らし老人が一〇〇万人を突破、四人に一人は働いているが、三人に二人は病氣やけがをしている」（一月八日朝日）などの記事を読むと、年齢五〇才をこした自分の老後生活の設計は緊急を要する課題であるはずだ。しかし個人の努力だけでは限界のある問題だけに、社会保障、とりわけ政府の公的年金制度に期待がかけられることになる。

一 高令化の急速な進行と年金制度の危機

恩給・共済や厚生年金の制度は、わが国でも戦前から実施されていた。しかし平均寿命が一九四七年でもようやく五〇才であり、サラリーマンの定年退職後の平均余命が短かったので、老後の年金への世間の関心はあまり高くはなかった。ところが高度経済成長に伴う医療や国民生活の向上により、一九七〇年代は平均寿命が七〇才をこえて老令人口が増大する反面、出生率は低下し、世界でも稀な高令化社会が、しかも急速に到達している。すなわち、(1)すでに六五才以上の老人が総人口の一〇%近くを占め、二〇二〇年には二〇%をこえる。

(2)出生率の低下（出産児数の減少、未婚の増加）で生産人口（一四—六四才の働ける世代）は、現在の六八%から、六〇%へと低下する。
(3)したがって、このまま人口高齢化が進むと、現行の公的年金財政は

膨大化して若年世代の家計を圧迫し、年金制度は破綻・崩壊すると予測されている。

このような事態を回避する方策を単純に指摘すれば、(1)給付水準を引下げる、(2)掛金・保険料を引上げる、(3)支給開始年齢を遅らせる、(4)国庫負担をふやす、ことである。政府としては、財政難から(4)国庫負担をむしろ抑制せざるをえず、(1)、(2)、(3)に頼らざるをえないが、国民大衆の側からみれば、これらはいずれも制度改悪にほかならない。

二 公的年金改革への動き

政府、厚生省は、年金改革の必要性をとき、その具体策として、(1)年金の給付と負担の両面で社会的公正（同一世代内での公平、世代間の



旧柏原高女あとの「老人の家」

公平)の確保、(2)年金の制度間不整合・格差(官・民格差など)の是正、重複給付の除去などをあげてきた。しかしこれを卒直に解説すれば、(1)年金受給者Ⅱ老齢世代と掛金負担者Ⅱ勤労世代が、給付の引下げと掛金引上げの程度を合意して決める。(2)官民格差で批判される公務員共済年金の給付水準を引下げた上で、官・民ともに今より低位水準で平準化させることになる。高齢化社会の人口構造から考えれば当然のことともいえるが、政府も国民の反感を買う政策だけになかなか切り出せず、近年の政府財政の悪化、国鉄共済年金の財政危機を契機として、ようやく、法改正に取り組み始めた。

その第一段階として、一九八五年度には年金支払不能と予測される国鉄共済を含めての三公社共済と国家公務員共済を統合するという共済年金統合法が制定された(一九八三・一一・二八国会で成立)。この法案が成立するに先立ち、国家公務員共済審議会(大蔵省主計局所管)で同法案への答申作成をめぐって一三回にわたる激論が展開された。私自身、この審議に委員として参加し、年金改革問題への取り組みのむつかしさを痛感させられた。

この法律案への疑問として、(1)国鉄共済年金財政の赤字を、制度が似ているというだけで、なぜ国家公務員のみにおしつけるのか、(2)この統合を契機にすべての公的年金を一九九五(昭和七十)年までに統合化するというが、その具体的計画、手順を明示しないままに上から強制して年金改悪を断行する先例とするのではないか、(3)人口高齢化、年金財政を大義名分としながら、同時に軍備拡充や社会保障抑制の「行政改革」を推進しているのではないか、という理由をあげて労働組合団体代表の委員が厳しく批判する。

公務員の共済年金が民間の厚生年金や国民年金より給付水準が高いと民間人が批判する官民格差論は理解できるが、これまで公務員共済年金の水準をモデルに民間の年金水準が引上げられてきた経緯からみて、官民格差論だけの突出が、いつの間にか官民ともに低い水準で年金給付が平準化されるという懸念も大きいことに留意されねばならない。

三 「二一世紀の年金」の予測

厚生省は、一九八三年十一月「二一世紀の年金」に関する有識者調査を行ない、「二一世紀の年金を考える」という参考資料のなかで、厚生省の年金改革についての考え方を示した。そして、共済年金統合法成立と同日の十一月二十八日に、公的年金制度一元化の一環として厚生年金、国民年金、船員保険の統合化を図るための年金制度改革案をまとめ、林厚相が社会保険審議会と国民年金審議会に諮問した。

その内容は、(1)公的年金体系を基礎年金と報酬比例年金の二本建とし、基礎年金は六五才に達した全高齢者(国民年金、厚生年金の被保険者とその配偶者に共通)に対する最低限の年金保障として位置づける。(2)基礎年金の給付額は月額五万円程度とし、基礎年金のなかで婦人の年金権を確立する、などというものである。さらに、一九八四年一月十日に、これらの厚生省案にもとづく二〇五〇年までの年金財政収支計算の結果が発表された。

この五十九年再計算は五十六年人口将来推計を基礎としているが、平均寿命はさらに伸び、出生率は大幅に低下して、人口高齢化は従来推計以上に進行し、受給者の比率は、最高の成熟度(受給者の加入

者に対する比率)の二〇四〇年には四六・七%、二・一人で一人の割合となる。保険料は二〇二一年には最高の二八・九%と達し、年金支給額(支出)も二〇年後には倍増することとなり、それ以後は若年層の負担如何により年金支給額が左右されることになる(賦課方式)。この財政計算によると、厚生省案どおりの年金改革(給付水準引下げ)を実施しても、将来の国民の保険料負担はかなり加重されることになり、二一世紀間近には、厚生年金の支給開始年令を六五才に遅らせるなどの改正がされられないといえよう。

四 中高齢者の雇用と婦人の年金権

「二一世紀の年金」は、以上の検討からみてかなり厳しい中味とならざるを得ないと思われる。軍事費の拡充や戦争にまきこまれるような事態がないと仮定した上でのことであるが、必然的に訪れる二一世紀の高齢化社会日本においては、単的に表現すれば、(1)年金給付が現行のそれよりも三割程度の引下げ、(2)掛金率の倍増、(3)そして支給開始年齢六五才への繰り下げは不可避と予想せざるをえない。この程度の改悪にとどめるために、これから一〇年間かけて毎年のように提出されてくる年金の統合や改悪に関する法案、政策に対し、国民としての厳しい対応がせまられよう。私自身、労働法学の研究を抑制しでも社会保障法に属する年金問題への取り組みを深めたいと考えている。しかし年金問題は単に社会保障の問題ではなく、その抜本的解決のためには、(1)六五才支給開始年齢をやむをえずと譲歩するには六五才までの雇用保障の実現が不可欠となり、政府は企業側の積極的な協力、そのために労働時間短縮が必要となる。また、(2)女子の雇用増大によ

る保険料負担の拡大が期待され、さらに、(3)出産率の低下傾向に何とか歯止めをかけ、生産人口の減少をくい止めることが期待されよう。

今後の年金改革法の審議に当たって、婦人の年金権がその焦点の一つとなる。婦人の職業、経歴、配偶者の有無をとわず、個人としての婦人にどのように老後の年金権を保障するかが大きな課題である。ただ現状では、家事・育児労働の負担が依然として婦人に重い。一方で男女雇用平等法の実現が国内的国際的に要望されており、他方で家事労働からの制約をうけたままパートタイマー労働への参加が増大しパート労働保護法の制定が求められている状況である。家庭、職場、地域社会のそれぞれの場で多様な活動を強いられてきた婦人が、職場における雇用上の平等原則を確保することにより、人間としての尊厳を守ろうとするのは当然である。しかし今後の雇用構造のあり方や生産人口増大への期待、従来の非職業婦人Ⅱ専業主婦の役割から考えて、その経歴を問わず、個人としての婦人の年金権を確立することは重要な課題といえよう。

(静岡大学人文学部長)

たまごのあぶら 卵黄油で人生が変わった という人もいる

村上末吉

(春日町)

一病息災ということばもあるが、一病のために人生を無にしている

人も多い。もしその一病が快癒すれば、その人の人生は大きく好転すること、決してそうではなからうし、すばらしいことに違いない。

ある週刊誌にこんな広告が載っている。——年齢のせいで体力が落ち、風邪をひきやすかった。胃潰瘍で胃を切っているし、胆石もある。血圧も高かった。ところが卵油を飲み始めてからは疲れなくなったし、体の調子もいい。ふだん忙しくて散歩もしないので、足が弱っているのに平気で山にも登れる。エネルギーが湧いてきた。びっくりした。夜中に二度はトイレに起きていたのが、朝まで行かなくなった。身体が温まるのである。私だけじゃない、家内も飲んで顔のツヤが違ってきた。十も一五も若く見られると喜んでいいる。——不運の始まりは病

気である。ガンの疑いで胃と十二指腸をそっくり切られた。次に会社を乗っとりかけて、防衛上やむなく自己破産の形で倒産する。自殺未遂を繰り返した。そんなどん底から這い上れたのは女房が造ってくれた卵油のおかげで、体力が回復して、生きる気力が生まれた。今では髪黒く、血色よく、身ごなし軽く弁舌さわやかに笑顔を絶やさないと以上の通りで、「手づくり自然食友の会」のものである。宣伝文であるから、少々オーバーな表現もあらうし、私も実際にその人達に会ったこともないので、真偽の保証はできませんが、卵黄油が病気の治癒に役立つし、体力増強によいことだけは、体験をもつて推奨できます。

私も十年程前に心臓を病み、にがい経験があります。その時覚えた卵黄油を愛用したおかげで元気を回復し、今日に至っていると思うからです。

それは皆さまも御存じの方であらうかと思われませんが「赤本」で知

ったのです。表紙が赤いのでそう呼ばれています。正式には「家庭における実際の看護の秘訣」という九六四頁の厚本で、改訂は一六〇〇版まで出ており、初版は大正十四年です。

築田多吉という著者の方ですが、長寿法と実地の体験による抵抗療法がこつと細かく詳述してあります。この本の中から卵黄油に効くと書いてある所を抜粋してみましよう。

卵の油が効果的な症状

心臓病 卵の油（赤本ではそう書いてありますのでそのまま書きます）はその病人に適量（一回、〇・五乃至一・五瓦）を毎日三回食後に服用して最も有効です。何かの病気で心臓が弱り、ひどく「どうき」がして、足がはれたり、道を歩くにも困るような病人には、即座に利き、一、二日の内にずんずん元気が恢復してくるのは奇妙です。卵の油は慢性の心臓病や心悸几進にのみ有効で、死期が近づいて、注射するようになっては、この卵の油を飲んでも利かないものと思っておりますが、これは大きな考え違いで、重症になっても続けて服用していると心臓の衰弱を防ぎ、重症に近づいても、とても有効なことがわかったのであります。殊にこの油は薬ではなくて、卵の精分であるから、副作用がなく、滋養にもなり、素人の強心剤としては得難い家庭薬であります。心臓病には素人が薬を飲むことができないのであります。卵の油だけは、飲んでも少しも差支えないのであります。卵の油は自分でも造って一回二〇滴ずつ、一日三回食後に飲むとよい。

痔核（いぼ痔） 痔核は手術で切取る以外、なくなる方法はありませんが、痛まなければ害にはなりませんから、必ずしも切取る必要は

ありません。もしひどく痛みまたは血の出る時には、腰湯を行いその後、卵油を綿に浸してつけるか、または痔瘻のように膠囊入りの卵油を肛門内へ差し込むと、痛みも出血も直ちに止ります。

その他 動悸や息切れ、結滞脈などは二、三日できれいに治ります。入院中に危篤になった心臓病の病人が、この油を飲んで急に好転し、助かった人がたくさんあるので、これは将来共化学的に発展するものと思います。卵の油が効くから卵を食べても効くだろうと考えて問いつけてくる人がありますが、卵と油は全然成分が違ふから、卵を食べてもその効果は別のものです。卵の油は滋養強壮にもなり、外用すれば痔の妙薬で、耳だれや湿疹、きり傷、禿頭病や若白髪に擦り込むと著明の効果がありません。

この卵の油は、著者（築田多吉氏のこと）が発明して赤本発行の当時、特許権を取る予定であったのだが、その方法を公開して、全国に普及することにしたのであります。

と記されています。

前述の「手づくり自然食友の会」では黄卵油一二〇ミリリットルを九八〇〇円、送料三五〇円で送ってもらえますので、ご参考までに住所をお知らせします。〒一〇五 港区西新橋一ノ十ノ七電話五九一―五五〇一 または 五九一―九六七〇 尚封書で「卵油の作り方」と請求し、送料実費切手二〇〇円分を同封するようすすめております。

製法

わが家では誰にも教えてもらわず、赤本の次の製法解説を読んで試作したのですから、あなたも是非自分で作って下さい。

卵の白味を除き黄身（きみ）だけを六、七個又は一〇個位を、鉄鍋（フライパンが便利）に入れて火にかけ、杓子（シャクシ、柄の長いシャモジ等）で、細かく砕くようにして絶えず交ぜ、黒くなるまで炒ります。最後には油が煙になり少しずつふえ、もうもうと油の煙が出ます。そしてこなごなの黒い卵がもちのようにねばねばしてきて、底に油がたまります。卵一〇個ですと五〇分から六〇分かります。そして鉄鍋から器に入れるわけですが、熱油を入れても割れない容器を準備しておきます。その容器の口をガーゼで輪ゴム止めし、流し込むと、小粉がとれ、飲み易くなります。卵が黒こげになると、炎が大きすぎるとき火が移って油が燃えますので、炎を少し弱くしますが、最後のときは油が燃えない程度に強くすることがコツです。

冷ました後、冷蔵庫に入れておきますとゼリーのように固まり、飲みやすくなります。もちろん冷蔵庫に入れなくても腐ることはありません。油は茶色を帯びた真黒なものです。赤本には二、三度失敗する覚悟でやりなさいと書いてあります。なお煙と共に匂いが強いですが、換気扇を廻し、換気をよくして下さい。

以上で黄卵油の話を終わりますが、人生にとって健康は最も大切なものの一つですから、この話を記憶くださって、自らも利用し、近くの方々にもお奨めくだされば幸甚の至ります。

★

★

★

柏原が舞台の短篇小説

井上靖の『佐治与九郎覚書』

小杉 武生

(青垣町)

かねて、富田碎花、深尾須磨子、細見綾子などの歌びとたちによって、丹波の風土が詩歌・俳句といった短詩文学のなかに詠みとめられているのを、折にふれて愛誦させていただいてきた。それらの諸作は、

◇歌風土記・兵庫県 富田碎花 昭和二十五年十二月 神戸新聞社。

◇兵庫県文学読本近代篇 昭和三十四年 のじぎく文庫。

◇一〇〇年の詩集Ⅱ兵庫・神戸・詩人の歩み 昭和四十二年 日東館。

◇ひょうご文学歳時記 宮崎修二朗 昭和五十三年十月 のじぎく文庫。
などの諸本によって割合らくに読むことができる。ただ、これらの作品は、短詩型文学にかぎられていて、小説で私たちのふるさとが描かれることがほとんどなかったのを、かねがね残念に思っていたところ、ようやく最近になって、播州在住の女流三枝和子が、『鬼どもの夜は深い』の連作や『丹波夜能』などで、播・丹の土地に舞台を求めて、土俗的な文学世界を見せてくれるようになって、なつかしい想いに駆られながら読んでいる。

あまり小説の舞台として取りあげられることのなかった私たちの故郷だけれど、その数少ない、しかも比較的早い例として、ここで井上靖さんの作品を紹介してみたいと思う。文庫本で一四ページほどの歴

史短編で、昭和三十二年に書かれた「佐治与九郎覚書」がそれである。ここには、わが柏原が重要な背景として登場する。

作品は、「知多半島の大野城主佐治与九郎一成が、当時安土城にあつて秀吉の庇護のもとに成人しつゝあつた、浅井長政の遺子である三人の娘たちの中の、一番末の小督を娶つたのは天正十四年のことである」と、いかにも歴史ものらしい折目正しい文体で始まる。

この端正な書き出しが一気に示す通り、小督は、浅井長政とお市の方のあいだに生まれた茶々（のち淀どの）、お初（のち京極高次妻）に次ぐ末娘で、天正元年に父長政を小谷城に失い、同十一年には母と義父柴田勝家を越前北の庄に失うという不幸な過去を持った女である。天命とは不幸な者にはなおいっそうの不幸を強いるものと見えて、小督の運命はそのうちまた、数奇な転変を繰返すことになる。

従兄の与九郎との夫婦仲はむつまじく、やがて小督は二人の女兒を生む。だが天正十六年の春、長姉の茶々が秀吉の側室にのぼったという噂が小督の耳にとどいて一年足らず、思いもかけなかった運命がやってくる。秀吉から小督を茶々のもとに差出せという命令である。おそらく秀吉は与九郎と義兄弟の関係であることを嫌つたのであろう。

小牧の戦いで与九郎が家康に味方したことへの報復もあつたであろう。

小督をもぎ取られた傷心の与九郎に、その翌年さらに過酷な悲運が見舞う。彼の叔父であり主君であり、さらに小督との婚姻の仲人でもあつた織田信雄が奥州へ国替えされると同時に、与九郎も居城大野城を召し上げられ、ここに佐治氏は滅失、与九郎一成は浪々の身となるのである。与九郎は二人の娘を血縁のもとに預けて、伊勢安濃津城主で伯父に当る織田信包を頼り、そこで棄扶持五千石を与えられた。

その三年後、小督が丹波少将羽柴秀勝のもとに嫁ぎ、二年後、小督は夫秀勝を朝鮮役で失う。その翌年には、小督はさらに三度めの結婚として、家康の長子徳川秀忠と盛大な婚儀を挙げる。

このあわただしい時の移ろいの裡に、織田信包の伊勢安濃津から丹波柏原城への移封があり、悲運の人与九郎も、信包と共に柏原へ移る段になって、いよいよ作品の主舞台がわが柏原となるのである。

「柏原へ移ると、与九郎は剃髪することを信包に申出た」と井上靖は書く。剃髪して与九郎は名を「巨哉」と改めた。この巨哉という僧名、どこやら禅機をうかがわせる。作品には書かれていないが、私は柏原のどこかの禅の寺で彼が髪を落したのではなからうかと想像する。「剃髪してからの与九郎は、人を避け、誰とも言葉を交さないことは前と同じであったが、その表情は見違えるほど穏やかになった」。

あの小督が、慶長九年七月に、秀忠との間に一子を挙げた。將軍家康の嫡子秀忠の子の出産は大きい祝福をもって迎えられた。「この小督の出産の噂は、江戸から遠く離れている丹波地方にはひと月ほど遅れて伝わった」。

その日、巨哉こと佐治与九郎は所用あつて柏原在へ出掛けたが、柏原城下の外れで、いずれも旅装束の十数名の騎馬の一団と出会った。

通行人たちは、その一団のために道を開いた。道はぬかるんでいた。与九郎は泥の飛沫をうけて、多少小癪に障る思いで路傍に立っていた。その時、与九郎の耳に、やはり傍に路をよけて立っている男の声がはいって来た。それによって、与九郎はいま自分の眼の前を過ぎて行く一団が、秀忠の室の男子出産を祝うために、この城からはるばる江戸へ出掛けて行く賀使の一行であることを知らされた。

与九郎はふらふらとその場に腰を下した。坐ってしまった時、自分でもどうしてそんなところへ坐り込んでしまったものか、はつきり判らなかった。

与九郎は多勢の通行人が怪訝そうに見返って行くのも構わず、虚ろな眼でそこに坐り込んでいた」(この時生まれた男子は、のちの三代將軍家光である(筆者注))

井上さんが描いたその日の柏原には、すでに秋の風が立ち初めていたであろう。周りの山の紅葉が始まっていたかも知れない。泥飛沫の揚がる雨の日であったというから、かすかな肌冷えも感じられたろう。ちょうど三八〇年前の、そういう柏原の一日を想いえがいてみるのは、やはりこの作品を読む悦楽のひとつである。あの崇広館の辺り、柏原藩の陣屋の門から駆け出して行く騎馬のひづめの音がきこえて来る。丹波の小さな城下町の、激しい雨の中に、泥を浴びながら、僧衣を風になぶらせて坐り込んでいる、一人の敗残の男の姿を、あの柏原の風景のなかにはめ込んで想像してみよう。八幡宮の鐘の音が、地を這うように、与九郎をつつんで行く――。

徳川家の礎がしだいにかたまっていく頃、勝者の歴史の陰の部分で哀しく生きた一人の武士が、流浪敗亡の身を、一隅にひっそりと置くにふさわしい、柏原のたたずまいである。

小説の世界ではあるが、あの小さなお城下に、こういう『歴史と人間』のドラマがあったことを偲んでみよう。

埋もれた素材は他にもあるだろう。丹波からもすぐれた書き手があらわれて、わがふるさとの歴史・風物・人情を広く紹介してくれないものか、としきりに思っている。

ザとダの発音 区別の苦勞

田 中 寛

(山南町)

自分は音痴に属する人間だと考えていた。子供のころから音楽とはあまり縁がなかったし、学校で習ったときも苦手だった。歌うのも試験なら止むをえないが、なるべくなら歌わずにすまそうという部類であった。

五十音のザとダ、ゾと下の発音がはつきりしていなかったのは音痴のせいであり、無頓着のせいだと考えていた。最初に人から言われたのは、試験で継続を継続と書き誤ったときである。以後気をつけるようにしたのだが、なかなか直らない。ゼロをでろといったりして笑われたこともある。発音のちがいは舌の使い方にあると考えて気をつけているのだが、思わぬところに顔を出す。

私の仕事は印刷屋だが、タイプを打つのも自分でやる。購読申込書の印刷をたのまれたとき、原稿を見ると前の印刷物は購読料とあるべきところを購読料とミスタイプして印刷している。責任はこちらにある。続と読のちがいはかつて先生にいわれたこともあり、十分注意していたつもりだが、それをまちがっているのだ。コウドクを頭の中でついコウヅクと読んでしまった。

去年、週刊誌を見ると、全日空をデンニクウと読んで電話番号

号さがしに困っている人の話が出ていた。その人は和歌山出身で、和歌山ではよく混同するという。しばらくすると同じ週刊誌に奈良の女性がザとダ、ゼとデで苦勞するとあった。奈良は和歌山に近いから和歌山なまりがまじっているのだと思っているようだった。また、ジとヂ、ズとヅが同じだから他も同じと早合点し、自分是要領がよくて、早の、みこみのせいだと思っていたのに、なまりのせいとはびっくりしたと書いていた。

実は私もびっくりした。音痴と無頓着のせいで、先生に君のくにはどこだときかれ、丹波のくににまで恥をかかせたようで心苦しい思いをしていたのだが、ひよっとしたら、和歌山なまりというよりは近畿なまりとでもいうべきではないかと思ったのだ。きっと丹波の私のまわりにもそのような人が多かったのではないか。それで気がつかなかったのではないか。よそのくにの人に言われるまでもなく、これからは人と話したびに確認作業、まちがわなかったかなと考えなければならぬ。

*

昨年は、音痴と自認する私も民謡を唄うことができた。特別習ったわけではないのだが、清水の舞台から飛び降りる思いで、ある市民会館の舞台でプロの歌手の次に尺八伴奏、おはやしつきで唄った。生れて初めてだった。その民謡は北海道の十勝馬唄。十年つきあって一度もきいたことのないまわりの人がびっくりした。

*

*

二 対談 曹禅寺を訪ねて

——村上大憲さんと堀井隆川さん——

山ざる編集部では、郷土出身で東京在住のお二人の僧侶の対談を企画した。そのお二人とは、氷上町出身・現在大田区池上・曹禅寺の住職・村上大憲さん（八〇歳）と、山南町出身・現在八王子市・真照寺の住職・堀井隆川さん（四二歳）である。

五十八年十月、記者は堀井隆川さんとともに曹禅寺を訪問した。大憲和尚は終始にこやかに私達をおもてなしくださり、本堂、書院、庫裡、集会場、庭園など、くまなくご案内くださった。

当曹禅寺は、現代日本の寺院建築の模範とされる名刹である。質素な構えのうちに、禅の心を自ずから悟らしめるようなたたずまいであった。ご本尊も拝観させていただいた上に、和尚秘蔵の「豊臣秀吉直筆の書状」までご披露くださり、感激の連続であった。

芦田均元総理や根津嘉一郎、五島慶太、築地の料亭「新喜楽」の女将・伊藤さんのお話など、名高い人物が次々と登場し、そのご交際の広さとご人徳に深く敬服した次第である。

以下は当日のお二人の対談の要旨であるが、つくせない点、不確かな記述の文責は私にある。どうかご容赦願いたい。（宮野 近）

丹波から東京へ

——それでは先ず村上さんの生い立ちから東京に出られるまでのいきさつについてお話しいただきたいのですが、いろいろのご苦労があったでしょうね。

村上 私は明治三十六年、旧幸世村、氷上で村上茂治の五男として生まれました。兄弟は七人いましたが、いま生存しているのは自分だけです。父は西芦田の芦田氏から養子に來た者ですが、義弟の醸造酒販売業の福知山、舞鶴両支店の責任者をし、家族も福知山で生活していました。酒は「日の出正宗」を扱っていました。

父は事業が好きで、丹波で初めての「松茸の鐘話」をつくって販売しました。買い集めて家の中いっぱい積みあげた松茸の生の匂い、またその松茸を煮るあの強い匂いが、幼い私にとっては頭痛の種でした。その匂いから逃げ出して近くの檀那寺、氷上帰命寺へ泊りがけで遊びに行ったのですが、その住職夫妻に可愛がられたのが、そもそも仏門に入るきっかけでした。

帰命寺の住職に「坊さんの生活は嫌いか」とたずねられ、「嫌いではありません」と答えたことから出家することになったのです。

父は明治四十一年に病死しましたが、明治四十五年、私が数え年十歳のとき、黒井・称名寺の貞永俊成師が私を弟子にしたいというので入門しました。貞永師は実に峻厳なお人柄で、相弟子と二人で朝の勤行から内外の掃除をすませ、登校すると直ちに授業開始で寸分の余裕もありません。十数人の弟子が逃げ帰ったということでした。あるとき、私達も命ぜられた草取りをしなかったというので、一時間も点子



曹禅寺（本堂）

を促すという慈愛深いありがたい師匠でした。

師は能筆家であつ稀にみる美声の持主でした。譬（かね）木魚も、そのもののもつ本来の音をよく出すようにと手をとって教えていただ

ろーソクの灯が消えるまで、泣きながら燦灯の薄明りのもとで草取りをしたものです。その後腎臓病をわずらって生家に帰りましたが、回復後、成松・宗蓮寺の住職・関本大仙和尚から懇望されて弟子入りし、数え年十三歳のとき得度いたしました。

大仙師も厳格な方でしたが、

情け深く自から範を示し、間違

きました。大法要では常に読経のリーダー役である維那（いの）を勤められ、

圓通寺の修行僧や郡内の若和尚達もよく指導を受けに來ておりました。全身全霊を傾けて読経すること、惜しまずに声を出して読み、身も心もお経になつていなければならない、と教えられたことなどが、後年私の布教活動の大きな基礎になったと思います。

成松高等小学校を卒業した私は、千葉県の宗立大正中学校三年に編入入学し、卒業後の大正九年、大本山永平寺専門僧堂に安居三年、続いて永平寺本山特別僧堂に安居二年、参禅并道に精進しました。次いで若い本山役僚として東京麻布長谷寺内にある東京永平寺別院・不老閣侍局詰を命ぜられ、以来計らずも東京に永住するようになった次第です。

その後東京矢口禅宗教会を創設、川崎市清浄院住職、柏原明願寺住職の三ヶ所を掛けもちで数年間勤めたこともありました。本来なら丹波に帰るのが普通でしょうが、この地に法縁があったのでした。柏原や川崎の寺は留守番の和尚にまかせ、主に矢口の教会に居住して新寺の建立に専念するようになりました。

——堀井さんの場合はいかがですか、まだお若いからこれからというところですね。

堀井 私は昭和十六年に旧小川村岩屋の石龍寺（高野山真言宗。重文仁王像や足利尊氏御教書等の宝物多く、兵庫県観光百選にあげられる名刹）住職・堀井隆澄の次男として生まれましたので、小供の頃から幸か不幸か寺院的な環境で育ちました。

昭和三十五年に柏原高校を卒業しまして高野山大学に入りました。在学中に高野山で加行、受戒、灌頂を受けまして、昭和三十九年に大



村上大憲さん(右)と堀井隆川さん(左)

思ってもいませんでした。

村上 石龜寺といえはカチ栗(テテウチ栗)で有名ですね。
堀井 ご存知でしたか、なつかしいですね。

学を卒業しました。また奈良生

駒山の宝山寺の松本實道管長にも弟子入りして修行を重ねましたが、昭和四十年に不思議な仏縁によりまして上京することとなりました。東京北区の東十条に高野山大師教会支部を設立して教線を拡張する任務にあたっていたわけですが、私もまさか東京で布教教化活動をするとは全く

新寺建立のいきさつ

村上 私が東京に住むようになりましてからは、不老閣主永平寺貫主、北野元峯禅師の侍掌として、常に師の身のお世話をしたのですが、師の大悟徹底したお身体から発露する言動は、とうい筆舌につくすことができません。元峯禅師は多年、芝青松寺の住職をされ、八十歳になって穩居されていたのを無理にお願いして永平寺貫主になってもらったほどの人格者ですが、全国の寺々の請に応じて旅されたときによくいわれたものです。「寺が軒を並べてたくさんあるところがあるかと思うとまた極めて少ないところもある。多いところは廃寺なり合併するがよい。少ないところには新しい寺を建てるがよい。しかし新しい寺をつくるのは容易でない。一生、命がけでやろうという道心家がいなければ教えは広まらない」と。この禅師のお心が、私の新寺建立の大きな原動力になりました。

私は不老閣侍局に務めていた関係から、有力な信徒と親密になり、数人の方々の自宅へ毎月読経法話に参るようになりました。その一人に築地の料亭・新喜楽の創業者、伊藤きんさん(法名・如意庵歎喜楽遊禅尼)がおられました。伊藤さんは大田区久が原に三三〇〇坪の土地を求め、如意輪觀世音菩薩を祀って如意庵と称し、有髪の禅尼となつて穩棲するようになりましたが、ほとんど住まずに亡くなりました。その如意庵は養子の一中節都派の家元・樗太郎氏が相続されましたので、私はそこへ毎月読経法話に参るようになり、はじめてその地域の事情を知りました。

大田区は震災後、郊外の住宅地として急激に人口がふえ、禅宗の信



曹禅寺（書院・庫裡）

徒もふえました
が、禪宗の寺は
馬込に二軒ある
だけで、禪門に
帰依する人々は
甚だ不便を来し
ておりました。

その実情を知
って、私は不徳
非才をも顧みず
にこの地に禪道
宣布の道場、法
要堂の殿堂を
建立しようと、
一大決心を致し
ました。

当時、寺院の
創立や廃止合併
は地方長官の権
限に属していま
した。昭和二十
年以降は簡単に
なりましたが、それまでは三〇〇坪以上の寺院名義に登記される境内
地と、本堂庫裡あわせて五〇坪以上の建物、それに一〇〇軒以上の檀

家か五〇〇人以上の信徒の署名捺印の名簿がなければ許可されない規
則がありました。（維持・経営できる財産も必要でした）

私はそのきびしい三条件を実現するために、昭和七年春、まず大田
区矢口町の頓兵衛地蔵堂の付属地に一八坪の仮建築をして禪宗教会を
開設しました。その後教田の開拓に努めまして、昭和九年には池上競
馬場跡にあった五〇余坪の共有墓地の使用権を取得し、それを檀徒の
使用墓地としました。昭和十一年には池上本門寺に有利な三五〇余坪
の土地を購入し、池上本門寺の所有地三〇〇坪と交換しました。昭和
十三年の春、信徒の浄財喜捨によって本堂兼庫院五〇余坪を建築し、
ようやく新寺建立の大願を果しました。（現在の敷地は約五七〇坪）

その年の十月、曹洞宗管長・鈴木天山猊下を拜請して創建入仏式を
厳修、以来禪道の宣布に専念しました。毎週行う座禅の会には、近く
の慈恵医大予科の学生や区内の青年たちが多数参加しましたし、毎週
の法話会にも信徒が多勢集まりまして、新寺建立の成果をみんな喜ん
でくれました。敷地は私が寄付し、建物は檀信徒が寄進しました。

ところが、昭和二十年四月の大空襲でお寺は全焼してしまいました。
それでも直ちに仮建築をして寺務を執りました。そのうち水上の母の
ところに疎開していた妻子も帰ってきました。再興にかかりました。そ
して昭和三十三年に現在の本堂を再建し、管長・高階瓊山猊下を拜請
して入仏式を行い、併せて結制上堂を修行しました。昭和四十三年に
書院庫裡も建築し、檀徒総代の松原弁護士が山門を建築寄進され庭園
も築造してようやく復興の念願を達成したというわけです。

堀井 お話を伺っておりますと、昔はずいぶんきびしい条件だった
ようですね。それに二度もお寺を建立されたわけですから、そのご苦



青葉山真照寺

労は大変だった
と思います。

私の場合は、
大師教会の東十
条支部設立に場
所を提供された
篤信者、関根さ
わ女史のご意志
を継承しまして、
弘法大師の御霊
徳を感謝して報
恩行に徹するた
めに、新寺建立
を願いました。

昭和四十六年
にたまたま都営
八王子霊園のそばに土地を求めることができまして、翌四十七年には
小さいながらも本堂と庫裡を建立しました。昭和五十一年には隣接地
を購入しまして純庫裡を増築しました。おかげさまで五十八年には本
山及び東京都知事から宗教法人設立の認証を受けることができました。
現在は、本堂と庫裡という最低限の宗教活動の用に供する境内と建
物があれば、その土地は借地でもよいことになっていますが、寺院規
則書に添付する書類（一九種）や参考資料の整備が大変です。また都

庁の宗教法人係のチェックもきびしいものです。責任役員は三名以上
で、一名は住職、他の二名以上は檀信徒または教師、法類で構成し、
一定の割合を超えて親族が役員に含まれてはいけません。また今まで
曖昧だった責任役員会と檀信徒総代会の総代は別機関として設置し、
それぞれ職務権限、招集権限、議決数などを明確に規定し、毎回議事
録をつくり、決定は三分の二以上です。その上解任条項もありまして、
住職をはじめ他の役員は、職務継続不相当と考えられる一定の事由が
生じ認められるときは解任できるというわけです。

村上 私などは今まで住職一任で処理してきたのですが、住職とし
て不適当な行為をなした場合、われわれ住職もある日突然解任されて
しまう時代になったというわけです。

——お二人のお話を伺っていますと、戦前と戦後では寺院に対する
国や地方の行政が大きく変わったことがわかります。

布教活動

村上 私どもの曹禅寺は地域の禅宗信徒をはじめ地域住民や地元団
体の道場として無償で貸与しております。毎週一回座禅会を開いてい
ますし、学生や一般人の参禅道場としても開放しています。もちろん
彼岸法要、お盆、葬儀、法事、墓参供養なども執り行います。

最近では、ご家庭で葬儀や法事を行う場所のない方々もありそれら
の人々のためにお通夜の場所として、また法事を営む場所としてお寺
をお使いになれるような設備を設けています。お墓が当院にあるわけ
ですから、ご親戚一同が曹禅寺へ来られて一切の供養を済まされるよ
う便宜をはかっているわけです。したがって昔のように檀家を一

軒一軒廻って歩くことは最近ではいたしておりません。

堀井 私の場合は当寺が都営八王子霊園と民営の東京霊園、南多摩霊園などの公園墓地に接した場所にあるため、いわば霊園が宗教活動、布教化行の源となっています。地方出身者でそれらの霊園に新しく墓地を求められた人々とのご縁を大切にしていますので、信徒は東京や神奈川県、埼玉県、などの広い範囲にわたります。私は真言密教の総合的、包容的、現実的思想の見地からあまり宗派にこだわらず「通仏教」の精神で奉仕しています。また季刊「ともしび」という機関紙を発行し、お話しできない信徒の方々に布教の一助として配布しております。

村上 そうですか。あなたはそれらの霊園を守るという気持ちで何宗のお経でも唱えるというのではなく、自分の修行した宗旨のお経を主体として一本筋の通った立場を堅持していけるような心がけられればいいと思います。

ところで布教の精神というか宗教家の心を形成する上で、恩師から受けた影響には大きなものがあります。若い時代に永平寺の北野元峯禅師、曹洞宗管長の侍掌として三年間各地を随行したことが大へん役に立ちました。

堀井 全く同感です。私も二年間、高野山大学の上田天瑞元学長の寺に入らせていただき、日常の寺院の小僧生活を体験しながら大学に通いました。また随行して九州への布教伝道に行ったことが二度ありますが、それらが何かにつけ今日の参考になっています。

生駒山宝山寺での本山勤行も、あそこは真言律宗と、その名の示す通り戒律を重要視しており、年功序列、兄弟弟子関係を大切にして毎

日の行の厳しき、大切さを身体で教えられたように思います。現在、年令層さまさまな僧と付き合っていますと、一般論として特に僧職の人間形成には修行をおろそかにできないことがわかってきました。

現在における僧侶のあり方として、ある程度専門的な分掌が必要ではないかと思えます。一生懸命努力を惜しまず檀家を守り続ける地方の住職に、宗門のすべてを精通してやっていくことは難しいでしょう。他の職業でも同じかと思いますが、これだけ人口増、高度成長の複雑な社会にあつては、僧侶といえども分担をして使命感をもってできるライフ・ワークを考えるべきです。各宗門本山あたりにおいても、僧侶を根本的に養成する時代に即応した教育機関を作るべきだと思います。具体的には、仏教研究に没頭する学問僧や教授僧も必要だろうし、地方派遣の布教僧、海外開教師、都市開教師、参詣寺院祈禱僧、公園墓地派遣僧などが例として考えられます。

——布教活動も寺院の立地条件で、それぞれ形が異なるんですね。変化の激しい現代社会においては、ひとり寺院にとどまらず、宗教界全体の見直しが必要ということでしょうか。

このごろ思うこと

村上 最近、便利屋業が繁盛しているということですが、仏教界にもそのような現象がありまして、先日もある人から「どうも仏が成仏していない様子なので、お経を読み直してくれ」との依頼がありました。よく聞いてみると「葬儀屋さんから紹介された僧侶にお経をあげてもらったのだが、僧侶の住所も不明でお寺も見当らない」というんです。お経の出前というのか何とも奇妙な話ですね。

堀井 そのような話を私も聞いたことがあります。さらにつけ加えていえば既成仏教が封建的な檀家制度や自宗（我宗）に固執するあまり、時代の要請に応えきれず、説得力を欠いては大衆は寺院からどんな遠ざかる危険性があるといえます。

今のお寺の役割の中で、ともすると法事と葬儀が主たる役目と世間に見られ、布教がおろそかになっていく傾向から遊離現象が生ずるわけで、これは既成仏教に対する一種の警鐘だと思っています。

村上 たしかにそういう面もありますね。

堀井 本屋さんで哲学書や仏教書がよく売れているといわれますが、若い世代の間にも結構関心を持っている人があると思います。

現在は「物で榮えて心で亡ぶ時代」といわれ、精神的な飢えや苦しみや悩みを持った人が大勢いると思います。これからの寺院の理想としては、気軽に相談や出入りのできる、カルチャー・センター、コミュニティ・センター・センターとしての資格と度量、研鑽が必要と思われるます。

私は港区にある宗派を超えて僧侶一体のお付き合いができる仏教伝導協会に出入りしております。各寺院においても行（ぎょう）と実践布教を兼ねて、多様な方面、角度から気軽に僧伽（そうが）（和合の僧）と信徒が交流できる場を数多く作り、信仰生活の動機づけが必要であると思っています。

私は丹波出身の皆さんにこの機関誌や会合を通じて知り合えることの喜びを思う時、仏教者の末座からでもアドバイスできる人生相談や、信仰・仏事相談等、何なりとお役に立ちたいと思います。どうか気軽に連絡、お越しいただければ幸いです。

——今日は有意義なお話を誠にありがとうございました。

曹禅寺沿革 当寺は大乗山曹禅寺と称す。（電話・03-751-0678）

昭和七年 大田区矢口町に禅宗教会開設。

昭和十三年 実道大憲大和尚曹禅寺を開創。

昭和二十年 戦火により焼失、直ちに仮堂を建設。

昭和三十三年 本堂を再建。

昭和四十三年 書院及び庫院建立、庭園築造山門建築。

真照寺沿革 当寺は青葉山真照寺と称す。（電話・0426-63-8403）

昭和四十六年 八王子市元

八王子町に真照寺仮事務

所を設置。創始者・堀井

隆川。

昭和四十七年 元八王子町

三丁目二、三九七番地

の二に本堂兼庫裡を新築

し移転。

昭和五十一年 隣接地購入。

昭和五十二年 純庫裡増築。

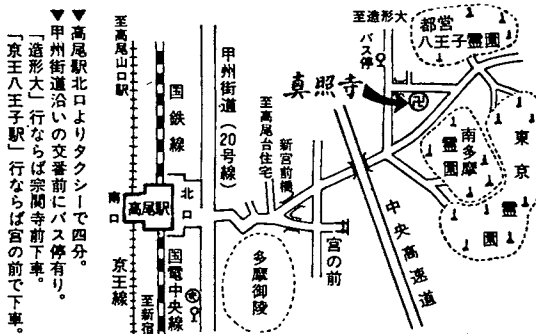
昭和五十八年 包括宗教団

体・高野山真言宗より宗

教法人真照寺の承認、東

京都知事の法人規則認証

が交付さる。



現代人におくる密教の世界

——映画「空海」鑑賞のすすめ——

堀井隆川

(山南町)

弘法大師・空海が入定して今年で一、一五〇年になる。大師を宗祖とする真言宗では、御遠忌の大法会をくりひろげているが、空海の存在は、ひとつの宗派の枠の中にとどめるには余りにも大きすぎる。

日本のレオナルド・ダ・ビンチとも呼ばれる空海の多角的な万能の天才は、宗教だけでなく、芸術・文学・医術・土木建築にまで及ぶ。

また空海が中国(唐)から伝えた密教は、民衆信仰として広がり、「日本の精神風土の地下水になった」とまでいわれている。

我が国は、明治維新以降、西欧の合理主義思想や科学技術を導入することによって、近代化、すなわち西洋化への道を歩み、特に世界大戦後において、この傾向は一段と強まりをみせてきている。それにもなつて日本人の自然観、人間観、世界観もまた東洋から西洋のそれへと傾斜を深めてきた。

この道が、戦後の驚くべき経済復興と成長を補い役立ったことは事実である。経済的、物質的な豊かさ引きかえに、今や家庭や学校においても、心の荒廃が問われるごとく、心の豊かさや心の故郷を失っているのではないだろうか。

特に西洋の科学や哲学だけでは既に壁にぶつかり、そのルーツを西

洋にだけ求める時代ではないといわれる。日本人は所詮日本人であるとの「宿業(しゆくごう)(縁)」から逃れることはできない。東洋思想、とりわけ仏教への回帰が、昨今叫ばれ、専門家でも、いかなる主義・主張・信条を超えて存在しうる深遠な科学思想の原点があるといわれている。

例えば密教の中には天体や宇宙に関することを始めとして、単なる宗教世界を超えた非常に優れた科学性が、数多くあると主張されている。

密教とは、秘密仏教の略で、密教以外の仏教、すなわち顕教では釈迦をその教主とするが、密教では大日如来という、さらに大きな宇宙の生命体ともいべき存在を教主とする。そして仏法を体得するには、言葉や論理だけでなく、身体と言葉と心・身・口・意の三密を実践の主体とする。日本の密教には真言宗系の東密と天台宗系の台密がある。現代の複雑な社会にあつて、価値感の多様性が問題にされる今日こそ、日本人自身のルーツを求めて、心豊かな精神史を溯行していく必要があると思われる。

数年前から絵画(密教美術)や音楽面(声明)における密教ブームは、本能的かつ精神的な東洋及び日本への回帰現象といつて差しつかえないと思える。

このような観点に立ち、本年の御遠忌記念事業の一つとして、全真言宗と東映の提携作品として、映画「空海」が上映される運びとなった。真言密教の宗祖、空海の伝記を映像を通して眺めるだけでなく、一宗派にとどまらず、日本人の心のルーツを探り、日本の西洋化の過程で失ってしまった心の故郷を解返するための国民映画といえる。

この好機会に、どうか御鑑賞(四月十四日より東映系公開)していただけるよう、御奨めする。当時(真照寺)にも、全国共通特別鑑賞

券(当日券一五〇〇円のところを一二〇〇円にて発売)がある。左記にお申込みいただければ、郵送します。

▼〒193 八王子市元八王子町三ノ二三九七・真照寺(堀井隆川)

松喰虫に荒らされた郷土の山

田 辺 輝 一 郎

(柏原町)

連休明けの五月初旬、久しぶりで先祖の墓所にお参りすべく、大阪から福知山線に乗って柏原を訪ねた。

車窓から見える美しい翠色の山々を期待していたが、気がつくとも山々の松の木が意外に多く松喰虫にやられ、褐色の惨めな枯木の残骸を見せているのに気がついた。

郷土の道路を拡張し、あるいはビルを建てるのも発展のために大切なことと思うが、郷土の先人が残した丹波の山々の景観を損うことは、何としても防止しなければならぬ。それを心に止め、枯死対策を考えている人たちが、郷友会員の中にもいないのだろうか。

この対策は、枯死した松を伐採して焼却するより方法がないように聞いている。

水上郷友会は卒先してこの伐採焼却運動を起こすべきと思うが、各位のお考えは如何。

旅 情

秋 元 多 美 子

(氷上町)

エーゲ海いま眼で見つゝ、素晴らしき色とりどりの絵の具流して鮮やかに実れるレモン 島かおるエーゲの海は静かなりけり
乗りて見てラクダの背なに驚きぬ 揺らつゝゆくスフィンクスの道
コーランの祈り捧げるイスラムの 深き心に吾は打たれぬ
印度洋に難波せしとかロシヤの船 波に洗われ傾きしまま
日本よりビザンチ時代に送られし 桑の並木は今も繁りて
ドームかと思ひて登りしバンテノン 古代ギリシヤの音楽の堂
パキスタン小さな子等も走りより ガラスふきてはお金よこせと
名に高きピラミッド前に我立ちて 築きし人の智慧の深さを
立派なるモスクに入りてイスラムの 教徒の祈りに心打たれぬ

*

エメラルド色に輝く万座毛^{マンザモウ} 多くの人の断ちし命を
ひめゆりの塔のみに吾たちて 若き命を断ちし乙女等
沖繩の戦跡廻り今更に 傷の深きに胸のうづきを
必ずや勝つを信じて散りゆきし 乙女の心胸にひびきて
バスガイドもの悲しげに散りゆきし 乙女の心をせつせつと説く

氷上農高、歓喜の優勝



すべてストレート勝ち

意地見せた氷上農高

[illegible]

パ
ン
ー

悲願の全国制覇なる

あかぎ国体で初優勝

氷上農高女子バレー部

[illegible]

029873A

優勝を報ずる神戸新聞と丹波新聞

水上農高女子バレーボール

あかぎ国体で全国制覇

昭和五十八年十月、群馬県あかぎ国体において、氷上農高女子バレー部（高見論監督）は遂に悲願の全国制覇をなしとげた。

五十八年春の高校バレー、夏のインタターハイと、再度決勝戦に進出したながらも無念の涙をのみ、今度こそと残る一戦のあかぎ国体にすべてを賭け、三たび決勝に進んだ。対するは旭川実高、丹波の魔女[※]は快打を連発、2対0のストレート勝ちで日本一の栄冠を手中にし、郷里の衆六百余の待つ黒井駅頭[※]に文字通り錦を飾った。

五十八年度以降、氷上農高女子チームの戦績は左記のとおり。

三月11春の高校バレー全国大会・準優勝

六月11兵庫県高校総合体育大会・三年連続優勝。

七月〓近畿高校バレーボール大会・初優勝。

八月11全国高校総合体育大会・準優勝。

十月二あかぎ国民体育大会・初優勝。

十一月11兵庫県新人大会・四年連続優勝

五十九年二月―春の高校バレ―西近畿予選・三年連続優勝

そしてこの三月、再び「春の高校バレー全国大会」に挑戦する。

なお当チームの後援会では郷友からの軍資金をカンパ中です。

一口五千円、何口でも。送付先〓振替口座「神戸〇一五七三〇八」

「兵庫県立氷上農業高等学校クラブ後援会」宛にお振込みください。

掲 示 板

左記の会員がたの本年度行事予定をお知らせいたします。郷友諸賢のご鑑賞と絶大なご声援とをお願い申しあげます。

◎細見綾子さん（俳句）

▼四月から一年間、月一回（木曜日）午後七時～七時半、NHK教育テレビ・趣味講座「俳句」の番組に講師として出演。テキストの「俳句入門」は四月発売予定。出演日は四月十九日、五月十七日、六月二十一日、七月十九日、八月十六日、九月二十日。が決定、十月以降も毎月一回、来年三月まで放映されます。

▼五十九年秋、青垣町東芦田の高座神社境内に句碑建立の予定。

*

◎可部美智子さん（陶芸）作品を左記陶芸展に出品の予定です。

▼三月二十八日（水）～四月五日（木）大

丸ミュージアムにて「女流陶芸イン大阪展」

▼四月一日（日）～四月五日（木）吉祥寺駅南口・井の頭画廊にて「久美の会陶芸展」

▼五月二十一日（月）～二十七日（日）銀座八丁目・アートホールにて「日本陶彫会展」

▼八月十五日（水）～二十二日（水）上野・東京都美術館にて「陶光会全国陶芸展」

▼十月、京都美術館にて「女流陶芸展」

*

◎笹倉 強さん（音楽）

▼六月二十二日（金）、都市センターホールにて「城北高校合唱団・第一九回定期演奏会」

▼七月、アメリカ各地演奏旅行「城北グリークラブ・男性合唱団」

▼十二月二十一日（金）午後七時から都市センターホールにて「ヘンドルのメサイヤ」・城北オラトリオ合唱団。

*

◎篠原よね子さん（フランス刺繍）

▼七月二十日（金）～二十五日（水）吉祥寺・東急百貨店五階サロンにて「篠原よね子作品集出版記念・作品展」

◎西崎 祥さん（日本舞踊）

▼九月六日（木）午後六時より国立小劇場にて公演。「第三回・西崎祥の会」



※西崎さんは日本舞踊界に入って今年で三十年になります。そこで今年の公演は『舞踊生活三〇年記念公演』として、特に国立小劇場の『檜舞台』を踏み、西崎舞踊の奥儀を存分にご披露しようというわけです。郷土の柏原から出た一少女が、三十年の星霜を経て、今年遂に日本の檜舞台に登場いたします。郷友諸賢！九月六日には大挙して応援にかけつけようではありませんか。そして力強い拍手をもって祝福し、彼女の前途を期待したいものです。

（写真は西崎さんの舞台姿）

西崎さんからは、郷友の方には招待券をさしあげたいとのことでしたが、この公演には巨額の出費もかさむこと、ささやかな応援の意を表すためにも入場券を定価で入手することを申しあげたいと思います。何。入場券は一枚につき三千円です。ご希望枚数と送付先明示の上、左記の当人宛ご送金賜らば幸甚です。

※申込み先

▼〒223・横浜市港北区大柵町五〇〇ノ八

西崎 祥

話 題

常岡幹彦氏の日本画

脚光のきざし

常岡幹彦氏の日本画展は五十八年度に入って大きな展開をみせた。これまでは毎年郷里の丹波新聞社や東京の中央公論社画廊で開いていたが、五十七年四月、「常岡文亀回顧展」に幹彦氏の作品も加えた『父子展』を銀座の東京セントラル絵画館で開催するに至って、幹彦氏の日本画はにわかに世の脚光を浴びるところとなった。

個展というのは、ほとんどの場合、作家が画廊を借りて行なうものであるが、昨年の二つの常岡幹彦日本画展は、有名な二つの美術館・画廊が、それぞれ自主番組としてとりあげたのである。

その一つは日本橋の山種美術館であり、常岡氏も渾身の力作を揃えた。山種でも三月か

ら四月にかけて一カ月半、東京、京都、北九州と三カ所にわたって巡廻展示した。その後この中の一点は読売新聞・秀作賞の候補にまであがったという。

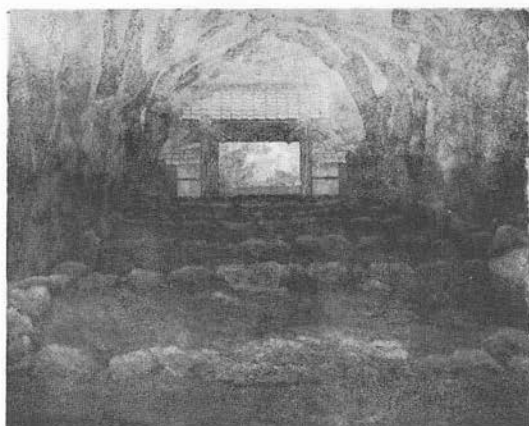
もう一つは銀座の東京セントラル絵画館企画主催の個展で、十一月十五日から二十七日まで開かれた。当館丸山社長の肝煎りで常岡氏は小品三六点を出品、郷友も多くつめかけてなかなかの盛況であった。

昨年二月、彼は丹波新聞社でも恒例の個展を開いているので、五十八年度は計三回、エネルギッシュな活躍ぶりを見せたが、今年は個展を休んで制作に没頭するそうである。

近年、彼の画風もまたダイナミックな展開を示している。かつて中国宋時代の名画・范寛の大作に魅せられた彼は、文字通り暗中模索の数年をさまよい、逆に日本人としての自覚にめざめたという。丹波の雪景を好んで描き、没骨描法をもつてその深い情懷を浮きぼりにする。丹波の梅雨、丹波の秋もよく描き、あのひとときわ清冽な村落の情景を、淡い彩りでしかも簡潔に表現する。年ごとにうすれゆく昔のあの丹波が、彼の手で再現されているのを目のあたりにするとき、郷愁、帰心にか

られて、何故かたまらなく嬉しい思いにひた
るのは一人私だけであろうか。

青垣町・高源寺（東京セントラル出品作）



東洋の画家は一般に晩成である。彼はいま
五十代なかば、いよいよ油の乗る年輪に達し
た。今後の活躍と、父の文亀氏をしのぐ成長
を期待してやまない。

“日本桜の女王” 出る

郷友会副会長・渡辺隆男氏（氷上町・朝阪）
と渡辺貴美子さん（山南町・下滝）の長女、
渡辺優貴子さん（二五）が、五十九年三月、
第十代「日本桜の女王」に選ばれた。

全国から約一〇〇名の候補者が推され、最
終的には二五名にしぼられてこの三月二十五
日、新宿センチュリー・ファイアットホテル
で決定審査会が行なわれたが、優貴子さんは
友人の女流写真家に推され、やむなく出場し
たのだという。和装姿での選考会は、一人ず
つ壇上で五名の審査員から矢つぎ早に質問を
あびせるが、ときには英語で答えなければな
らない。一年半の英国留学と上智大学で学ん
だ優貴子さんの英語は外人も驚くほど流調で
「もしも私が桜の使節に選ばれたら、日本人
の奥ゆかしさと謙譲の美德を世界の人々に伝
えたい、そんなことで少しでもお役に立てる
ならとても幸せです」と述べ、万丈の拍手を
あびて晴れの王冠（ミキモト製・時価八千万円
という）を頭上にしした。

当コンテストは「日本さくらの会」が主催
して今年で二〇年、二年に一度、日本とドイ
ツとアメリカ三国でそれぞれ「桜の女王」を
選んで国際親善の使節としている。日本の国
花である桜を世界中に植えて親善をはからう
というもので、これまで海外に既に一五〇万
本の植樹をしたという。日本国内はもちろん
のこと、各都道府県にも組織があつて全国各
地に植樹されている。会長が福田一、衆議員、
参議員百余名のほか、多くの大会社がスポン
サーに名を連ねている。

優貴子さんは、桜の咲く四月を中心に日本
各所を廻つたあと、ドイツ、ハワイ、アメリ
カ、台湾などに親善使節として赴き、植樹祭
などに出席しながら二年間の任期をつとめる
こととなる。

（写真は渡辺優貴子さん）



出版

谷垣正雄著・水と兵隊

——日中事変回想記——

昭和三年に幹部候補生として津田沼第二連隊に入隊、昭和六年に陸軍工兵少尉、その後松戸工兵学校で鑿井（井戸掘り）特別補備教育を受けた。部隊の駐屯地にいち早く水脈を掘りあてて飲料水を補給する当時最新鋭の機械化・自動車部隊である。昭和十二年、日支事変が始まると直ちに出勤、中国大陸の最前戦を縦横に走り戦火をくぐった数々の思い出が生々しく語られている。谷垣中尉は中隊長として活躍、部隊歌まで作詩するインテリ将校で、当時の日本兵の生きざまのなかにその温厚な人柄がにじみ出ていて読者をひきつける。ご希望の方にはさしあげるとのこと、谷垣氏までお申し出ください。

坂本重雄著・公務員の社会保障

——その法構造と機能——

柏原町出身、昭和七年生れ、一橋大学院終了後、東京都立大学助手、静岡大学助教授を経て、現静岡大学教授。「アメリカの団体交渉制度」、「公務員共済入門」、「しあわせに生きる権利」、「官公労働基本権の法構造」、「地方公務員共済の理論と実務」、「現代労働法」など、次々とこの方面の旺盛な著作活動を続け、昨年末、表記の著書を勸草書房から出版した。（A5判二三六頁・三二〇〇円）高齡化、低成長時代における公務員の医療、労災補償の問題、定年制、退職手当、年金制などについて、今後の方向を提示する。

会合

「山ざる」会

五十八年度「山ざる会」は六月六日、銀座のアサヒビアホールで開催された。山ざる誌上広告協賛者、寄稿者等、左記の方々が参加された。遠く大阪から、下中昭男氏、石亀義明氏の出席があった。当日松山編集長はお元気で変らぬ様子であったが、いつもよりお帰りの時刻が早目だったので、折からの小雨のせいかなどと気にする人もいました。

伴伸信次 田中 寛 吉住重造 須原 清
常岡幹彦 谷垣正雄 渡辺金三 足立敷平
宮野 近 山内隆行 坂上勝朗 村上末吉
波多洋三 西川政一 田中篤郎 足立 正
足立謙悟 下中昭男 芦田律子 上山 顕
足立かをる 足立和巳 芦田坦 中井良平
石亀義明 松山幸逸（順不同敬称略）

柏高三十年（第七回）卒

第二回同期会

昭和五十六年十一月の初会合以来一年半ぶりに、第二回を昭和五十八年六月二十五日午後二時より新宿住友ビル五一階のみゆき飯店で行いました。

初回の時は柏高卒業以来四半世紀ぶりとなって、互いにどんな「成長ぶり」かと、大きな期待と不安がありました。出席者二〇名が卒業以来の過ぎ来し方を各自紹介するうちに、学校時代には一度も声をかけ合うこともなかった方達とも、ある時同じ学校に通った親しみで、ほのぼのとした気持で話はずんだものでした。

今回の出席者は一四名と前回より少人数でしたが、新顔の人が二人加わってあとは顔なじみ、ぎこちなさはみじんもなく和やかに談笑、二時間の予定が三時間、またたくうちに過ぎ、店の人に時間一杯を告げられあわただしく閉会、次回の当番を決めて席を立ちました。夏至を過ぎたばかりの時期で外は明るく、記念撮影に全員行儀よくおさまって散会しま

した。二次会、三次会とオールナイトで頑張った方々もあったとか。こうした会集は集まるまでは大儀な思いを抱いたりしますが、懐しい面々と顔を合わせれば各人活躍の舞台が異なるだけに話題豊富、時がたつのを忘れてしまします。お互いの生々しいふだんの生活を



知らないのかえって気持がほぐれます。

柏陵同窓会東京支部総会

五十八年度柏陵同窓会東京支部総会は、七月九日午後六時より日比谷の日生会館で行われました。出席者数は総勢七九名。通知送付数七一八通に対して一一パーセントの出席率で、まずまずのにぎわいでした。

五十四年六月に新名簿を作成したときには会員数九一二名をかぞえましたが、異動、死亡、その他の理由で減少の一途をたどり、今年の総会通知は六〇〇人台になりました。静岡、長野、新潟以東に在住活躍する同窓の士はかなりの数にのぼるものと推測されますので、お心あたりのかたはぜひ事務局までおしらせください。

また来る六十年に東京支部発足三〇周年を迎えるに当り、六十年総会は記念大会とすることが採択されました。関係各位にはいろいろお願いごとを申しあげると思いますが、その節はどうかご協力いただきましたたく存じます。なお事務局は昨年左記に移転しました。

〒101 東京都千代田区神田小川町一ノ一

ダイレクト・メール・サービス案内

坂上勝朗（二九年卒） 〇二九三一二九六一

ゴルフ同好会報告

早いもので、再開第一回コンペを五十五年七月十五日小金井CCで開いて以来、昨年十二月七日川崎国際CCまで回を重ねること一回、三年余の月日を経過いたしました。

その間会員諸兄姉は、珍プレイに笑い、ミスショットに天を仰いで悔しがり、グッドショットには手をたたき、まことに和氣藹々日頃の憂さを忘れ、会の一日を楽しくすごしてまいりました。

この会はモットーの一つに不文法として、名門コースでプレイするというのがあります。第一回から一回四回まで、この法にふれることなく運営してまいりました。このことがこの会の魅力の一つでもあります。

今後ともこの不文法を守り、魅力ある会の運営をいたたく存じます。会友の皆様はじめ郷友の諸兄姉の御声援、御参加を心よりお

待ちしております。

△追記▽ 当会は年会費五〇〇〇円、参加費一回につき六〇〇〇円（賞品とパーティ費で、プレイ費は各自支払）開催日は平日を原則として運営いたしております。なお新規に参加希望の方は当会員または左記へ御連絡下さい。

郷友会事務局または、足立謙悟

（〇四五一三一二五二九一 昼間）

最近の成績（入賞のみ）

第11回	58・3・16	鷹之台CC
1位	岡林逸男	2位 荻野 武
3位	伴仲信次	B B 広瀬五男
第12回	58・6・16	東京読売CC
1位	松下文雄	2位 松岡昭宏
3位	佐々木宏	B B 広瀬五男
第13回	58・9・9	多摩CC
1位	松岡昭宏	2位 大西修三
3位	渡辺隆男	B B 足立謙悟
第14回	58・12・7	川崎国際CC
1位	伴仲和子	2位 小山元和
3位	渡辺隆男	B B 足立 正

以上

関東氷上郷友会

昭和五十九年度・新春役員会

昭和五十九年度の新春役員会は、二月九日午後五時半より八時まで、銀座一丁目の朝日ビヤハウスにおいて行なわれた。

出席者は左記の二二名（敬称略）であった。

有田喜一 西川政一 伴仲信次 村上末吉
渡辺隆男 須原 清 吉住重造 芦田律子
足立かをる 足立正 坂上勝朗 田中篤郎
田中 寛 谷垣正雄 鶴田ゆき子 田英夫
西崎 祥 西山敬次郎 宮野 近 山内隆行
若森敏郎

坂上氏の司会で先ず伴仲会長が挨拶、今年氷上郷友会は発足以来八八年めに当り、人間でいえば米寿の年、この秋には何か記念となる行事を考えたいとの提案があった。つづいて有田名誉会長の乾杯の音頭、田英夫氏の丹波談や西山敬次郎氏の当選の謝辞と決意の表明などがあり、議事に入った。

吉住監事から会計報告、渡辺副会長から山ざる一五号の進行状況報告、松山さんの特集をくむこと、名刺広告を一六号から従来の

三〇〇〇円を四〇〇〇円に値上げする提案があり、いずれも承認。次に足立正理事から会務の円滑な進行をはかるため常任理事若干名を設ける件の提案があり、その人選は会長・副会長に一任で可決した。また伴仲会長から提案された八八年の記念行事については、会長がその実行委員若干名を指名して行事の立案に入ることとなった。明治二十九年、わずか数名で発足したこの会も今や千名に近い。今年の総会は老若男女数百名がつどうような魅力ある大会にしたいものなどと、議論百出して、いつになく熱のこもった会であった。

寄付金

(自昭和58・1・1
至昭和58・12・31)

- 松山幸逸 七〇〇〇円
- 松山裕 五〇〇〇〇円
- 植村章子 一〇〇〇〇円
- 千種倫幸 五〇〇〇円
- 田英夫 五〇〇〇円
- 高見嘉都司 三〇〇〇円
- 石亀義明 二〇〇〇円
- 谷垣正雄 二〇〇〇円

会費領収報告書

(自昭和58・1・1
至昭和58・12・31)

- 明治生命代理店・氷上会 二五九八三八円
※氷上会とは足立正氏が勤める明治生命保険の代理店(店主・伴信次氏)で、郷友会会員が氷上会を通じて保険に加入した場合、その代理店手数料が積み立てられて氷上郷友会に寄付される仕組みで、今回は五十七年度分手数料の一〇五〇〇円とその定期預金利息四三八円、及び五十八年度分手数料一五〇〇〇円が寄付されたもの。
- 57年分〓古倉克実、大江範子、宮野近、吉住重造、久安敏夫
- 58年分〓秋元多美子、山岸幸子、谷垣博、高桑良弥、足立石蔵、勢川武彦、東郷茂、加藤伝太郎、野村醇、泉睿子、勢川雅弘、勢川直澄、岡本庄太郎、植木和夫、村上良男、森本益夫、織田信和、上田三四二、須原逸郎、藤田千春、村上豊、福井謙三、村上昇、伊田光男、影山朱実、藤井豊、坂本正幸、久米裕、赤松誠司、芦田信明、高野孝一、山本清士、栗田功、莊克衛、上田譲、足立正、山中一郎、
- 生田清弘、田中茂男、阿部ひさ子、下中昭男、藤田正雄、貴志典子、荒木泰雄、羽賀澄代、千葉和子、小谷正巳、高橋通也、村上久夫、足立和雄、横田公子、大石佐代子、中井良平、松枝勝、田中寛、吉住重造、菅野きぬゑ、稲次淑子、春日町会議長、有田潔司、永井輝江、岡吉明、門脇恵子、松下文雄、松本金吉、東田実、荻野武、高野康広、宮崎浄式、石田勝彦、小谷崇、杉上能章、相田広子、石井和也、徳田八郎衛、石田専太郎、上嶋一晃、森田淳二郎、市原このゑ、中谷幸雄、大槻作治郎、鈴木恒子、天野清子、荻野和雄、足立元美、荻野泰次、安達健一郎、
- 59年分〓久保豊、宮本はるゑ、上田鉄太郎、須原清、前田武彦、木村つた江、片瀬勝義、
- 60年分〓足立治、小野智恵子
- 61年分〓芦田律子、足立かをる、高見幸男
- 57、58年分〓田敏夫、梶原やす子、西山敬次郎、岡林逸男、船越祥郎、荻野吟逸、足立静男、谷川義男、依藤俊平、十倉博、古川美代子
- 57、59年分〓石倉軍治、岡林裕泰、藤原岩市、上村愛子、高尾久子、斉藤陽子
- 57、60年分〓大野渥子、阿部すみ江

- 57 61年分 足立昌彦、大木千里
 ●57 63年分 水船隆昌
 ●55 58年分 佐藤菊子
 ●55 59年分 片岡恭子
 ●55 56 58 60年分 足立三治
 ●56 58年分 芦田重秋
 ●56 60年分 山本紀子
 ●58 59年分 西尾久之、若栗すぎ子、吉田恵美子、足立徹、柿原陽、音無多美子、足立勲平、西崎祥、藤原ふみ子、木呂子恵美子、久保良雄
 ●58 60年分 山内隆行
 ●58 61年分 渡辺金三
 ●58 65年分 足立順治
 ●59 60年分 植村章子、正呂地群治、広瀬五男、村上大憲、永井勇、上田正巳、富川清司
 ●59 61年分 畑武司、林田孝子、藤尾知恵子
 ●60 61年分 井上和三
 ●60 64年分 大西俊治
 ●61 62年分 足立和巳、谷口捷、田英夫
 ●61 63年分 鈴木和栄
 ●61 65年分 谷垣正男

開催日	3/12	5/14	開催日	7/9	10/8
足立正	6-2	4-2	足立正	2-7	2-4
新島	4-3	3-3	新島	3-3	2-2
前川	2-5	5-3	前川	7-1	1-5
藤田	2-6	1-6	藤田	—	3-4
谷口	3-2	—	足立源	2-5	3-1
足立源	2-0	3-1	三沢塚	3-5	6-0
三沢	2-2-1	—	永塚	2-2	—
川畑	2-2-1	3-2	若月	5-1	—
梶浦	1-4	—	勢川	—	2-3
松山	4-1	2-4	渡辺	—	1-3
			坂上兄	—	3-2
			坂下弟	—	2-1

* 左勝，右負，
 2-2-1は2勝2負1持碁

- 62 63年分 常岡幹彦
 ●62 65年分 高見嘉都司
 ●62 66年分 田辺輝一郎
 ●63 64年分 畑秀夫
 ●63 65年分 三宅良夫
 ●63 67年分 小林武治
 昭和五十八年度・氷上囲碁会記録

関東氷上郷友会の沿革

本会は明治二九年（一八九六年）十一月二日、東京神田の料亭において創立の発会式を行なったといわれる。

当時東京帝国大学の学生安藤広太郎（後の農学博士）、同田昌（後の大蔵次官）氏らの奔走によって結成、会長には旧柏原藩主織田信親子爵、副会長に田健次郎男爵（元台湾総督）が就任。会の目的は、東京における郷土出身者の親睦と友情を深めるとともに、郷里氷上郡の開発発展に寄与することにあつた。以来、幾多の曲折を経ながらも今日まで存続し得たことは、先輩各位の郷土愛のたまもので、とくに井上雅二、矢本平蔵、小谷哲、石橋治郎八氏らの功績を逸すことはできない。昭和二十八年一月二十八日、東京新橋駅楼上の「日本食堂」で戦後第一回の「氷上郷友会」が開催された。百名を超える郷友が喜々として集い、戦中、戦後の飢餓と混乱、生死を生き抜いた郷友たちが、相擁して久闊を叙し、熱っぽい雰囲気感激の大会となつた。

田健次郎会長のあと、会長の椅子は織田信大子爵、安藤広太郎農学博士とひきつがれたが、この大会において石橋治郎八石橋生系社長を会長に迎えた。石橋会長は以来十八年間の長期に亘って郷友会発展に腐心され、昭和四十六年八月、八三歳をもって逝去された。同年十一月、つるや産業社長足立三治氏を会長に迎えた。足立会長は以来五十六年十月まで十年間、郷友会の発展に貢献されたが辞任を申出られ、後任に副会長の伴仲信次氏が選任されて現在にいたった。

関東氷上郷友会会則

(名称)

第一条 本会は関東氷上郷友会と称する。

(目的)

第二条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて郷土の発展に資することを目的とする。

(会員)

第三条 本会は氷上郡出身者及び縁故者を会員とする。

(役員)

第四条 本会に左の役員をおく。

名誉会長 一名

顧問 若干名

会長 一名

副会長 若干名

常任理事 若干名

理事 若干名内二名会計担当

監事 二名

(役員の仕事)

第五条 会長は本会を代表し会務を統轄する。

副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは副会長の互選により一名がこれに当る。

常任理事及び理事は会務を執行する。監事は会務及び会計を監査する。顧問は会長の諮問に応じ本会の発展を促進する。

(役員を選出)

第六条 会長及び役員は総会において選出する。

顧問は理事会の推薦により委嘱する。

(役員の任期)

第七条 役員の任期は二年とし、重任を妨げない。

(役員報酬)

第八条 本会の役員は総て名誉職とする。

第九条 会議は総会と理事会に分ける。

総会は毎年一回十一月に開き必要に応じ臨時総会を開催する。理事会は会長、副会長、常任理事及び理事を以て構成し、必要に応じ会長が招集して開催する。

(会費)

第十条 本会の会費は年額金一〇〇〇円とする。

別に必要に応じ理事会の決定による額を徴集することができる。

(寄附金)

第十一条 寄附金は理事会の承認により受納する。

(会計報告、会則の改正)

第十二条 本会の会計年度は毎年十月一日より翌年九月三十日迄とし、会計報告は十一月の総会において行なう。

本会則の改正は総会の議を経て決定する。

昭和58年度 会計報告書

(昭和57年10月1日～昭和58年9月30日)

関東水上郷友会

収 入 の 部				支 出 の 部			
科	目	金 額	摘 要	科	目	金 額	摘 要
繰 越 金		1,325,263	現金350円 定期預金904,891円 振替貯金420,022円	出 版 費		650,206	“山ざる” 14号製作・発送代
年会費収入		290,000	174名	通信・印刷費		182,290	総会通知発送代他
総会費収入		288,000	49名	消耗品費他		56,930	前会長他 3 名感謝状額 40,000円 丹波新聞新年広告 12,000円其他
役員会費収入		125,000	25名	支払手数料		8,650	郵便振替手数料
編集会費収入		130,000	26名	総 会 費		310,575	於 “浅草駒形麦とろ”
寄 付 金		212,000	16名	長 寿 祝 金		124,500	
広 告 収 入		491,000	66名	慶 弔 費		132,000	永井輝江さん、 松山幸逸氏
受入手数料		500,000	明治生命代理店手数料	会 議 費		332,265	役員会、編集会
雑 収 入		555,124	預金利息	繰 越 金		1,618,971	現金35,190円定期預金1,460,015円 振替貯金123,766円
合 計		3,416,387		合 計		3,416,387	

お便り・短信

安達葉子さん（旧姓高松 青垣町東芦田）

今年の八月田舎にお墓参りに帰りました。田舎もだんだん様子が変わり、田畑の整地も出来美しくなつて居りました。丁度二十四日盆のお祭りで、佐治の町中はにぎわつて居りました。色々な飾り物も出来て居り、幼い時が思い出されました。（58・10・13）

足達 治氏（青垣町杉谷）十一月三日から

京都に出かけますので（総会は）欠席致します。お陰さまで元気で頑張っております。

再会を約す別れや花菖蒲（58・10・8）

足立和巳氏（青垣町）嘗てより両親の健在を弟妹達と一堂に会して祝つてやる機会をと思ひながら、つつい時を得ず、漸く今年の

お盆に弟妹達に呼びかけ、その機会を得ることが出来、母の喜寿の祝と共に総勢二十人が丹波青垣（昔の遠坂村中佐治）に集うことが出来た。もう久しく歌うことのなかつた八十五才の父が、精一杯の声を出して福知山音頭を歌ってくれ、涙が出るほど嬉しく思つた。少しづつ変わりゆく丹波の地にも、まだまだ四方の山並みや川の流れに、昔の思い出は残つており、意義ある盆休みとなつた。（58・10）

足立勲平氏（青垣町）本誌を通し温かい故郷のぬくもりを感じます。共通の故郷を持つものの共感というのでしょうか。（58・6・7）

南海工業（株）柏原工場を石亀（実弟）が建てましたので、十月二十七日より十一月七日まで帰泊致します。（58・10・20）

足立敬子さん（旧姓荻野 市島町）木更津十六年、故郷市島町より長くなりました。（58・10・15）

足立順治氏（氷上町井中）本年度祝寿者の村上大憲さんはよく存じ寄りの方です。大憲さんのお兄さんの輝方さんは、私の子供の頃よく私の家に遊びに来られ、四人の姉等と大さわぎで歌留多とりをして居られたことを、子供心に覚えています。明治四十年頃のことです。姉等はその頃京都の女学校から冬休みで帰つていたのでと思います。（58・10・13）

足立昌彦氏（春日町）会誌山ざるはいつも楽しく拝見させていたゞいております。（58・10・20）

足立守久氏（青垣町）住所が変りました。（※名簿欄をご参照ください）今後ともよろしくお願い致します。（58・10・26）

足立義雄氏（氷上町）四月一日付をもって名古屋より本社（ユースキン製薬・川崎市）勤務に転属になりましたので、よろしくお願ひ申しあげます。住所も変りました。（※名簿欄をご参照ください）（58・10・16）

阿部すみ江さん（山南町谷川）丹波を出て四十数年になります。『山ざる』をなつかしく読ませていただいております。趣味は演劇ではなく観劇でございます。専ら観ること聞くことのみでございます。（58・7・8）

青木、慧氏（市島町）職業柄から書籍、資料がふえるばかりで別記の仕事場（事務所）に移りました。（※名簿欄をご参照ください）係）不便な土地ですがやとスペースだけは確保。隣接の牧場から『丹波香水』同様の自然香水が流れこんでます。（58・10・13）

秋元多美子さん（旧姓佐野 氷上町常楽）何時も種々お世話様になり厚くお礼申しあげます。（総会には）出席させて頂かねばと存じますが、お友達と沖繩へ行きます約束をして、旅行社に申し込みましたので悪しからず。（58・10・27）

芦田坦氏（青垣町）十一月六日（総会の翌日）青垣町に墓参にまいります。（58・10・17）

芦田律子さん（青垣町）松山さんの御逝去を知り驚きました。大木の倒れた様なさみしさを感じ、御意にそえず心残りが致します。残された生を、松山さんの様に力一杯堂々と最後まで生き抜きたいと思います。（58・10・24）

井本義一氏（柏原町）日課であります早晩ジョギング時、頃は盛夏、昇り始める陽光に天地一切が真紅に染まる時の壮大な感慨を拙い歌で……………

暁暗破るわが靴音に
鶏鳴一声励ましくれる紅陽の丘

（58・10・17）

石田専太郎氏（春日町（昭和五十七年十一月以来ザイル共和国三井物産キンサシャ駐在所長として元気で勤務しています。昭和五十八年三月、家族も同居し公私ともに充実した日々を送っています。（※石田氏の赴任中留守をあずかって下さっている方は左記の通りです。石田氏の情報についてはこちらにこそ照会ください）係）

雲228相模原市東林間7-18-37 池田利信様

雲〇四二七―四二―七四八一
泉 零子さん（旧姓大野 柏原町）富貴工房も無事一周年をむかえることができました。創作型染、手描の和服、ドレスを染めております。お立寄下さい。（58・10・12）

市原このゑさん（市島町下竹田）御送付頂きます『山ざる』嬉しく拝読させて頂いて居ります。氷上を離れて七十年近く、当地では知る人もなく年と共に忘れる事の多い毎日を読書・手芸を楽しみに過しております。（58・10・16）

上村愛子さん（旧姓山脇 柏原町）子供のころから何となく続けて来たコーラス。現在も大学出たての人や新婚の若い人たちにまじり、女声コーラスをたのしんでいます。五月十五日 青山タワーホールで東京ヴィジュアルデイ合奏団のメンバーと協演でリサイタルをしました。近日中にデイズニールランドの野外ステージで歌うことになっています。（58・10・31）

植木伍鹿氏（山南町）商船学校出で山国丹波柏原の人、大船長中川四郎さん百二十才を筆頭に、百寿に近い人も二三名。私は七十五才以上の親汐会の幹事役を勤め海洋会の相談役もして居ます。今年九十才を数えましたが、血圧も目下上々。未だ数年は働けると頑張つて居ます。朝食前に一時間以上、庭の一抱え以上もある桜の木が道路にかぶさり、紅葉して葉を散すので、道路の掃除が良き運動になります。（58・10・17）

植村章子さん（春日町）この五月以来六ヶ月近くの入院生活も、あと少しで終るらしいです。厳しいリハビリに杖ついて歩けるようになりました。あとは訓練次第との事です。皆様の御厚情に応えるため、一層自重致します。人生には思わぬ落とし穴のあること知りました。いくらもない余生生活を少しでも意義あるよう過しましょう。

杉山様の訃報、思いもかけませんでした。御冥福を御祈り致します。（58・10・18）

◇ いつも立派に出来ました「山ざる」を拝見して委員の方のご努力に感謝いたしておりま

す。編集部の皆様がお仕事の外にこうしたお世話をなさいますのは大変のこととお察しいたします。何卒今後ともよろしくお願い申上ります。

私やつと退院いたしました。病中ご丁寧なお見舞を頂きましてご厚情の程深謝いたします。半年間位は出歩けませんので失礼いたします。僅少なから退院しました印までに（金二万円）送りました。よしなに。（58・12・12）

大岡 弘氏（山南町）至極元氣丹波の秋を思いつつ（58・10・23）

岡田一雄氏（山南町畑内）先般祝寿会に御招待戴き、小生宿痼のため欠席の旨申し上げましたところ、本日鄭重なる御祝品を御恵送下され、洵にありがたく厚く御礼申し上げます。今春茨城に居を移し、会のため何ら尽すところなく一応辞退致すべきかと存じましたが、御厚情に甘え頂戴仕りました。重ねて厚く御礼申し上げます。（58・11・2）

岡本庄太郎氏（水上町）教会も祝され、多

忙になって来ましたが、元気で奉仕に励んでいます。Ⅱインマヌエル高崎キリスト教会牧師Ⅱ（58・10・18）

荻野雄一郎氏（水上町）東京暮らしの方が永くなつてしまいました。昨今「水と緑」に関心をもち、水上町々長にも河川の浄化を訴えておりますが、実行してくれるかどうか。最近町長が変り、若干の期待をしております。（58・10・15）

可部美智子さん（旧姓山下 柏原町）十一月五日より十三日まで京都美術館の女流陶芸展に出品し京都へいっております。（58・10・20）

木村つた江さん（市島町岩戸）去る十月十一日夫急逝いたしましたため、何かと落ちつきませず、心ならずも（総会には）欠席いたします。

市原この多さんにお会いしたいと存じていましたが残念でございます。どうぞよろしくおっしゃって下さいませ。（58・11・2）

久下栄司氏（氷上町）五月からアメリカ（ボストン）へ出向しております。三、四年の予定ですから家族もそのうちアメリカへ移り住むことになりそうです。当分諸通知御辞退申し上げます。また帰ってまいりましたらよろしくお願い致します。（58・10・14）

久保良雄氏（山南町）この十月より勤務地は横浜に変わりましたが住居は変わりません。（第三管区海上保安本部勤務）

（58・10・13）

小前 毅氏（県立氷上農高校長）日頃は本校教育の振興と女子バレーボール部全国大会出場につきましては高配賜わり、厚くお礼申し上げます。お陰様で三月の選抜大会と夏のインターハイ共に準優勝いたしました。これひとえに皆様方のご厚情のお陰と感謝いたしております。（58・10・13）

小南順子さん（旧姓長井 青垣町）十月十六日京王プラザに同級生八人集まり歓談しました。（58・10・19）

後藤春雄氏（山南町）御無沙汰して居りますが益々御盛んな趣き何よりと存じます。遠くて簡単に（総会に）出席できず残念です。（上田市在住・58・10・11）

光田恵子さん（旧姓細谷 柏原町）はじめはお便りいただきました。こちらに来て五年、やはりふるさとからの便りにはなつかしさを感じます。これからもよろしくお願い申し上げます。（58・10・24）

河野征美氏（市島町）年一回（主に正月休み）は田舎に帰ります。丁度丹波栗を送ってもらって故郷のことをなつかしく思い出しているところです。正月に帰るのがこの年になっても楽しみです。（58・10・14）

佐藤菊子さん（旧姓泉 氷上町谷村）ふるさとをはなれて三十五年今秋五十才を迎えます。国立の地に小さな白い教会が立ちました。更に新しい歩みを始めようと夫と共にはりきっています。静かな文教地区国立市におこしのせつはお立寄り下さい。（58・10・9）

坂本正幸氏（春日町）田舎へ帰る毎に何か変っている。構造改善や近舞緑の工事で古の面影がなくなっていくのは残念だと思うのは都会に暮す者の感傷でしょうか。（58・10・18）

坂本重雄氏（柏原町）本年五月から学部長をやらされており、公用で上京することはあっても私用で外出する機会が減りました。運動不足がらですのでデニスコートに出るよう努めております。（58・10・11）

笹倉良正氏（山南町）六月に転勤のため左記会社に移りました。今後は出来るだけ参加させていただくつもりです。

日本タイトリスト㈱ 四〇四一六二三三
（58・10・19）

清水正男氏（山南町谷川）今年三月で七十二才となりました。去る九月三十日会社を引退致しまして現在は自宅で余生を楽しんでおります。趣味の一端としてゴルフのほかに、目下囲碁・謡曲に撞球（ビリヤード）の勉強を始めております。早く人様の仲間入りがで

きますようにしっかり勉強したいと楽しみにしております。(58・10・12)

莊 克衛氏(柏原町屋敷) 毎号に続き十四号も故常岡文亀画伯の優美なる表紙を見せて

戴き、何より有難く思つて居ります。尚其上常岡幹彦画伯の「竜虎八天狗」の旅は特に興味深く拝見しました。(58・5・17)

松山幸逸氏の計報に驚きました。御冥福を御祈り申します。(58・10・11)

莊 正衛氏(柏原町屋敷) 当会の創立が明治二十九年とて本年で九十七年。もうすぐ百年を迎えることになる。古い資料を見ると亡父の名も会員の中に見られるので、二代に亘つてお世話になっていることをよろこびとしています。(58・10・10)

須原 清氏(市島町下竹田) 竹水先生逝く多情却似縁無情

菅野きめゑさん(旧姓土元 柏原町本町) 三月のお彼岸に戦後初めて郷里へお墓参りしました。柏原の町・学校・神社・お寺・鍾ヶ

坂等車で巡り、余りに変つて居るのに年月の隔りを感じました。知人とも一人も出逢うことなく、木の根橋と八幡様に郷愁を感じました。(58・10・8)

杉浦 一氏(柏原町) 合併により十月一日より川鉄商事株式会社勤務することになりました。(58・10・28)

杉上能章氏(水上町清住) 故郷を後にして二十八年、又山の芋の季節が到来しました。ふる里ではギリ芋の通称で、その品の良い味がなつかしく想い出されます。今度の台風では春日町が被害甚大だった由。お見舞申上げます。仕事柄大阪、神戸までは行けてもなかなか水上郡の土を踏めず申し訳ない限りです。子育ても終わりますれば総会にも出させていたゞき度く存じます。(58・10・12)

杉本喜八郎氏(春日町長) 当町は九月二十八日の台風十号による大豪雨をうけ、被害甚大目下復旧に大車輪の最中ですが、町民一同元気に故郷回復に闘っております故、御休心下さい。(58・10・8)

勢川武彦氏(山南町)(山ざる)の内容が充実してきています。編集ご苦労様です。活字の大型化は是非とも必要に思います。(58・5・4)

瀬々妙子さん(旧姓中井 柏原町) 九月二十八日、台風十号の影響による集中豪雨で「柏原は災害の少ない町」というイメージが十五億円にのぼる被害額で「危険」というイメージにぬりかえられたようです。恐怖そのものだったと想像されます。日本全土に何がおきているのでしょうか。(58・10・24)

田中さち子さん(旧姓浅葉 山南町) 三十才も終る頃になってゴルフを始めました。年と共に夫婦で楽しめる何かスポーツと思い、ゲートボールの年でもないのです……。やってみるとやはりおもしろい遊びでした。(58・10)

高尾久子さん(旧姓川村 柏原町) 祝寿の皆様お目出とうございます。十月十一日未明、主人の母が八十三才の生

涯を閉じました。何かと雑務整理に追われて
おります。(58・10・23)

高野康慶氏(旧柏中・柏高女教諭) 去る六月NHK家庭部から係員とカメラマンが来宅。お達者クラブで私の一日の仕事の一端を放映したいからと、約三時間半撮影し七月十九日午前と午後放映されましたら、丹波・但馬・京阪神・岡山・広島などに住む旧柏原高女・中学の卒業生から、電話で十七名、六十三名の方からお手紙をいただき、懐旧の念にうたれました。(58・10・13)

高橋博子さん(旧姓井本 春日町) 毎日忙しく家業に励んでいます。今年のお盆は帰省できずでしたので、来年の五月の「オリンピックで逢いましょう」の同級学年の同窓会には、是非帰省したいと思っています。森田さん、大輪さん(旧姓) ほか昭和七年会の皆さん柏原にてお逢いする日を楽しみに。

(58・10・27)

谷垣正雄氏(柏原町) 昨年四月退職してから念願の何か書こうと思って居りましたが、

暇のある割合には筆が進まず、そのうちに予想もしない病気で入院を余儀なくされ、退院後も余病に悩まされました。しかし、この程漸く日中事変応召中の想い出だけをまとめて、これを小冊子として自費出版の準備をして居ります。題して「水と兵隊」。万一御希望の方がおありでしたらお送り致します。
密〇三―三三―一〇七六へご連絡ください。
(58・10・17)

樋 玲子さん(旧姓酒井 春日町) 長女の結婚式を二週間後に控えており、何となく気忙しくしておりますので、今年の郷友会は残念ですが欠席させていただきます。

(58・10・29)

常岡 亮氏(柏原町上小倉) 会員諸兄姉、皆様いよいよ御清祥のことと御慶び申し上げます。実は小生五月頃より病を得、六月十三日国立横浜病院外科に入院、目下治療中に(淋巴腺系統の障害) 漸次快方に向いつゝあり。十月下旬には一応退院の見込みですが、退院後も余後療養のため、当分外出は叶わず、止むなく本年も欠席させて頂きます。

田 敏夫氏(柏原町) これからは人間関係が大切。「山さる」の一層充実した編集を期待します。(58・5・9)

東郷 茂氏(加西市王子町) 傘寿のお祝いをして下さるとのこと。御厚情に対しあつく御礼申し上げます。(58・10・11)

徳田八郎衛氏(柏原町) 北海道で三度目の夏を迎えようとしておりますが、礼文、稚内根室、富良野、函館どこへ行っても東北人のねばり強さと県人会の組織の強さには脱帽します。

関東在住の頃は年四回だった丹波への帰省も、札幌からでは年二回と落ちぶれてしまいました。
はるか北の国から関東氷上郷友会の益々御発展を祈ります。(58・6・27)

畑 武司氏(春日町黒井) 昨年十月に懶店舗システムを設立いたしました。商業施設、店舗の企画設計施工と店舗の什器設備機器の

展示販売をいたしております。今後とも何卒よろしく御指導下さい。

糊店舗システム ㊞〇六―八六二―七八九
八千五百一十豊中市稲津町一―一―三。郷友会の皆様、来阪帰丹の節はぜひ共お電話下さるか、お立寄りをお待ち申し上げます。

(58・4・4)

林 進氏（柏原町） 上京して十四年になりますが、今まで貴会など故郷の催しに出席することなく過してまいりました。東京で所帯をもっていますが、柏原のことなど時おりなつかしく思い出します。（58・10・7）

東田 実氏（山南町上滝） 五月初めに茅場町の山種（美術館）へ親類の者の出品作品を見に行きましたら、常岡幹彦氏の出品作品もあり、本当にうれしく拝見致しました!!

(58・6・15)

久安敏夫氏（柏原町） 大変いい記事を拝見致しました。当方、お天気のいい時にはハイキングにて浩然の氣を養っております。皆様によろしく（58・5・4）

広瀬すがのさん（山南町） 祝寿の会おめでとうございます。ますます御健康に留意されますことをお祈り致します。

丹波栗を食べながら、しみじみ秋の夜長をふるさと懐かしく思い出にふけています。

(58・10・13)

広瀬昌彦氏（柏原町） 初めて案内いただきましたが、どのような組織なのでしょう。郷友会のしくみ等のパンフレットがあれば送って下さい。（58・10・13）

福島弘三氏（兵庫県人会事務局） 氷上郷友会の皆様には平素から多大なる御支援をいただき深く感謝いたしております。

(58・10・25)

藤尾ちえ子さん（旧姓岡沢・西脇市） 年に一回はるばる訪ずれてくれる山ざるを、どんなになつて嬉しく迎えますことまでございましょう。学窓を出ていつの間にか六十余年が夢のように流れてしまいました。思い出は走馬灯のように浮んでまいります。気分だけは不思議と年をとらないのか、女学生時代そ

のまゝに漂よって、何もかも昨日の出来事のように思い浮び、クラスメートの方々のお顔も、学生時代そのまゝに目の前にちらつきます。でも一人一人と数少なくなっていくのがたまらなく淋しいです。どうぞ皆様くれぐれもお大事に健康で御長命下さいますよう、只々お祈り申し上げます。（58・7・7）

長い夏休みがすんで寄宿舎に帰り、窓から小学校を眺めつゝ、楽しかったお休み中のことでも次々思い浮かべ、帰りがたくて仕方なく、またしては涙が溢れた入学当時のこと、また学校での楽しかった行事の思い出に耽ける初秋の夜でございます。若き日の皆様のなつかしいお顔を思い浮かべつゝ……。

明日は娘、孫娘の三人で、南九州に旅行の予定です。初めての空の旅です。

(58・10・19)

堀井隆川氏（山南町） 活字体をもう少し大きくしたらいかゞですか。時代の傾向として活字体は全部大きくなっているように思えます。そのほうが読む側として読みやすいし、多くの人がより読んでくれると思います。

(58・5・7)

前田和秀氏（柏原町）58・9・4付で高等看護学院長（自衛隊中央病院）に就任し、現代医療の中で心の優しい看護婦造りに努力することができ、非常に嬉しく思っています。優秀な若い人材の入学を心待ちにしていますので、氷上郡の人々が少しでも受験されますよう祈って戻ります。（58・10・11）

前田 亘氏（氷上町常楽）丹波を出まして二十五年になります。あまり帰ることもなく山ざるをお送りいたゞいたときは、なによりもうれしく読ませていたゞいております。また総会ですが、休日以外は出掛けられませんので失礼します。（58・10・19）

松永富子さん（旧姓谷垣 春日町）先日台風で丹波の方では被害があったとのこと。御親戚で被害のあった方もあるかと思えます。心からお見舞い申し上げます。一日も早い復旧をお祈り致します。（58・10・21）

松本金吉氏（柏原町）体の調子が思わしくありませんので、毎日ブラブラしています。（58・10・7）

松山 裕氏（故幸逸氏ご遺族・長男）父幸逸他界の際は色々お世話になりました。うございました。小生、十一月六日より海外出張の予定です。（58・10・30）

三澤智子さん（旧姓荻野 春日町）先日はお電話いたゞきましてありがとうございます。主人の勤務で横浜にまいりまして早や六年になりますが、子供が五才、三才と小さく家をあけることはまだ無理でございます。（58・10・19）

宮野 近氏（柏原町）「親の恩」「師の恩」「郷友の恩」を大切にし、誠実に生きて行きたいと思います。

私も大学院卒業者四百人で構成する「修法会」の常務理事をしています。総会時には北海道から沖縄まで多彩なメンバーが集まり、旧交を暖めあい、毎年夏には研修旅行も行っています。

「良き師、良き友、良き人間関係」は貴重な財産であると思います。（58・5・26）

森本マサさん（故和三氏ご遺族）長いこと

御厚情を頂きました森本和三こと、去る六月十四日に亡くなりました。三年前心筋こうそくを致しましてより、入院退院の繰り返しで、今度も風邪をひいて急に悪くなってしまう。生前中お世話様になりましたこと深く御礼を申し上げます。（58・10・8）

余田士郎氏（喜重氏ご遺族・長男）本年三月三十一日午後九時四十五分脳内出血のために（喜重）死去致しました。なお翌四月一日午前五時四十五分に、同じく脳内出血にて配偶者すゞ子も死去致しました。なお、三月三十一日付にて正五位勲五等双光旭日章の叙位叙勲が（父）にありました。（58・10・16）

横山幸三氏（青垣町）皆様御無沙汰しておりますが、私も病氣も回復して軟式テニスを楽しんでいます。

昭和五十七年十月十日全東京大会優勝（七十才以上）

昭和五十六年七月十九日東京テニス百才会主催、第十八回内閣総理大臣杯全日本長寿テニス大会に優勝。第十九回同大会（昭和五十七年七月十八日）準優勝。第二十回大会は雨

のため中止。(58・10・11)

吉田勇司氏(市島町)十月二十一日に十一回目の研修に出席するためドイツに向います。十二回目の研修との間に一週間あるため、スイスに行きたいと思っています。帰国は十一月十三日の予定です。(58・10・11)

若森敏郎氏(山南町)御無沙汰しております。小生昨年十月電源開発株式会社を停年退職し、出向中の日本プラント協会にて二度目の人生を迎えました。欧米との貿易摩擦を少しでも解消する手段として、開発途上国援助も大きな柱で、本年にかけて小生の仕事も益々忙しくなります。皆様の御声援により任務を全うしたいと思っております。(58・10・17)

渡辺政子さん(旧姓荒木・氷上町)昨年(五十七年)の夏、結婚後はじめて郷里丹波(石生の神社)での同窓会に出席させていただきました。生郷小学校と生郷中学校の校歌を口ずさみますとき、たゞたゞなつかしく、胸いっぱいになり、涙がこぼれそうで、ふる

さとに友あり、関東の地にも友ありの幸をあらがたく、いつまでもたいせつにしたいと思います。(58・10・11)

計 報

謹んで御冥福を祈ります

影山三郎氏(市島町)五十八年六月十日

永井輝江さん(市島町吉見上田)五十八年六月二十二日

三崎復造氏(柏原町)五十八年一月十七日

余田喜重氏(市島町中竹田)五十八年三月三十一日

松山幸逸氏(春日町東中)五十八年七月

細見賢二氏(氷上町成松)五十八年八月

一年遅れの丹波のニュース

昭和五十八年の丹波新聞紙上から、日を追

って目に止まる記事を拾い出してみました。脈絡のない事柄の中から、いずこも同じ世情がうかがわれたり、これぞ丹波と思える、地方色の出ているもの等、日頃ふるさと丹波のニュースには縁遠い一人として、興味深いものがありました。見出しの羅列に終り、わかりにくいことは否めませんが、おぼろげながら、丹波での動きが察せられましょう。

*

〆十二月〆 (昭和五十七年)

〆暖かい家庭の味を 氷上郡各駅で里子三人を出迎え、尼崎市にある社会福祉法人神戸同教会子供の家に入所している子供達は十二月二十八日から一月四日まで丹波で過ごす。(12・30)

〆一月〆 (昭和五十八年)

〆丹波の古代考えるシンポ 丹波の古代を堀り下げるシンポジウムが柏原町北中の県立丹波文化会館で開かれた。考古学の第一人者や指折りの郷土史家ら八人が参加。(1・1)
〆六駅に変電所を建設 福鉄局電化計画を促進。

〆複線電化二年遅れそう 佐々木民社党委員長丹波入りし語る。(1・9)

○増加する少年非行対策 問題家庭への浸透方法など課題 地域ぐるみで運動 丹波青少年本部さらに活動強化。

○丹南町大山下 建設進む川代ダム。

○伝統の奇祭楽しむ 山南町応地の「蛇なしい」。(1・13)

○氷上郡広域消防本部まとめ 火災は大幅減少 急救出動は増加。

○優秀な和牛量産へ。(1・16)

○行革と定員減で最悪 厳しい今春の人事郡外からの転入見込めず 氷上郡教委が異動方針。(1・20)

○生田県議が引退表明 藤原氏は県議選に。

○郷土食で給食味わう 献立にぼたん汁も。

○学校給食にまごころ 山南町調理士がみそづくり。(1・23)

○六十年九月に完成予定 近舞線の多紀連山工事。(1・27)

△三月▽

○国鉄多田山トンネル トップ切り貫通式。

○しめやかに法要 山南町谷川首切り地蔵尊。

○四十年ぶりに初午祭 春日町上野 稲荷神社奉賛会が。(3・3)

○氷上・多紀郡の郵便局も近くオンライン化

簡易保険の業務。(3・6)

○丹波各町予算町会始まる 氷上町総額六七億円に 老人保険で大幅伸び青垣町・人権啓発モニター制 一般会計は二四・七%減 山

南町・和田中学校舎を全面改築 市島町・吉見小学校舎改築。

○夢をのせてひた走る 丹波路に壮大なドラマ、篠山ABCマラソン“四回目を迎えた”篠山ABCマラソン大会(篠山町・同町教委・朝日放送主催)は篠山城跡前をスタート同町

藤坂を折り返す四二・一九五キロの日本陸連公認マラソンコースで行われた。(3・10)

○県平均を大幅に上回るペース 六六%のほ場整備完了。

○市島町正法寺 銅板にふき替え 落慶法要営む。

○山南町の竹村玉水さん 連盟会長の席ゆずる 茶華道の歩みに尽力。(3・13)

○県議選出場の顔ぶれ固まる 氷上郡は四氏の争いに 八年ぶりの投票へ 多紀郡は二氏の対立。(3・24)

○有機農業に興味抱く 東京から体験実習市島町上鴨坂中井さん宅で三村さん。

○老人福祉センターふなき荘完成 春日町新

才地区に。

○近舞線で集団移転 丹南町小畑地区に宅地確保。(3・27)

○選挙人名簿登録者数 氷上郡五五・〇九八人多紀郡三一・七四三人。

○教職員の移動 氷上郡関係校長移動者 山

本増治和田小学校長 荻野恵五郎上久下小学校長 畑中寿雄前山小学校長 清水忠男北小学校長 青木博市島中学校長 吉良益夫春日中学校長 北村昌東小学校長 辻健一南小学校長。(3・31)

△四月▽

○伝承のまつりばやし譜面化 柏原の本庄さん。(4・7)

○今年も一千万粒フ化 市島町観光協会ワカサギを大杉ダムで。(4・10)

○県議に藤原三郎氏(五七)村上旭氏(五三)。

○メインの基壇を復元 市島町三ツ塚史跡。(4・14)

○春日町長に杉本喜八郎氏(六二)再選。

○カラオケ・ジョギング教室を開講 氷上町公民館。(4・21)

○町の文化財を集大成 山南町。(4・24)

○市島町長に荒木真次氏(六六)。(4・28)

△五月▽

○細胸・足長の傾向 身長全国平均より低い
水上郡小中学生の体格。(5・1)

○一千万円以上は一九一人 丹波の高額所得者上位に医師ずらり。(5・5)

○石生パイパスの変貌 サービス業が相次ぎ進出。(5・8)

○総事業費三〇九億円(五八年〜六〇年)産業基盤の整備 教育文化の振興など(水上広城市町村圏)。(5・12)

○丹波の田んぼ乗用田植機が普及。

○柏原の西楽寺で地藏菩薩の軸物見つかる。

○学級数は小中とも減少。(5・22)

○資源有限時代に福音 生き返る廃家電の山水上町関西環境CHRで再利用化。

○全国初の釣り事業 谷川の天神池で。

○昭和初期をしのんで還歴の詩を額にして母校へ 昭和八年の前山小卒業生。(5・26)

○豊かな集落へ青写真 水上町六十年スタート。

○向学心燃やす二六〇人 丹波OB大学。

○柏原石戸で珍しい石器を発見。(5・29)

△六月▽
○「水上郡の名木・名林百選」決まる 顕彰

保存措置を。

○青垣町 山垣城跡堀の跡や北宋通宝など白
滋・青滋の破片も。(6・2)

○ふる里を話題に交歓会 大阪水上郷友会
三〇周年会。(6・16)

△七月▽

○福知山までの複線化工事の促進を要望 複
線電化促進期成同盟会。

○医療短大設置を促進(丹波総合開発促進協)。
(7・3)

○黒井駅にバラ園作る。(水上農高)

○春日町棚原で奈良時代の農耕用スキ、土器、
木簡など出土。(7・7)

○奥野タトンネル貫通。(7・17)

○春日町鹿場の公民館が完成。

○佐治川水害予防組合建設省へ陳情。

○丹波青垣の四季を発刊 開田青垣中学校長。

○丹南町議選 一八人誕生。(7・21)

○鼓峠を全山公園化。

○山南町阿草の奥山農園に世界中の樹木が集
合。(7・24)

○柏原病院 外来診療棟完成。
○山南町に海洋センター設置計画。(7・28)

△八月▽

○水上町長に田中玲三氏(七〇)町議二〇人
も誕生。

○水上農高女子バレー部 全国高校総体で準
優勝。(8・11)

○丹波の保育園運営に四苦八苦 著しくなっ
た定員割れ。

○南海工業㈱柏原工場竣工。(8・14)

○水上郡の五十八年産米品種別作付面積「日
本晴」がトップ「コシヒカリ」は頭打ち。

○旧柏原中四八回生(昭和二十三年卒)三五
年振りの大会。

○市島町北奥子供会 正法寺で座禅会。

○神姫バス乗客減少で深刻。(8・21)

○春日町に歴史民俗資料館を建設。(8・25)

○市島町上竹田加茂神社境内に公民館完成。

○成松の愛宕祭り五万人で賑う。(8・28)

△九月▽

○丹波の百歳老人は三人 太田さつ(青垣)、
二森よし(市島)、山本はん。(黒井)

○水上町観光協会 達身寺案を検討。(9・1)

○水上郡教育委員長に藤本正也氏。(六九)

○日本最初の銅版世界地図(写)を青垣町の
民家で発見。

○不自由な目でゲタ作り 盲人や老人に贈る

春日町の荻野達次さん。(9・4)

○丹波マツタケ不作 高温干ばつが影響。

○氷上町の佐中精一さん「丹波今昔記」を発売。(9・11)

○氷上町稲継のバイパスぞい 小型スーパ―が出店計画。

○有機農の実態に学ぶ 全国から関係者らが参加 市島町で現地研修会。(9・18)

○日ヶ奥トンネル着工 近畿自動車道舞鶴線市島町分全線を発注。(9・22)

○山南町和田荻野富子さん「八八歳の年輪」にじむ歌 老いてなお意気盛ん 歌集「続裏山」を刊行。(9・25)

○十月

○台風十号丹波に水害のツメ跡 土砂崩れ住宅被害続出 河川や道路決壊も 農林被害は五三億以上 土木被害は二二億。(10・2)

○柏原町長に谷口務氏(五九) 町議一六名誕生。(10・6)

○水分れ開発で青写真作り(県建築士会柏原支部)。

○丹波の人口一七、三六〇人(五十八年八月末) 氷上郡七五、〇八三人 多紀郡

四二、二七七人。

○松井拳堂翁の遺墨集を発行。(10・9)

○十一月からOA機器使用 印鑑証明や住民票(春日町)。(10・13)

○六十三年春開通 近舞線丹波地区。(10・16)

○言語障害や性向問題 三才児中心に三七六件。

○あかぎ国体で初優勝 氷上農高女子バレー部。

○柏原高校体育館竣工。(10・23)

○都会の人に特産物 丹波の味を定期便で届ける 柏原農協。

○親子そろって日展入選 柏原の磯尾氏。

○「白の風景」新作を三六六 東京銀座で個展 常岡幹彦氏。(10・27)

○水稲 やや不良の作柄。(10・30)

○十一月

○なごやかに歓談 関西氷上郷友会。

○塩津トンネル貫通。(11・3)

○山南町梶 生活改善センター完成。

○十二月 (11・6)

○高齡化問題で論議 青垣町福祉大会を開く。

○故郷の話ではずむ 関東氷上郷友会が総会。

(12・15)

○旅館建築などに制限 畜舎公害にも指導 春日町環境保全条例つくる。

○立派な新校舎が完成 市島町吉見小学校。

○青垣町農業委員会が結婚相談所 後継者確保に力コブ。(12・18)

○七年ぶりに丹波から代議士 佐々木、西山、谷氏当選 自民二議席を回復。

○過ソ解消に全力をそぐ 三度目の挑戦で金的 意欲燃やす西山敬次郎氏。

○柏原高校五十九年度は一学級(家政科)減に商業科は一年間存続。

○焼却炉から死体が ゴミにえい児を捨てる 春日町町営ゴミ焼場で。(12・22)

○新成人は一四三八人 帰省者の参加も増加 丹波県民局調べ。

○高い森林保護への意欲 代倒駆除や樹種転換 氷上町が松くい虫対策で山林所有者にアンケート。

○丹波で楽しい正月を 施設の子六三人 四七世帯が受け入れ。(12・25)

*

美味無比
木の実酒

栗の三年酒

◆ 丹波焼壺詰
◆ 徳用びん詰

1、
3550
0000
0000
ml ml ml ml

小鼓の西山酒造場

氷上郡市島町中竹田
電話(〇七五)六〇三三二二代

この木の実酒「小鼓くりの三年酒」は、
純粹の丹波産栗の実、梅の実など山野の
木の實を原料として秘醸したもので、常
用すれば胃腸を整え健康と美容と活力を
増進します。

ストレートでお飲みいただきますと、さ
わやかな梅の香りがひろがり、あと口に
はコクのある栗の味が残ります。

お正月のお屠蘇には、縁起のよい
「小鼓栗の三年酒」をお用い下さい
キット好評です。

1級建築士事務所

桂建築総合研究所

ビル建築の設計・監理
事務所建築・賃貸ビル・商業ビル・都
市再開発にともなう新築ビル・アパー
ト・マンション・住宅…等の新築ビル
経済性を尊重した優美な設計

株式会社 桂 工 務 店

店舗の内装設計・施工
住宅の新築・改造・増設施工・都市美
観工事にともなう街路・オーニング・
看板・電飾看板等の設計・施工
システム化された近代経営

株式会社 商店建築社

商業建築・建築関係図書出版・月刊誌
商店建築・TAU発行・名作シリーズ・
単行本写真シリーズ…等多数発行

春日町中山出身 村上末吉

住所 東京都世田谷区南烏山2-33-11 TEL 308-8820

建築材料販売工事

建設大臣許可 第 1834 号

中央建材工業株式会社

取締役
東京営業所長 荻野 武
(市島町出身)

本社 名古屋市千種区高見 1-6-1
電話 052 (761) 6181 (代表)

東京営業所 東京都中央区銀座 7-14-3
電話 03 (543) 8106 (代表)

大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1-8-15
電話 06 (443) 6665

仙台出張所 仙台市高松 2-11-15
電話 0222 (73) 5724

札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7-12
電話 011 (271) 3961

新潟出張所 新潟市米山 5-1-25
電話 0252 (45) 1705

松本出張所 松本市渚 1-1-42
電話 0263 (25) 0351

◆エレクトロニクスパーツの専門商社◆

株式会社 三 誠

東京都文京区湯島2-24-13 (834) 3171 (代表)



取締役社長 足立 誠一



☆主要取扱メーカー

日本航空電子工業株式会社

多治見無線電機株式会社

株式会社フジソク

日本開閉器工業株式会社

ライン精機株式会社

本多通信工業株式会社

Sonnenschein

Slider® BASEBALL UNIFORMS

あらゆるスポーツウェアのご相談は当社へ

 **Onaji Mai Mai®**

園児服・園児用品
スクールウェア・スクールブラウス

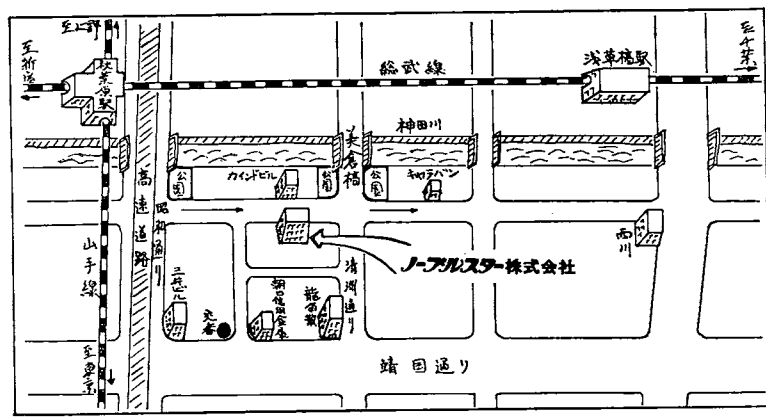
NOBLE **ノブリスター株式会社**

取締役社長 吉住重造

(春日町中山出身)

本社 〒101 東京都千代田区東神田 2-4-7

電話 03 (866) 9121 (代表)



Hataly ユニークな自走機構—溶接前の開先取りに最適!

ハタリー

ハタリーのヨ形鋼開先加工機

1500

おかげ様で、ハタリーの高精度開先加工機の納入実績が、今年2月現在で1500台を突破しました。全国の鉄工所各位がご使用の開先加工機10台につき7台までがハタリー製品です。

ハタリー機販株式会社

代表取締役 古倉克實

〒274 千葉県船橋市習志野台6丁目22-8

Tel 0474-63-9291

埼玉営業所 04947-5-1151

仙台営業所 0222-94-7600 (山喜内)

名古屋営業所/大阪営業所/広島営業所

日本海運振興会会長

日華観光協会会長

漆川学園名与学園長

日本長老会代表理事

有 田 喜 一

東京都千代田区平河町二丁目四番

電 話 (二六三) 九 四 一 七 番

東京都世田区成城四ノ一ノ一五

電 話 (四八三) 一 二 〇 九 番

兵庫県氷上郡氷上町谷村

電 話 〇七九五八(二〇〇〇)八番

株式会社 つるや洋装店

株式会社 東逗子駅前ビル

東 海 産 商 株式会社

代表取締役 小 谷 正 己

逗子市逗子 1-6-4

電話 0468. 71. 3075

71. 6449

日本メキシコ協会会長
日本バレーボール協会会長
アジアバレーボール連盟名誉会長
国際バレーボール連盟副会長
日商岩井株式会社相談役

西川 政一

(住) 東京都杉並区善福寺二ノ三五ノ一六
電話 (三九〇) 一三一六番
(寓) 静岡県伊豆高原
電話 〇五五七―五三一―二五六〇番

学校法人国学院大学理事長
国学院高等学校々長
学校法人国学院大学幼児教育専門学校々長
財団法人日本私立大学連盟理事
財団法人私学研修福祉会理事

小林 武治

東京都武蔵野市境南町一―三〇―二〇
電話 〇四二二―(三二) 四七九六番

調布市社会福祉協議会理事

調布市豊かな老後のための市民会議実行委員

老人問題研究所

木村 つた江

東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5

電話 東京(300) 1505番

のびのびベビー・こどものファッション 白旗

株式会社



本社 〒158 東京都世田谷区瀬田1-22-19
TEL 03-700-3121 代表
ファッションセンター 〒158 東京都世田谷区玉川台1-13-12
TEL 03-708-1151 代表

代表取締役 山本清士

郷友の皆様 生命保険に加入されるなら
ぜひ当会をご利用ください

明治生命保険相互会社 代理店

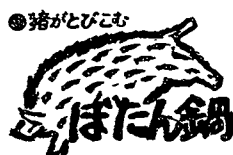
ひ か み 会

代表 伴 仲 信 次

東京都千代田区飯田橋2丁目9番 春日建設(株)内
電話・東京 264—4011(代)

城下の面影を残す 奥丹波柏原の宿

山菜料理からアマゴ・ヤマメ・鱒・鯉・鮎・等川魚に始まり
香り高い松茸・丹波牛の肉料理、ボタン鍋



日本観光旅館連盟会員

三 友 楼

兵庫県 氷上郡 柏原町 八幡筋 電話：丹波柏原 (07957) ②1110～2

客室数17室、収容人員60名、駐車場完備、送迎用マイクロバス

株式会社 近藤写真製版所

取締役社長 近 藤 勇 夫
(国領出身)

東京都新宿区下宮比町8番地
電 話 (260) 6 2 8 1 番 (代表)

株式会社 三 葉 水 道

代表取締役 橋 爪 忠
(氷上町黒田)

千葉県八千代市八千代台西 7-5-29
電 話 0474-84-7121番

南海工業株式会社

社 長 石 亀 義 明

本 社：東大阪市大蓮東 2 - 12 - 4

J I S 工 場：電話 06(721)5454 / 5455

柏 原 工 場：氷上郡柏原町拳田小字浅川160-1

電話 07957 (2) 3744

高級婦人服製造卸

つるや産業株式会社

取締役社長 足 立 三 治

東 京 店 品川区西五反田 7 - 22 - 17

東京卸売りセンター12階

電 話 (03) 494 - 3285 ~ 7

本 社 川崎市中原区新丸子 701

電 話 (044) 722 - 6371 (代表)

社長室直通 711 - 3324

松 尾 フ ル ー ツ

上 田 鉄 太 郎

(春日町野山出身)

〒102 東京都千代田区麴町 6 丁目

(国電四ッ谷駅前)

電話 自宅03 (261)―2830番 店舗 (264)5060―1 番

東急建設株式会社

専務取締役

芦 田 重 秋

〒150

東京都渋谷区渋谷一丁目十六番十四号

渋谷地下鉄ビル内

電話東京〇三(四〇六)五一一一(大代表)



スカイライン・グロリア・ラングレイ・アトラス他
日産車購入については遠慮なくご相談下さい。
お子様の学力向上には公文式の算数・国語教室で

足 立 和 巳

自宅 府中市栄町一―一五―二七

電話(〇四二三) 六四―七二二七

ミワ電気工事株式会社

代表取締役

足 立 謙 悟

〒220

横浜市西区岡野一丁目八番地八号

電話 〇四五(三二二)五二九一番(代表)

川汽企業株式会社

足立勲平

勤務先 東京都港区西新橋虎ノ門高木ビル
電話(五〇四)一一三八一
藤沢市鵠沼藤谷一一七十四
自宅 電話〇四六六(二二)六四六一

交通毎日新聞編集部

次長 足立静雄

東京交通毎日新聞社
東京都港区赤坂二ノ四ノ一(白亜ビル)
電話(584)代表五四四一番一〇七
札幌・仙台・高崎・横浜・名古屋
大阪・広島・岡山・高松・福岡

明治生命保険相互会社
認定生命保険士

足立正

事務所(〇三)一六六三―四三三―五
自宅(〇四二七)一六六―八一四九

トヨーサッシ株式会社

取締役 足立徹

〒100 東京都千代田区内幸町二丁目二番二号
電話〇三(五九一)三三八八番(大代表)
電話〇三(五九一)三六三三番(直通)

弁理士 芦田坦

事務所 芦田後藤池田特許事務所
東京都港区西新橋一ノ四ノ一〇五
第三森ビル
電話東京(03)五九一―一五〇七・一五二三

綾木健

新明和工業株式会社川西モーターサービス
副所長兼商品企画室長

取締役 生田清弘

〒100

東京都千代田区大手町二丁目六番一号

朝日東海ビル十八階

電話(〇三)二四二二―二四四一(代)
テレックス二二二一―五一九〇

有限会社井上商店

社長 井上和三

三鷹市深大寺三八〇六
電話 〇四二一―三三―三四八八

植木紙工所

代表者 植木一夫

東京都文京区白山三丁目一ノ十三
電話(八一―)八五七三番

小田富士夫

日製産業株式会社

取締役社長 大木正徳

〒105

東京都港区西新橋二丁目15番12号
(日立愛宕ビル)
電話(〇三)五〇四一―七〇〇二番

パイオニア株式会社
人事部人材開発課

課長 大西修三

本社 153 東京都目黒区目黒二丁目四番一号
電話 〇三(494)一一―二番(大代表)

埼玉日産モーター株式会社

取締役社長 大西俊治

本社 与野市上落合九三五番地
電話〇四八八(59)五一〇三番(代表)

(株) パンオーディオシステム

代表取締役 岡林逸男

〒330 大宮市盆栽町五一四(押田ビル)
TEL(〇四八六)六五一三六九四(代表)
〒167 東京都杉並区善福寺四一八一九
TEL(〇三三)三九四一六八四四

株式会社大丸東京店
営業特販部

課長 荻野泰次

〒100 東京都千代田区丸の内一丁目九番一号
電話 大代表 03二二二八〇一一番
内線 03二二八四〇・二二八四一番
直通 03二七一三〇二五番

丹波興産株式会社

代表取締役 柿原陽

〒150 東京都渋谷区桜丘町三十一番十五号
住友生命渋谷ビル
電話(03)四六四一・一七七一番(代表)

参議院議員

梶原清

同和火災海上保険株式会社新宿支店

支店長 神田敏博

東京都新宿区歌舞伎町一丁目一番一五号
〒一六〇 (東信同和ビル)
電話 (〇三三)二〇九一七六〇一番

文芸局担当部長(吉川英治全集担当)

小 杉 仙 生

株式会社 講談社 文芸局
〒112 東京都文京区音羽二―一二二
電話東京〇三(九四五) 大代表一一一

日本学士院会員

理 学 博 士 小 谷 正 雄

自宅
東京都大田区山王三ノ三六ノ四
電話東京(七七一) 六六五二

D・M・Sダイレクト・メール・サービス株式会社

取締役 業務推進本部長 坂 上 勝 朗

本社 〒101 東京都千代田区神田小川町一ノ十一
電話 東京(293) 二九六一番(代表)

静岡大学教授

坂 本 重 雄

自宅
静岡市小鹿三丁目四―五(〒四二二)
公務員住宅八―二六
電話 〇五四二(八二二) 八〇五八番

銀座店のご案内

丹波さき山
山家のお酒

さ さ

ぎんざ6―2あしべビル2F
電話(五七一) 四四二三

須 原 清

東京都中野区南台五の三〇の六
電話(三八一) 一六二一番

勢川武彦

〒164

中野区東中野二ノ一七ノ二〇
TEL 三六一—八六七六番

田中篤郎

大菱印刷有限会社

田中寛

〒101

東京都千代田区神田東松下町十
電話(二五六)九三三七番

高見産婦人科

医学博士 高見嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話(九五六)〇六〇〇番

高見齒科

高見幸男

〒176 練馬区錦町二—八—三
電話 九三三—六七三一番

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一—二四—一七
電話(三三三)一〇七六番

株式会社 環境計画コーポレーション

取締役 谷 口 捷

〒150

東京都渋谷区道玄坂一―一五―一七
プリメーラ道玄坂ビル八〇四
TEL (〇三) 四七六一―一〇四〇

江南ハウジング株式会社

常務取締役
営業本部長

千 種 倫 幸

東京都千代田区麹町五丁目七番地
〒102 紀尾井町TBR七―二号
電話 代表 (一一三〇) 三六三一

常 岡 幹 彦

参議院議員

田 英 夫

東亜国内航空株式会社

整備本部 整備工場

次 長 豊 島 幹 雄

〒144

東京都大田区羽田空港一丁目七番一号
空港施設第二綜合ビル
電話 〇三(七四七)六九七五
座席予約受付(七四七)八一―二番(代)

株式会社日本製鋼所

監査役 中 井 良 平

〒100 千代田区有楽町一―一―二

三井日比谷ビル9F
電話 (〇三) 五〇一―六一―一(代)

ザ・カード株式会社

取締役社長

西尾久之

郵便番号一〇四
東京都中央区銀座二丁目四番一号
銀楽ビル七階
電話東京(03)(561)八〇〇二番(代表)

日本舞踊教授

西崎祥

〒223 横浜市港北区大圃町五〇〇一八
電話(〇四五)五九一六六五五
西崎祥舞踊研究所 電話七八一八六〇三

衆議院議員

西山敬次郎

日本行政書士政治連盟 常任幹事・会計責任者
東京行政書士政治連盟 幹事長
東京都行政書士会 副会長

行政書士

畑光

事務所 東京都港区虎ノ門五丁目八番八号
第三文成ビル三〇二号 電話(〇三)四五六七番
自宅 東京都練馬区土支田一丁目五番一九号
電話(〇三)九二五八七七〇番

黒川木徳証券株式会社

畑秀夫

本社 東京都中央区日本橋一丁目一六―三
電話 東京(〇三)二七八一七八四六番

波多洋三

文京区春日二丁目一七一―二
電話(〇三)八一―二八六〇番

株式会社 テラモト
東京支店 営業部

次長 広瀬 五男

東京都墨田区東駒形一丁目九番二号
〒130 電話(〇三)六二四―七九一(番代)

都営八王子霊園・東京霊園正門前

青葉山 住職
真照寺 堀井 隆川

〒193 東京都八王子市元八王寺町三―二三九七
電話(〇四二六)六三一八四〇二

藤田 正雄

自宅 〒215 川崎市麻生区王禅寺六七八―四
電話(〇四四)九五四 四九五七番

代表取締役社長 松下文雄

本社 〒351 埼玉県朝霞市膝折三―七―五
電話(〇四八四)六六一―一五五一(代)

エクステリア専門商社
株式会社 大洋

東京国税局 問税部
特別国税調査官

船越 祥郎

東京都千代田区大手町一―三―二
電話(〇三)二一六―六八一―一
内線二二三六〇

動力炉・核燃料開発事業団
総務部長

水船 隆昌

〒107 東京都港区赤坂一丁目九番十三号
(三会堂ビル)
電話五八六一―三三二一(大代表)

株式会社興水タイヤ商会

取締役経理部長 三宅良夫

〒210 川崎市川崎区元木一ノノ一
TEL 〇四四・二三三・六三二(代)

ブライダルファッション
(株)シャルム商会

常務取締役
東京店 村上昇

東京店 〒164 東京都中野区弥生町二ノ五
電話(〇三)三七四・〇二一五(代)
本社 〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話(〇七五)二二二・〇二一五(代)

東京トヨペット株式会社
企画室

課長 宮野近

東京都渋谷区神泉町二一番七号
〒一五〇 電話(03)四六七・二六一番(代表)

株式会社 スズヤ洋装店
株式会社 イイダスズヤ

取締役社長 村上豊

電話〇三(七三三)四〇四八・(七五一)四七九八

曹禅寺住職

村上大憲

東京都大田区池上七丁目二番十号
電話 〇三一七五一・〇六七八番

エイ・エム・ティ株式会社

取締役社長 百木雅崇

東京都港区浜松町二ノ三ノ二三
フクダビル
電話(四三一)三五五一番

だいしち
大七証券株式会社

投資顧問部
安 田 功

〒103

東京都中央区銀座三丁目一〇番九号
電話 東京(五四五)九一一一(代)

伊藤忠エレクトロニクス株式会社

営業第三部長代理
国内営業第一課長

部長役
山 内 隆 行

東京都渋谷区渋谷二丁目一五番一号
〒150 東邦生命ビル27階
電話 (〇三) 四〇六一八二四一
TELEX 2427268 CIETOK J

山 中 一 朗

227 横浜市緑区美しが丘三十四六一一
電話 (〇四五) 九一一一四四九三番

大協石油株式会社
運輸部

部長
義 積 保

〒104

東京都中央区八重洲二丁目四番一号
常和八重洲ビル
電話 東京(274)五二一一(大代表)

社団法人日本プラント・技術部
プロジェクトマネジャー

技術士
(電気部門)
若 森 敏 郎

〒100

東京都千代田区有楽町一丁目八番一号
日比谷パークビルヂング(三階)
電話 東京(213)八五五一番(代表)

名刺広告募集
協賛広告料四千円

交通事故

もし、あなたが加害者だったら……

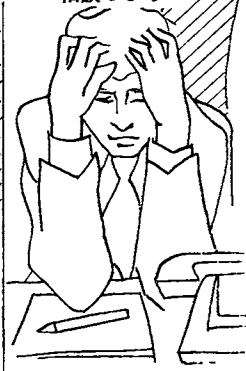
水かけ論の
あげく…



仕事中また
電話がくる…



いったい誰に
相談しよう…



そんな時、まかせて安心

AIUの自家用自動車保険

貴方の財産を守る

火災保険から

万一の災害・病気に備えて

生命保険まで

あらゆる保険について お気軽に ご相談ください



代理店 **永愛友商事** 代表者 **KK前田和市**

〒107 東京都港区赤坂 3-1-2 AIUビル 電話585-0740(代)

編集後記

▼松山さんのいない編集会議
はいっぴくなく緊張がみなぎった。議論伯仲、皆責任を感じ進んで仕事を分担した。こう

なりや全員編集長、まかしとけ！というわけで、それぞれに原稿依頼、執筆、名簿や音信の整理、広告集めなどに散った。さて、年明けて集まった原稿に驚いた。集まりすぎたのだ。例年の優に倍はある。長文も多い。どうする？松山流にバサバサ削るか、先輩の原稿はそうもいくまい。みんな力作、どうだ、全部載せちゃうやう！、送料こみだと一冊千円越すかもしれないが、今年は寄付金もふえたことだし、足りなければそこで考えよう、というわけで、この特大号ができあがった次第。▼一四号まで、松山さんがこの山ざる誌をほとんど一人で育てあげた。八方手をつくし、マメに足を運んで原稿を集め、まとめていた。▼雑誌が完成したところには、手伝った後輩共を引きつれて一杯やるのがきまりだった。三年ほど前、飲み屋でこんな一幕があった。ロレッツのあやしくなった松山さんが突然大音声で「おいっお前たち！山ざるを頼んだぞお！俺はもう死ぬっ！」「……まだまだ、松山さ

んは大丈夫ですよ」「お前たちに俺の命がわかるもんか、俺はもうもたんだ！」と。酒がまわれば後輩共も気がねしない。「わかりました、わかりましたよ。松山さんが亡くなったら石塔に酒かけましよう。ね、松山さんの石塔に水かけても似合わない」「馬鹿いうな！もったいない、石に酒かけて何になる、そんな酒があったら皆にふるまえ！」。

▼銀座・新橋界限で俺を知らねえ飲み屋はモグリだぞお、なんて豪語していた松山さんも去年の春は、さすがにハシゴの足がにぶっていた。それを気づかう後輩たちも、「今日はおとなしくお帰りなさい」という。「馬鹿野郎！俺を置いてく気が、まあいい、俺は帰る皆しっかりやんな、山ざる頼むぞお！」と。快気炎を残して去りゆく松山さんの後ろ姿、それを見送る後輩たちは、心なしか春の夜風が身にしみた。

▼山ざる一四号の編集後記にある一句は、松山さんの去年三月ごろの作である。

春めきて やゝ遠のくや医家の門

▼巻頭に掲げた俳句は、松山さん十二年前、昭和三十八年大晦日作の自筆、かくしゃくたるころの松山さんの心のひだが読みとれる。

▼一四号の松山さんの編集後記にこうあった。「次号は一五号という区切りのいい号でもあるから、内容も頁数も増えた堂々たる記念号的なものをと考えている」——何と、それが山ざる誌の主、松山さんご本人の特集を組む“堂々たる記念号”と相なった。

主はいま 蓮華のほとり ほととぎす
郷友あつめて さゝ交しいぬ 玄二

山ざる 第15号

昭和五九年四月一五日発行

編集委員

足立正 小田富士夫
坂上勝朗 田中篤郎 常岡幹彦
鶴田ゆき子 宮野近 渡辺隆男

関東氷上郷友会 発行

〒102 東京都千代田区飯田橋二丁目九番

春日建設株式会社内

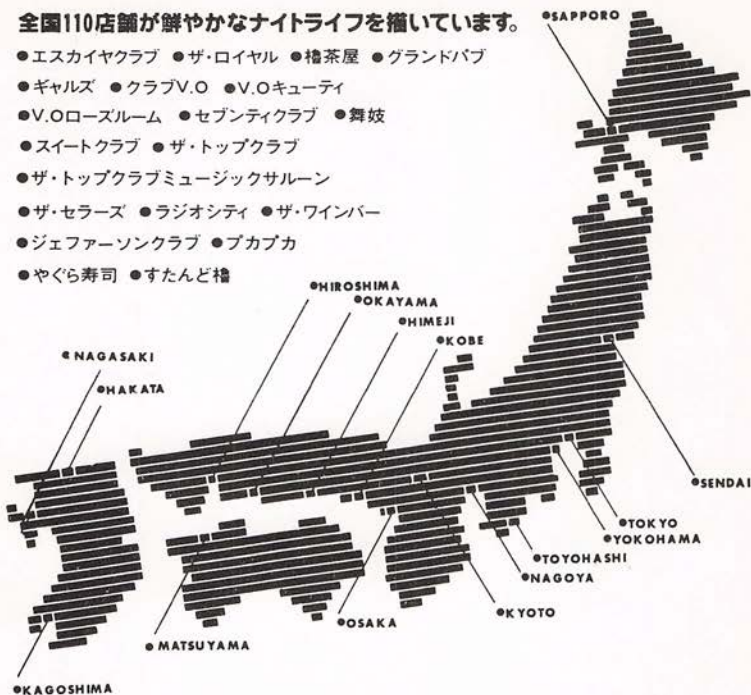
電話 東京〇三(264)四〇一一番(代)

振替番号 東京 一―二二二―一三〇番

製作 株式会社 二玄社

全国110店舗が鮮やかなナイトライフを描いています。

- エスカイヤクラブ ● ザ・ロイヤル ● 椿茶屋 ● グランドバブ
- ギャルズ ● クラブV.O ● V.Oキューティ
- V.Oローズルーム ● セブンティクラブ ● 舞妓
- スweetクラブ ● ザ・トップクラブ
- ザ・トップクラブミュージックサルーン
- ザ・セラーズ ● ラジオシティ ● ザ・ワインバー
- ジェファソンクラブ ● ブカブカ
- やぐら寿司 ● すたんど椿



先進のエスカイヤクラブを頂点に
圧倒的な魅力と価値を秘めて
日本全国をネットする
大和実業グループ

取締役 社長 岡田一男 (春日町三井庄出)

大和実業グループ 大和実業株式会社

本社/大阪市北区芝田2丁目1-18 西阪急ビル TEL.(06) 372-8571(代)

DAIWA JITSUGYO GROUP



コスモ原宿 昭和58年当社施工

綜合建設業 建設大臣許可第233号

春日建設株式会社

代表取締役 伴 仲 信 次 専務取締役 伴 仲 信 義

東京都千代田区飯田橋2丁目9番3号・電話東京(264)-4011番(代表)